女學

（[illegible]）

明治二十四年一月二十四日發兌

第貳百四拾五號



女鑑第貳百四拾五號

目　錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社出版部へ御直送之事

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事

○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事

○別に領收證出さす若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書并送料御送附の事

○未納税の來書は一切受取不申候事

定價
- 一冊　金拾錢
- 六冊三ヶ月分　前金五拾七錢
- 十二冊半年分　前金壹圓拾錢
- 廿四冊一年分　前金貳圓拾錢
- 全國無遞送料

廣告料
- 五號活字廿字詰一行　金參拾錢
- 三頁　金八圓
- 半頁　金拾貳圓
- 一頁　金拾六圓
- 表紙一頁

明治三十五年一月十九日印刷
明治三十五年一月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　鈴木眞一

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

家庭全書第拾壹編●新刊發賣●

家庭の快樂

●雅裝頗美本極彩色口繪挿入●定價金參拾錢●郵税六錢

人生世間快樂とするもの何ぞ限らん而して家庭の快樂より勝れるはあらざるなり抑々家庭團欒の快、團欒の樂如何にしてか之を得べきぞ是れ此書の編する所以なり諺に謂はずや笑ふ門には福來ると快樂の中何ぞ幸福の存することなからんや既に一家の快樂を有す此心を以て一國に及ぼさば爭でか國家の至幸至福を獲るに難からん其原動力の存する所は何曰く主婦其人に外ならず世の婦女子幸に一讀して快樂を享受するに吝なる勿れ

家庭全書既刊目次

第壹編 明治禮式
第貳編 育兒の栞
第參編 婦女の玉章
第四編 茶の湯の栞
第五編 裁縫と手藝
第六編 和洋料理
第七編 明治書翰文
第八編 贈のしるべ
第九編 生花と盆石
第拾編 家政一斑

雅裝美本●毎編彩色口繪挿入●正價一冊●金三十錢郵税六錢
●郵券代用一割增

言文一致研究會編纂●第四版發賣●

言文一致

袖珍美本●全一冊●正價貳拾五錢○郵税四錢

●帝國文學評 緒論には編者が年來の宿論を掲げ言文一致體の利を說き第二章以下は普通文の作法を論じ手紙其他雜文の例を示し終りに諸名家の記事論說文を擧げたり通じて五章整然たる小冊子なり言文一致熱の盛んなる今日將來文運に嘱目する士は必ず一讀すべきなり言文例中には達意文としてのみならず美文として恥かしからぬものあり

◉明治卅五年一月改正 發兌圖書總目錄 郵券貳錢御送附次第無代呈送す◉

發兌元 東京市神田區駿河臺南甲賀町八 寶文館● 大阪市東區備後町四丁目 吉岡書店

稟告

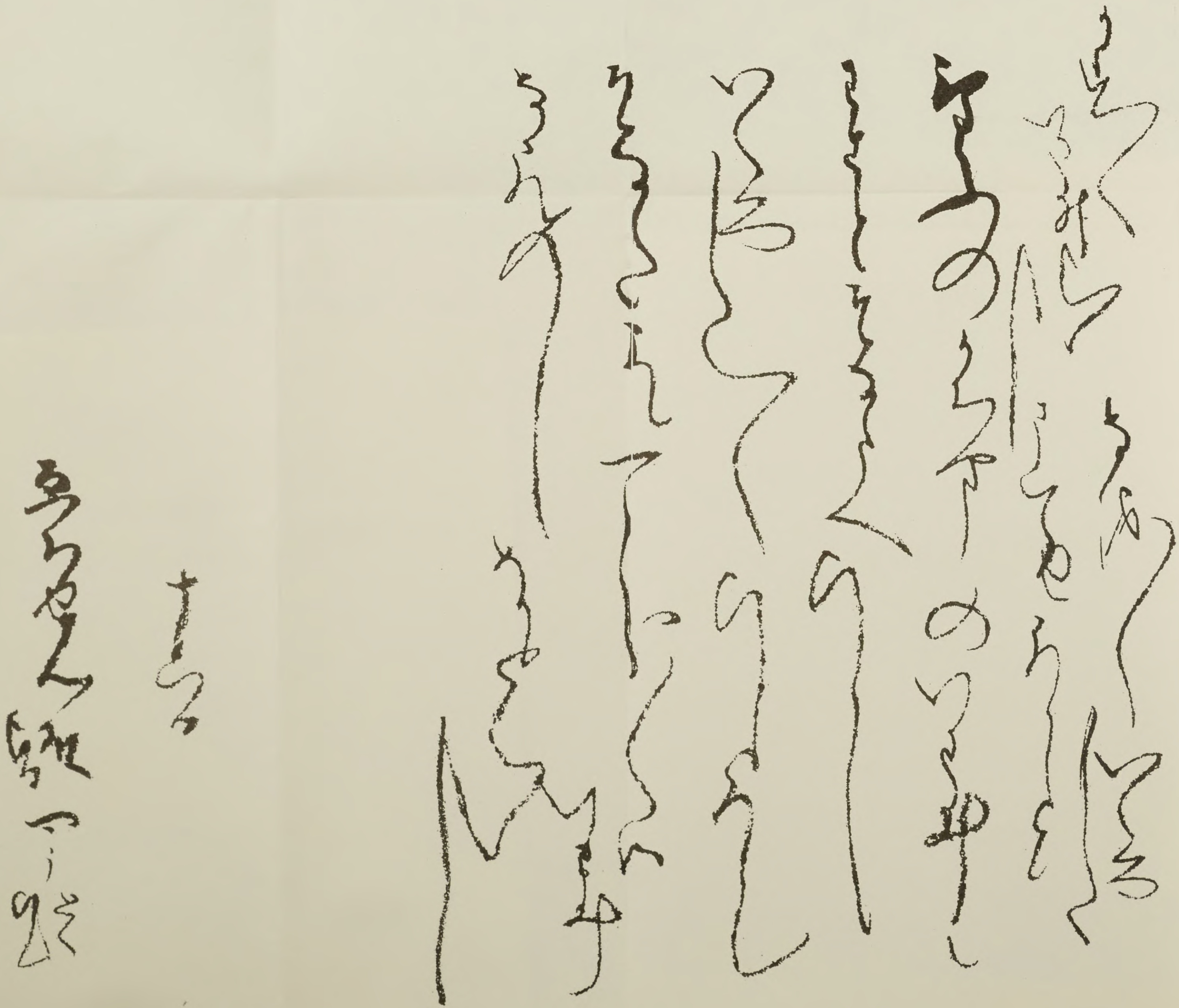
女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

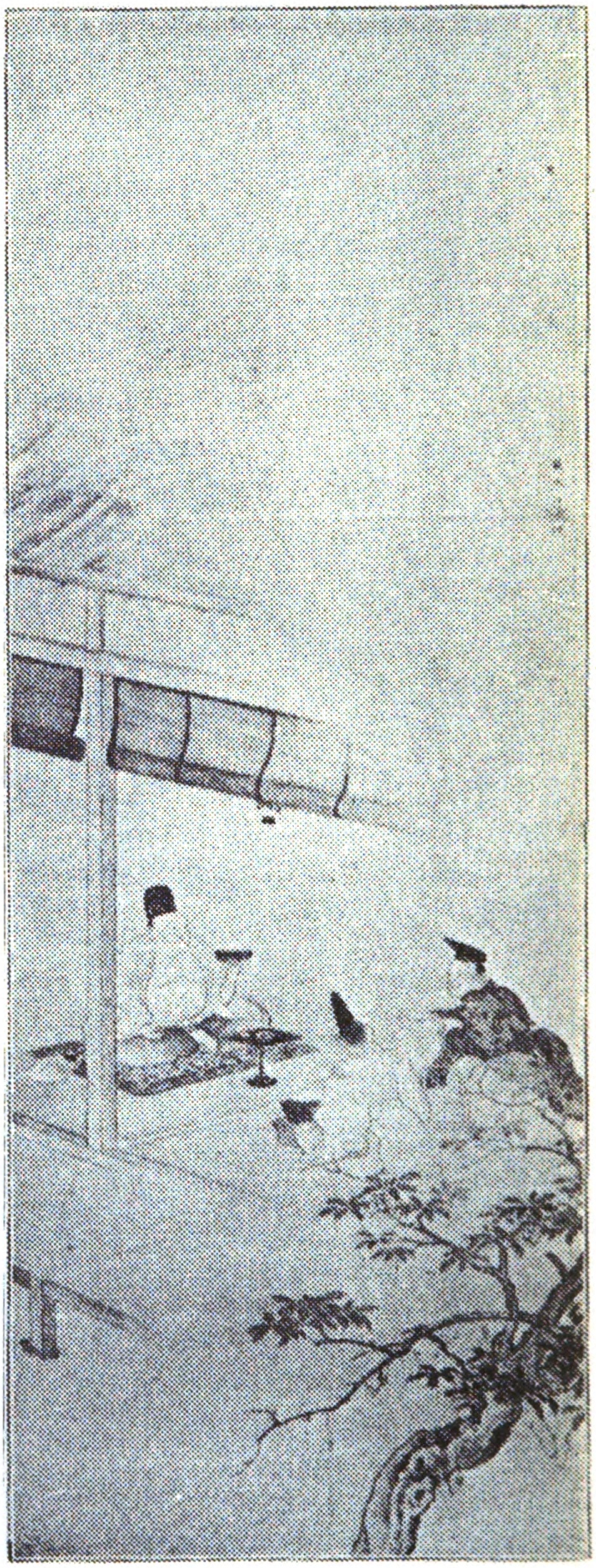
追伸

爾來各所より新刊新聞雜誌及圖書等御寄贈は甚だ御手數ながら必ず國光社出版部へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

明治卅五年一月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社出版部
（電話特新橋八八番
電話新橋一六九三番）

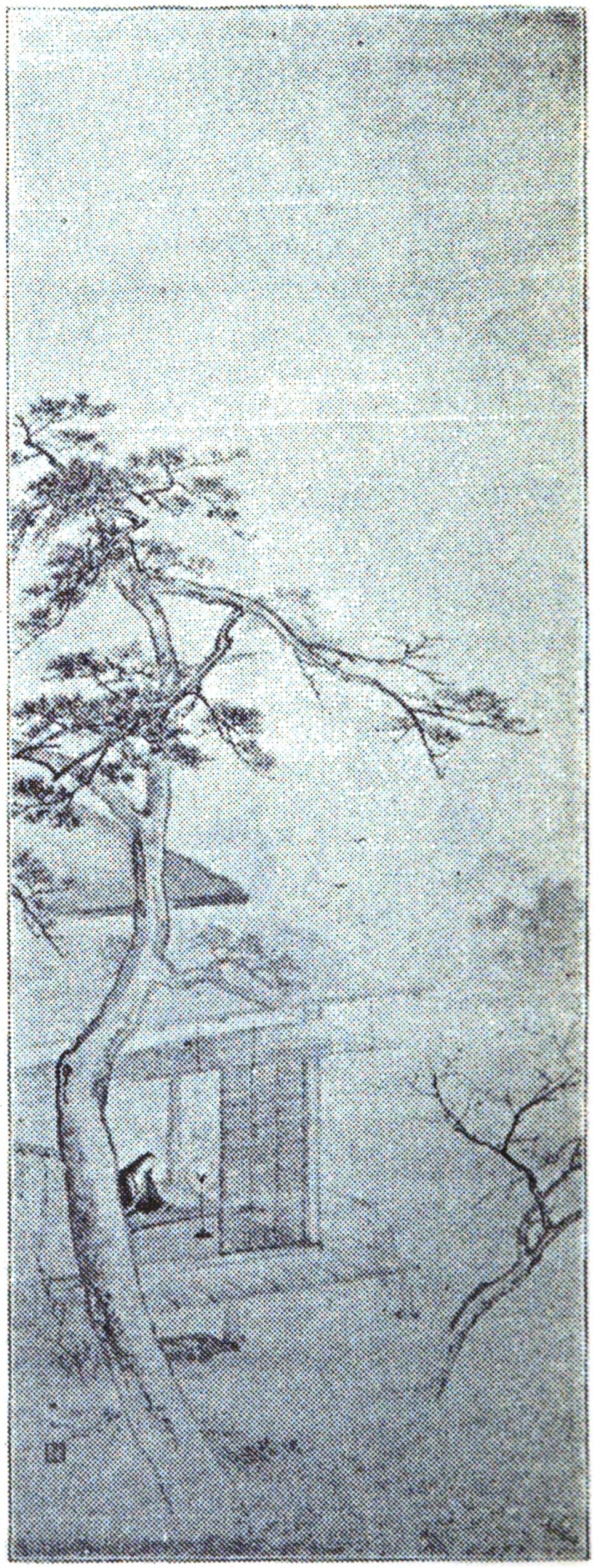




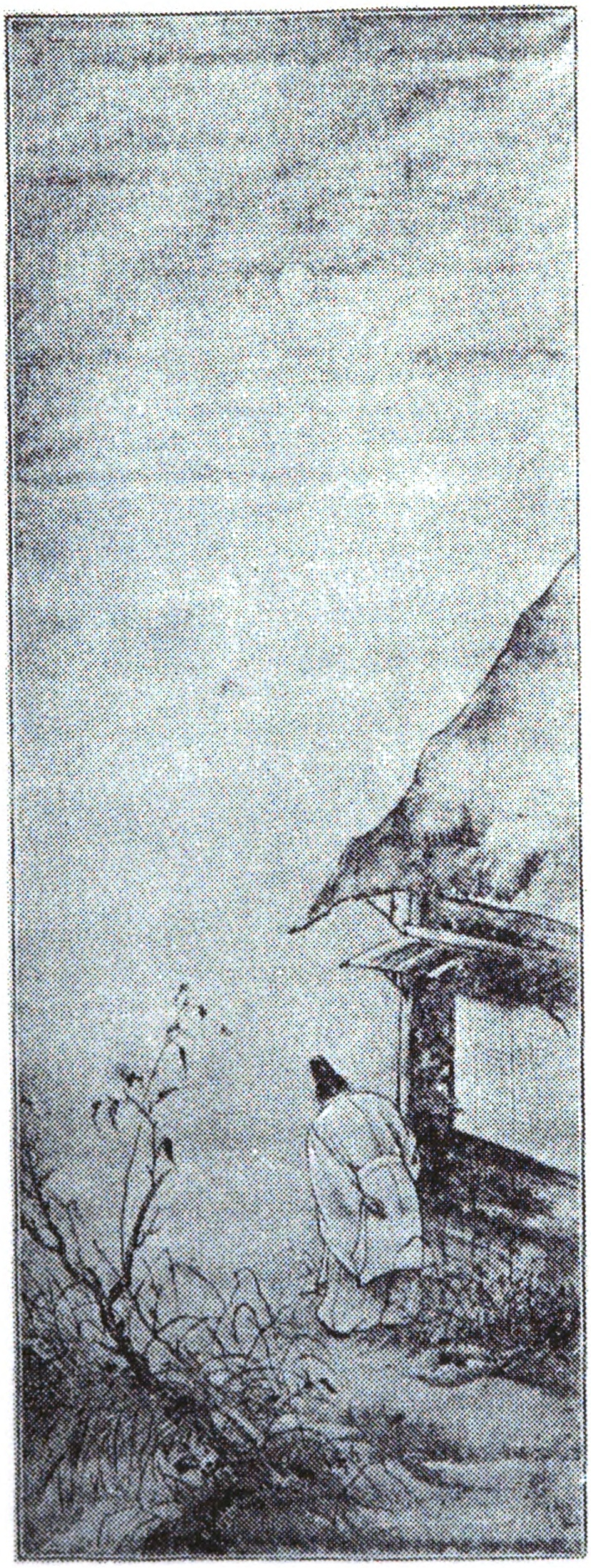
七月



八月



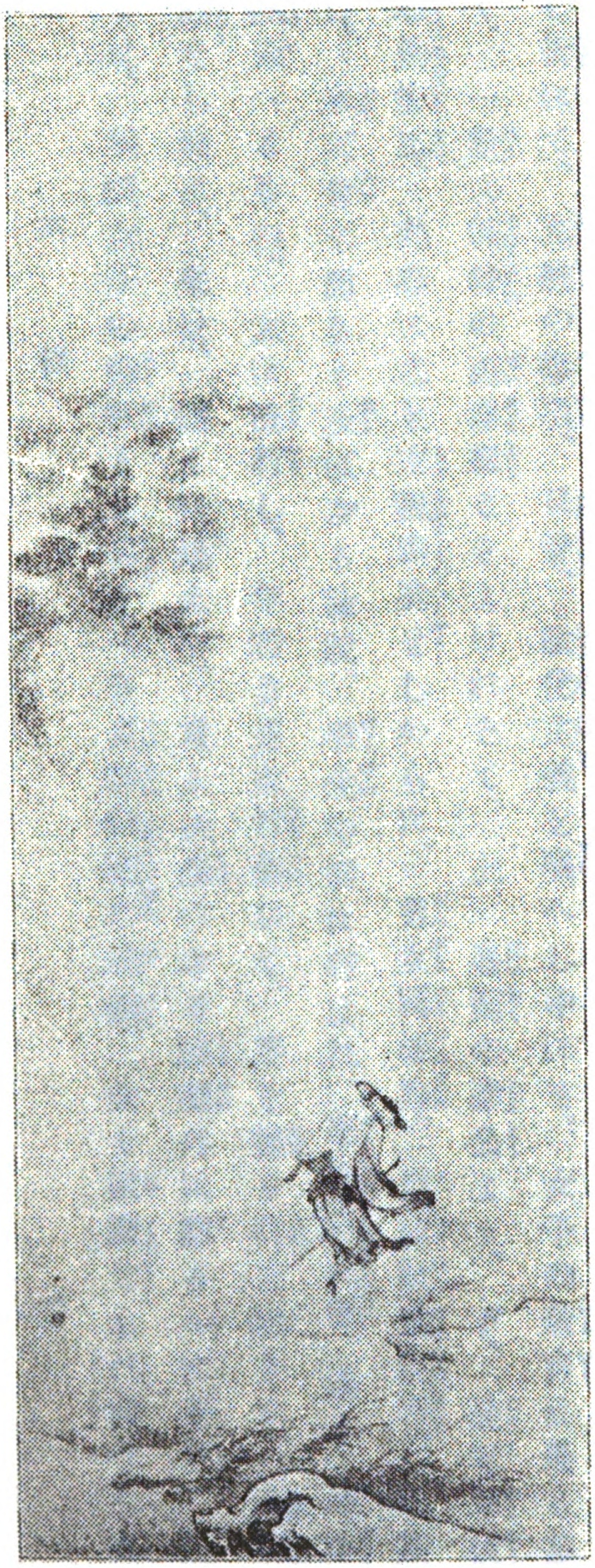
九月



十月



十一月



十二月

女鑑の將來

我女鑑の本領とする所は、讀者諸君の夙に了知せらるゝ如く、女子の德性を涵養し、其の智能を啓發するに在る事、今更めきて言ふ迄もなし。而して、從來、最も力を用ゐたるは、德性の涵養にありしなり。そは故ある事にて、其の始めて世に出でし十餘年のむかしは、我政府、諸外國との通商條約を改正せんと、熱中せし折にて、萬般の事項、只管、歐化主義を唱へし中にも、女子の教育は最も甚しく、一般に純粹の西洋風こそよけれとて、上、臺閣の諸公より、下、公私學校の職員等迄、熱心に之を主張勸奬せしからに、男女同權論、自由結婚說等、我國には、未だ曾て聞きも及ばざる論說、學生の間に行はれ、夜會園遊會、或は、舞踏會抔云へるもの、大に流行し、年若き男女打集ひて、手を握り臂を把りて、酒宴遊興せし程に、果は、聞くに堪えず、言ふに忍びざる醜聲外に漏るゝに至り、斯くては、我國女子の特性とも稱すべき貞靜淑順の美德、全く破壞せられぬべしとて、

識者は、眉を顰めざるはなく、心ある父兄は、急激なる歐化主義の敎育を忌むの姿となりぬ。新舊敎育大過渡の際に在つては、據なき現象とは謂ひながら、誠に嘆くべき有樣なりき。此の時に當りて、滔々たる濁浪、中流の抵柱となりて、頽瀾を既倒に廻さんと期して、世に出でたるは、此の女鑑なりき。されば、智德の兩敎育に就いて、輕重軒輊を爲す由はあらねど、自然、德性の涵養を第一に置き、智能の啓發を第二とせし傾きありしは、免れざりし所ならむ。

抑女鑑は、創立の當初より、漸進の方針を取り、急激輕燥なる歐化主義を排斥せしかば、急進派は之を憚ばずして、常に我を敵視し、其の德育の主張を目して、保守頑固の說と、讒誣中傷せし者も少なからず。是等は、誠に謂ふにも足らざることにて、彼の青色の眼鏡を掛けたるもの丶、天地萬物を、青色と觀るの類にやあらむ。今や時勢は、日に月に進み行きて、政敎文物百度一新し、我大八洲も、亦舊日の面目にあらず。申すも畏こかれど、雲の上に於ける日常の御衣食住を始めとして、萬般の事項、遠く、海外諸邦の長所を採り、用ゐ給ふ折柄なるに、臣民、豈に、頑固の保守說を主持する者あらんや。菅公云はく、凡國家所要。雖

欲渉古今究天人。其自非和魂漢才不能闞其閫奥矣と。公の時代にありては、和魂にして、漢才を具じたる者にあらざれば、國家の要する所にあらざりし如く、今日に在りては、和魂即ち、日本的德性と、洋才即ち、歐米的智能を具備ふるにあらざれば、男女に限らず、國家要用の器と爲すを得ず。さらば、目下教育の主要は、唯、此の和魂洋才の四字にありと謂ふも、甚しき過言にあらざるべし。凡そ何事にあれ、舊物に戀々して、保守に偏するの不可なるは、多辯を費す迄もなけれど、一概に舊物を破壞して、只管、新奇に移り行くも、亦善良とのみは謂ふべからず。たとへば、女子教育の如き、七去三從の舊き主義を現時に應用せんとするは、彼の結繩の政は、以つて亂麻の緒を治むべからずと、古人の論せしにも似て、其の不當なること謂ふに及ばざれど、さればとて、極端なる急進說を、今遽に家庭に學校に實施したらんには、さなきだに、風俗の婬蕩壞亂、其の極に達せしとも謂ふべき今日、家庭學校とも、如何なる狀態に立至るべき乎、略想像するに難からざるべし。要は能く、我國固有の德性を涵養し、之に加ふるに、海外諸邦の長所を採れる教育に倚つて、智能の啓發を圖り、保守に偏せず、燥急に陷らず。日新

開明の時運に伴ふて進行するこそ、能く、其の中庸を得たる者と謂ふべけれ。女鑑の期する所、亦實に此に存す。讀者諸媛、請ふ、之を將來の誌上に驗し給へかし。



論說

女子の樂み

文學博士 西村茂樹

凡そ人を觀るに、其の樂む處に於いて、これを見るときは、能く、其の人物の高下を知ること易し。是は、男子にても女子にても同樣なり。故に人は、尤も其の樂しむ所を愼まざるべからず。人たるものは、日々、たゞ事業のみに、役々として一生を畢るべきものに非ず、必ず、其の人に相應なる樂みありて、是によりて、平日の勞を忘れ、其の身の健康を養ふことを得るものなり。男子の樂みにて云ふときは、讀書を樂み、山水を樂み、詩歌を樂むの類は、樂みの上乘なる者なり。書畫を樂み、音樂を樂み、植物を樂み、魚鳥を飼ふを樂み、圍棊を樂むは、樂みの中等なるものなり。飲食を樂み、俗樂を樂み、演劇を樂むは、樂みの下等なるものなり。よからぬ所に出入するを樂み、博奕を樂むは、道德上の罪惡にして、今ここに、論ずべからざる者なり。以上は、男子の事なれば、只、引用したるまでにて、此の文の要點にあらず。此の文の要點は、婦人の樂みのことにてあるなり。

婦人の樂みにも、亦上中下の三等あり。上等の樂みを爲すものは、其の人品も高く、道德も高く、又これによりて、己の才德をも養成することを得べし。中等の樂みを爲すものは、益もなく害もなし。併し、これに僻好するときは、害となること

あり。下等の樂みを爲すものは、害ありて益なし。且婦人は、男子に比すれば、感情の強きものなれば、其の害を受くること尤も甚し。上等の樂みは、男子と同樣に、讀書を樂み、山水を樂み、詩歌を樂むと是なり、是等の樂みは、才學を長じ、人品をも高くするものなれば、固より、上等の樂みに相違なし。然れども、自己に爲すべき職分を忘れて、是に耽るときは、亦害となるあり。婦人にて言へば、一家の家政家事、及び、舅姑良人に事へ、幼兒を養育する等のことは、其の爲すべき職分なり。これをあとにして、讀書詩歌等にのみ心を寄するは、よろしからず。其の次に、書畫を樂み、盆栽を樂み、音樂を樂み、魚鳥を飼ふを樂み、圍碁將棋を樂むが如きは、これを中等と稱すべし。書畫は、詩歌と同樣のものなれども、動もすれば、浪費に陷るの弊あり。故に、これを中等とす。其の他、中等に屬する樂みは、一家の主人ならば、自由に玩ぶことを得べきも、妻にては、此の如きことを樂むの暇なきものなれば、これを言はずともよきやうなれども、又、富家の主婦には、是を樂むの暇ある者あり。但、此等の樂みは、少しく其の度を過ぐれば、皆害となるものなれば、何れも、余り好しからぬ樂みあり。然れども、此のごとき樂みは、いまだ、其の人の品格を下すに至らざるものなれば、敢て、深く咎むるほどの事もなし。

下等の樂みは、やはり男子と同じくして、飲食を樂み、俗曲を樂み、演劇を樂むこと是なり。此の三者は、いづれも、害ありて益なきものなれば、婦人は、こゝに是を愼まんことを願ふあり。飲食を樂むといふことは、若き婦人には、余り聞かぬことなれども、中等以上の婦人には、隨分あるこ

とにて、所謂食好みといふことなり。平日三飯の外に、何か好みて物を食ひ、其の物は、最初は麁物を食ひ居れども、段々奢りつき、遂に、美味珍物を好み食ふに至り、甚しきは、家に居て食することを好まずして、動もすれば、料理店に出で食はんとするなり。然れども、食物のみの樂みは、其の害猶少なし。もし酒を嗜むに至りては、其の害尤も甚し。男子にても、過酒といふことは、其の害を爲すこと甚しきものあり。まして婦人にして、飲酒を嗜好するときは、其の害、男子に勝ること數等なり。是も、若き婦人には、あまり聞かざることなれども、中年以上の婦人には、まゝあることなり。酒を嗜む時は、第一に容儀を損じ、第二に、無益の言をいひ、第三に、人と口論を起し、第四に、金錢を濫用し、第五に、我身の品行を破ることあり。故に、飲食を以つて樂みとすることは、甚、よろしからざるなり。然れども、猶是より惡しきことあり。演劇を樂むこと是なり。演劇を樂むは、男子に於いても、下等に屬することなれども、婦人に於いては、特に害ありて、益なき所の樂みなり。日本婦人として、一人も演劇を好まざる者なき有様なれば、殊に若き婦人のため、是を戒めんと欲するなり(未完)

日本女訓（未定稿）

川崎重陽

五十、人の百行は、誠を本とす。誠とは、たゞ、一すぢに、心を盡して、他念をまじへざるをいふ。忠孝といひ、貞淑といひ慈愛といひ、百般の善行は、皆、誠の一念より發するにあらざるはなし。心に誠あらば、百行、おのづから、道に

かなはざるはなきに至らむ。心に誠あれば、此の上なく高尚なる品性をたもつことを得。誠うせぬれば、禽獸と異ならざるに至るものなり。されば、古人も誠あらざれば、物なしともいへり。

五十一、誠あれば、おのづから、謙遜の心あつし。謙とは、我が身を省み、己が足らざるところ、及ばざるところを覺りて、ますく\、德に進まんとする心ばへをいふなり。ゆゑに、謙德あるものは、人を慢らず、何事にも、みづから先だたず、人に讓りて、ひかへめにす。此の德缺けぬれば、如何ばかり、才藝に長けたりとも、心底、あさはかに見えて、人にも卑まるべきなり。

五十二、誠あれば、慈愛の心、おのづから深かるべし。愛情の溢るゝは、もと、これ、誠の源泉よりす。春雨のしとふり、春風かよふ野邊には、草木もおのづから芽を出し、百鳥も、おのづから、集ひうたふを見ても、慈愛は、實に、萬物の生命あることをさとるべし。さて、慈愛の心を擴めんには、他人の身の上を、我が身にひきくらべて、その悲をも喜をも、我が身に分つ心ばへあるべきこと、最、先なるべし、これを、同情ともいひて、女子のとりわけて、重んずべきことなり。

火災に對する所感

宮田經泰

昨三十四年中、東京市内に起りたる火災を聞くに、その度數、總じて三百四十五回に及び、前年に比し三十三回を增し、内、大事に至らずして、即時消止めしもの百九十九回、かくて燒失戶數は、五百九十五戶に達し、前年よりも百五十五戶を增

し、丙午燒にて終りしもの二百九十三戸なりといふ。輦轂の下、三百五十回に垂とせる火災の、幸ひにして、一回も大火に至らずして熄みたるは、至幸とあすべし。されど、出火の度數及び燒失戸數の、前年に比し增加したることは、吾人の遺憾とする所なり。

次に、右火災の原因に就きて一言せん。その筋の調査によれば、原因中主なるものは、風呂焚場二十、竈十九、煙突十八、炬燵六、洋燈五十、火鉢十一、灰五、焚火十三、燈火三、燐火十四、火消壺七、吹売三十八、其の他五十三、放火七十、原因不詳三十六ありといふ。之を以つて見れば、最も注意を加へざるべからざるものは、洋燈と吹売、次は竈と煙突、次は燐火と焚火等あり。火災の原因中、放火は稍、其の情を異にするを以つて、此に論せす。唯だ少しく、讀者の反省を促すべき必要ありと思はるゝは、失火と家政との關係是なり。

火災の如きものは、事多く意外の處より起る。悉く之を豫防することは難からん。されど、ある程度までは豫防し、災害を減ずることを得べし。而して火の用心は、實に家政の一部に屬す。故に、火災を未發に防がんとせば、之に先つて、其の家政を振肅せざるべからず。家政を紊亂に附しながら、獨り災害の生せんことをのみ怖るゝは、愚もまた甚し。然るに、家政を主宰するものは、問ふまでもなく、各家の主婦たる人あれば、其の不行屆より起れる各種の災害は、當然その責に任せざるべからず。若し口實を設けて、其の責を免れんとする、是れ却つて其の罪を深うするものなり。僕婢の疎忽よりして火を失することあらん。書生の不注意より火を失することあらん。翁媼の過失より火を發することあらん。若くは、車夫馬丁、又

は、來客等も、失火の原因となることあらん。然れども、一体内に在りて、此等を監督するものは何人ぞ。監督するに行届かず、火を失したる後に及んで、蒼皇罪を他に歸するが如きは不可なり。故に、家政の管理者たる婦人は、日夕注意に注意を加へ、災害疫癘の如き、必、未發に防ぐの用意あるべし。たゞ、變に應じ急を救ふ、一日の業にあらず、必や、平素事なきの日に於いて、之が準備を要せん。

思ふに、火災の如き、病疫の如き、豫防すれば、必其の効を收むることを得。十分豫防して、尚は之に罹るものは、所謂天災なり。奈何ともなすべからず。吾人は、唯だ善後の術を盡し、速かに、其の災害を除去するあらんことを希ふのみ。聞く所によれば、東京市内に於ける火災は、近年、概して三百回以上に達し、冬より春に渉りて最も多しといふ。今や、季方に、火災期に際せり。一夜警鐘數回に及ぶこと珍しからず。亦た是れ、聖時の一恨事といふべし。吾人の一言を費せる所以、實にこゝにあり。

史談

伊達政宗卿の夫人田村氏の話（題字參看）

文學博士　大槻文彥

仙臺黄門政宗卿の夫人田村氏は、承應二年癸巳正月廿四日に身まかられ、今年今月二十四日は、その二百五十回忌辰に當る。夫人、名を愛姫といふ。坂上田村麻呂より二十八代、奧州田村郡三春の城主、田村大膳大夫清顯が女なり。容姿世にす

ぐれて、擧止もみやびたり。時に、天正七年、伊達家は輝宗ぬしの世にて、世繼たる政宗卿まだ十四歲の頃なりしかど、淸顯、その並々ならぬ器たることを知りて、伊達家が居城、出羽の米澤に使者を立てゝ、その女を、政宗卿にめあはせむと望み請ふ。伊達家にて評定ありしに、老臣共申すやう、田村家は、會津の葦名、常陸の佐竹なんど、皆敵とせり。これと緣組あらば、當家、また諸家と怨を結ぶことゝありなむと申す。輝宗ぬし、いや〳〵、淸顯、微力もて能く大敵を受けて、嘗て敗られしことあらず、武勇の譽れ餘りありといふべし、我が子の舅とせむこと、喜び思ふ所なりとて、同年十一月、伊達藤五郞成實、遠藤文七郞基信して、出で迎へしむ。野武士ども、路を遮つて妨げなさむとす。迎ふる者、皆甲冑の上に禮服着て、出で立つ。田村の家人、向館内匠と云ふ者、姫が輿を送り來て、伊達郡なる梁川にて出で會ふ。その時、内匠、齎し來し水晶の珠數を取り出して、「水晶の玉のやうなる子をもつて」と祝ひしかば、基信、取りもあへず、「末繁昌と祈るこの珠數」とつけて、やがて、輿を護りて、米澤に歸り着きぬ。姫が年、時に十二歲なりき。後三年を歷て、天正十年正月、目出たく婚儀取結ばれたり。これより、姫を田村御前と稱し、政宗卿が、大きに世に成りいでられし後、北の御方と稱しまゐらせたり。天正十四年十一月、淸顯、病に打臥して、日に重し。遺言すらく、「我が家、敵に犯されぬは、政宗あればなり。我死なば、家の事、すべて、政宗に打任せよ。我、運拙くて、男子持たらず、最愛の一女は、政宗に與へつ。姫に男子多からば、養ひ取りて、田村の世繼とせよ」とて、身まかる。この後は、田村が家人、田村月齋、橋本刑部顯德等、

亡君の遺言にまかせて、伊達に屬き從ひしかど、清顯が室は、相馬氏なりければ、家人の内に、相馬に通ずる者ありて、家亂れむとしければ、天正十六年五月、政宗卿、清顯が姪、孫七郎宗顯をもて、三春の城代とせられぬ。かゝりし程、天正十八年、豐臣關白、小田原征伐の後は、奥州遲參の大小名、多くは領地を奪はれ、三春の地も、沒收せらるゝ事となりて、宗顯は、伊達家に身を寄せて、扶持せられたりしかど、十七歳にて死にしかば、田村の家は絶えてけり。政宗卿は、十八歳にて家を繼ぎ、二十三歳にて、仙道、會津、悉く攻め從へ、その間、出陣數箇度なりしかど、領内善く治まりて、兵食足らはぬ事なかりしは、多くは、夫人が内助の力に因れりと傳ふ。天正十八年の冬、奥州に、葛西、大崎（今の陸前の北部なり。）の一揆蜂起す。政宗卿、關白の下知の下に、一揆征伐せられしに、政宗卿にも、謀叛の心ありと、讒言する者ありしかば、關白怒つて、その翌年、政宗卿を糺問せむとて、上洛せしむ。こは一大事と、人々案じ思ふ。夫人、時に山城の伏見の屋形におはせしが、遙に、密書を政宗卿にまゐらせて、世はまた亂れ侍り、唯、理ありとおぼす方に志し給へ、わらはが此にあるをもて、おぼし煩ひ給ふな。懷劍一口、身を離さず持て侍り、わらはが身は、いかなる目に遭ふとも、人の辱しめをば受け侍らじ、となむ申送られける。政宗卿、これを見て、實に田村將軍の御末なりけりと、いたく感じ思はれたりとぞ。

一書云、夫人田村氏、在㆓伏見㆒、夫人之書至、太守密見㆑之、大喜曰、實坂上故將軍之裔也、左右聞㆓其言㆒、而無㆑知㆓其故㆒、後聞㆓其書之趣㆒、其略曰、方今天下分崩、已及㆓大變㆒、未㆑聞㆓公之去就如何㆒、

宜レ循二公義一、勿下以二妾在一レ斯爲上レ念、短刀常在二袖中一、縱令遇二暴亂之禍一、不レ至レ受二辱於人手一。

羽柴筑前守が、神戸三七信孝ぬしに叛きて、軍せし時、神戸が家人、幸田彦右衛門が母の、近江の安土城に人質となりてありしを、筑前守、捕へて、彦右衛門を降參せしめむとせしに、母、その子に文をやりて、堅く忠節を守れ、吾が故をもて、二心あるなと、言送りしかば、筑前守、遂に、その母を磔にし、彦右衛門も、主に從ひて、討死を遂げし話あり。事の跡は異なれど、心は同じぞと思はる〻。田村夫人がまうけられし長女五郎八姫は、東照宮が六男、越後少將忠輝朝臣の室たり。長男忠宗朝臣は、伊達の家を繼がる。其の次、卯松丸、竹松丸、共に早世せり。寬永十三年、政宗卿薨せられし後は、夫人、尼となり、松島なる瑞巖寺の雲居和尚に參禪せらる。和尚、往生要歌、一百八首を作つてまゐらす。夫人の婦德世にすぐれたりしは、申すまでもなく、和歌を善くして、筆蹟も美事なり。伊達家に、夫人が、非常の折の着服とて藏す、黑、かのこ絞りの繻子地に、花筏と碇とを縫ひにし、碇綱を、金絲にて全身にからめ散し、丈は膝下に及び、領は被風の製の如く、然して其の筒袖なるが、婦人の服としては、世に異にして、その心のを〻しかりしも、推しはかりて餘りあり。（去年十月、三井吳服店の展覽に出でたり。）承應二年、江戸の屋形にて逝去せられ、松島瑞巖寺の傍に葬る。年八十六とぞ聞えし。法名、陽德院殿榮庵壽昌尼大姉と申す。忠宗朝臣、かねて、母公の爲に、此に一寺を建てられてありき。即ち、陽德院と稱す。夫人、生前に、父が遺言を忘れずして、常に、田村の家の事を、忠宗朝臣に歎き申されし事ありしかば、夫人逝去の年の四月、

忠宗朝臣、其三男右京亮宗良ぬしに、田村の家を再興せしめらる。後に、一ノ關藩三萬石の家にて、今の子爵田村家是なり。（明治廿五年一月八日、邦識）

故英國女皇ヴィクトリアの傳

閑けき御代の惠みに浴して、茅屋また春を迎ふる、明治壬寅の一月、南窓、日朗かなる處、四五の新着せる洋書を繙きつゝ、諸嬢のため、泰西閨秀の傳をものしぬ。露だにも、彼を揚げ、我を貶するの意あるにあらざるなり。唯我が美を益々美にし、大を彌大にせんため、彼の長をとり、われの短を補はんと欲するが故のみ。讀者其の心して讀み玉へかし。時に、淨几の上、寒梅咲きそむること兩三點、筆硯のいと香ばしきを覺ゆ。

宮館さだ子誌す

女皇降誕當時の英國皇室

今を距るゝこと八十三年前、即ち、西暦千八百十九年頃に於ける英國皇室の狀態は、甚しき悲運に陷り、前途憂悶に堪へざるものありき。時の國王、ヂョージ第三世は、老衰明を失し、常に深宮に蟄居して、僅に、形骸を擁するのみ。加ふるに、皇儲不德にして、屢々、皇室の威望を損し、剩へ、連枝一門の各皇族は、皆、老頽に近く、且、孰も子なかりしにより、國民の輿望は、自ら、皇儲ヂョージ第四世の一女、シャーロット内親王に集り、天晴、未來の國母として囑目せられたりしも、悲しい哉、天年を假さず、僅かに妙齡の身を以つて、果敢なくも、槿花一朝の露と消えぬ。

女皇の降誕

是より先き、ケント公は、當時寡婦たりし、獨逸

國「レーニンゲン」の公主を納れて妃と爲し、獨逸に於いて、共棲したりしが、妃の懷姙と同時に、本國なる「ケンセンダトン」宮に移り、此處に、千八百十九年の五月二十四日、一女子を擧げ、時の露國皇帝、並に、ケント公妃の名に因みて、アレキサンドリナ、ヴイクトリアと命名しぬ。此の皇女こそは、英國の皇族中にて。初めて、善那氏の新工夫に成れる種痘法の利益を享受し、並に、太陽の沒することなしと稱せらるゝ、廣大なる領土に君臨し、最も賢良なる國母として、國民の永く忘るゝと能はざりし、後の英國女皇、ヴイクトリアなりき。

當時、「ケンセングトン」宮裡に、呱々の聲を揚げたる一皇女が、異日英國の皇位に即くべしとは、何人も豫想すること能はざりき。何となれば、皇儲ヂヨージ第四世の、尙は生存するあり。且、ケント公の長兄、クラレンス公には、向後子なきの望なきにあらざればなり。故に、當代の國王、ヂヨージ第三世朝公報中にも、同皇女の降誕に關して、何等の記事なきのみならず、皇女降誕後、僅に、七ヶ月を經過し、千八百二十年の一月に於いて薨去したる父君、ケント公の薨去記錄中にも、皇女に關しては、毫も記する所なきに依りて、之を推定するときは、當年の史官を始めとして、一般國民は、此の皇女を以つて、將來の女皇たるべしとは、露だにも想像せざりし所ならむ。唯、父君ケント公のみは、常に皇女の頭を撫して、「大切に此の子を敎養せよ。他日英國の女皇たるべし。」とは、口癖に、其の妃に語る所なりき。

公妃の苦心

ケント公薨じ、妃は襁褓の遺子を抱きて、再び、寡婦となりぬ。左なきだに物思はしき婦人の身の、遠く、外邦英國に客寓して、分黨の愁を慰め與る

る友とてはなく、明け暮れ、生國獨逸の天を望みては、只、涙に暮るゝのみなりき。加ふるに、當時、ケント家の財政裕ならずして、具さに、窮乏を嘗めつゝあるが上にも、不幸の纏ふ所は、尙、是に盡きずして、妃の外舅たる現王、ヂョージ第三世は、幾もなく、ケント公の後を追ひて他界の人となり、繼位の國王ヂョージ第四世は、性來暗愚にして、妃に對する行爲の、いともつれなきことのみ多かりき。

斯る不幸の中に在りても、氣丈なる妃は、其の生國獨逸に退隱して、徒に、閑散なる生活を營むを欲せず、皇女に對しては、飽くまで、英國風の薰陶を與ふるに決し、依然、英國に留まり居る中、故シャーロット內親王の夫にして、後、白耳義の王位に上りたる兄、レオポルドの懇篤なる幇助を得、「ケンセンゲトン」及び「クラーモント」に於いて、專、皇女の敎養に力を竭しぬ。

皇女の幼時

「ケンセントン」及び「クラーモント」附近の故老中には、今尙、天朗かにして、草綠なるの處、常に驢馬に跨りて、彼處此處を徜徉せる、可憐の一少女ありしことを記憶するものあるならん。頭には、大いなる麥藁の帽子を戴き、身には質素なる白色の綿衣を着け、其の母と共に、或は「ケンセンガトン」宮の後園に水を灌ぎ、或は隴畝の間に踞して、食事を倶にせる、稚なき一少女を目擊したることありしならむ。是ぞ、ヴィクトリア女皇の幼年時代にして、亦其の最も樂しかりし時ありけり。千八百三十一年、皇女は、恙なく、十二歲の春を迎へぬ。此の歲、「フラウレン、レーゼン」と稱する獨逸婦人を聘して、皇女の傅とせり。（未完）

●附言　女鑑第二百四十一號、漫錄欄に掲げたる(トルアンー學校)の終りに、未完と記せしは、完結の誤りなり。同校の事につきては、尙、記すべきものなきにあられど、他は、諸媛のため。左程肝要なりとも覺ねされば、省きぬ。幸に之を諒せられよ。

家庭

實驗の家庭教育

東京感化院長　高瀬眞卿

敎育と云ふものは、極めて區域の廣いもので、必ずしも、書を讀み講義を聽くのみを、敎育とは言はれない。學校にて敎ふる處の科目は、隨分澤山あれども、是また、敎育の一部分に過ぎぬのである。敎育を分けて、之を二ッの大部門といたし、一は智を養ふもの、一は情を養ふものとして、其の情を養ふものを、德育とするなり。さて、智を養成する敎へは、學校にてなすを、尤も有効のものとなす。また、情を養ふ德育法も、勿論學校に全備してはあれど、其の實は、家庭に於いて敎ふるを、尤も有効あるものと言はねばあらぬなり。

近年、家庭敎育と云ものゝ必要を論ずる學者の多きも、全く、是が爲めと知らる。

學校の敎育にも、修身科ありて、德育の法は、全備したるが如くあれども、其の實は、智育の一方にのみ傾きて、德性を養ふ事は、結果宜しからず。斯く言ふは、學校の德育法を非議する樣に聞ゆれども、學校の修身科の敎授と云ふものを見るに、一室に生徒を會して、修身上の講說を聽かしむるに過ぎず。德性を養ふと云ふ事は、理屈詰めにて

行くべき者にあらず。また、一時間二時間、耳より吹込みたりとて、ソレにて感悟して、終身之を守るものにもあらず。德育の尤も効能を奏すべき場合は、教場にあらずして、平日交遊の間、談笑遊戯の際、手を携へて、旅行同宿の時、寧ろ、儀式張りたる演説、規則立ちたる講話は、彼をして、感悟啓發せしむべきものにあらずして、お義理一ぺんに、聽問すると云ふに過ぎず。されば、學校は德育に就いては、家庭よりは、効驗を奏する事少なき譯合なり。

東京感化院にて、父兄より依賴を受たる感化生の學力を、取調べたる事ありき。十九年以下十年以上の少年、百人に就いて調査したるに、其の結果は、左の如くありき。

感化生學力試驗　但一百人に就いて

一、中學卒業相當の學力を有する者、十四人四分
一、高等小學卒業相當の者、　廿九人五分
一、尋常小學卒業相當の者、　三十三人
一、僅に文字を讀み得るもの、　十六人
一、自己の姓名のみ記し得るもの、　三人
一、一丁字も知らぬもの、　四人

左の中、尋常小學卒業以上の者を合算すれば、七十七名あり。此の少年は、忠臣、孝子の話も能く記臆し、父母には、孝を盡すべき筈、朋友には、信義を盡すべきもの、人は、獨立自營すべきもの、名譽の重むずべきもの等、皆よく、之を知つて居る。知らぬ者は、殆どないと言つてよろしいのである。學校の修身科の德育に於いては、己に、卒業したるものと言ふて可なるべし。さて、此の德育科を卒業したる少年が、如何なる事をして、感化院に入りしやと言ふに、其の入院前の重立たる不良事蹟は、左の如し。

一、他人の物品を窃取したるもの、　廿六人
一、父母に對して暴行を加へ、家の物品を縦に持出したるもの、　十四人
一、同學生の金錢を盗み、且、教師に抵抗して退學を命ぜられしもの、　十一人
一、犯罪を以つて警察の手に縛せられ、入監せし者、　四人
一、詐僞取財に類せし擧動、　七人
一、放蕩無頼の余り、金錢を窃取せし者、十五人

以上は、七十七人の者の不良事蹟也。此の故に、學校の修身科教授と云ものゝ結果に就いては、吾々、常に重きを置く事が出來ぬ。これは、德育法の全く備らざるものか。教師其の人を得ざるに由るか。他に原因の存するものがあるか。大に研究すべき問題あるべしと雖も、今日は、家庭の話をなすべき場合なるを以つて、學校の事は、他日の問題にして、是より本題に入るべし。

さて、右申す如く、學校に於いての德育は、頼みにあらぬものとして、學校は、專ら、智育の場所と見做し、子供の德育は、專ら、家庭に於いて、之をなすものと思ひ定むべし。學校へ出して置けば、小供は智德ともに兼備して、立派な人間になるものと而已思ひ、油斷をすれば、右七十七人の如き、不良の子供を現出して、一家の難儀を引起すのみあらず、世間へ對しての不面目、父母の耻辱、其の子の不幸、内外共に、容易ならぬ損害を受るに至るべきなり。是、家庭教育の大切なる譯合にして、全く、理論を以つて言ふにはあらず。

世間に、家庭教育の必要を論ずる先生が澤山ある。著述ものにも、新聞雜誌にも、其の議論が隨分多く出て居るが、吾等の見る處では、其の議論は、皆立派であるが、多くは、いづれも理論である。

理論と云ものは、實際の事とは、自ら別物で、口の先や、筆の先では、如何なる事も述べらるゝが、サテ實地となると、然うは參らぬもので、其の證據には、自分の子弟を教育する事は、甚、下手で、教育の議論をする事の上手な人が多い。此等の教育家の子弟が、何人、感化院へ入院したかと云ふ事を、茲でお話をすると、横道へ這入る譯になる故、他日の事と致し、吾等は、飽くまで、實地に就いた、經驗上のお話をします。さて吾等言ふ處は、子供を教育するには、云々の手段を以つてすべし。其の故は、云々の者は、遂に子供を不良の者となしたり。と言ふ論法で參るので、學說上で、立派に論ずると云ふ譯にあらず。故に、不良の子供と云ふものは、如何なる家庭より出るかと云ふ事を、第一に述べ、其の次に、家庭の教へと云ふものは、如此結果を生ずるものなれば、斯くせざる可らず、と云ふ事に及ぼすべき也。

一、愛情の過度なるがために、子供を不良にせし實例

不良の子供と云ふものが、如何なる家庭より出るぞと云ふに、第一に繼母、第二に兩親の不和合、第三に双親の一人死亡せし者、第四に祖父母の手に養育せられし者等、重なる原因になつて居るが、是は、次號に至つて、追々申述ぶる事として、先、愛情の過度よりして、不良になりし子供のお話をすべし。尤も、愛情の過度と云ふものは、其の度合の定準と云ふものが無いから、如何なるが過度、如何なるが適度と云ふ區別を立る事が、甚、六づかしい。此の過度と指すものは、尤も甚しい愛情を言ふので、子供が可愛いために、道理も義理も忘れて、目前の愛に溺れて居る者を云ふ。此が甚しく多いのである。夫婦共に、非常に愛に溺れて居

ると云ふ者もあるが、多くは、妻の方が甚しい。ソレを、夫たる者が知りつゝ、制する事の出來ぬと言ふが、多數なのである。中には、男親が殊の外に愛情が深くて、却つて母親の方が、公平な愛を持つて居るものがある。これは、比較的に少ないけれども、其の子供のために害のあると云ふ點は、同一なのである。其の例をあぐれば、

京橋に某なる者がある。男の子二人あつて、長男は十八、二男は十三の時に、男親は死亡して、母の手では、養育が六ヅかしいと考へて、長男をある學者に托して、普通學を敎へて貰ふ事にした。これは、宜しい處置と思ふ。二男は性質活潑な者で、且、怜悧である。然るに母親が、後夫を迎へて、親子三人同居するに至つて、母親は、二男を非常に不憫がつて、寡居して居る時よりも、愛情は甚しくなつて來た。此は、何と云ふ譯かと尋ねて見ると、彼は幼年で、實父に別れ、今、他人の親の手に掛つて居る。ソレが、憫然なのであると云ので、また後夫も、妻に對する義理合よりして、二男をば、非常に愛す。夫婦とも〱愛情極めて厚く、何事も二男の意に背かぬやうにする。此に於いて、最初は、我儘氣隨をなし、ソレより母親に口答をする、後夫を馬鹿にする、十五歳になつては、親に抵抗するやうになり、小遣錢の請求をなす事、日に幾度と云ふ事を知らず、遂に、金錢を持出すと云ふやうになつて、全く不良に陷つて仕舞つた。此の少年の言ふを聞けば、親父は馬鹿です、僕が強く反對すれば、閉口します。お袋なぞは、泣くより外に何の事も出來ない、只、兄が時々歸つて來ると、僕は閉口する。此の少年を、感化院へ入れる事は兄が主張して、兩親に承諾をさせたのである。併し、兩親に承諾をさせるに、

殆ど半年の間、數十回利害を說いて、辛く承諾をさせたのだと、兄は自ら言ひしなり。少年入院の日、家を出づる時、母は泣いて、モシ辛くて、居にくいと思ふなら歸つて來い、と言つけたりと言ふ。此の少年は、此の母あるが爲に、如此ものとなりしなり。

信州商業家某來りて、其の子の十六歲なる者を依賴す。彼曰く、私の子は、性質甚粗暴にて、母親の言ふ事をば、曾て聞入れず。私の申す事は、少しく之を用ゐれども、其の他、彼の心には恐しいと思ふ人は、一人もなし。學校の先生の如きすら、少しも恐るゝ處なく、モシ強く敎戒を加ふれば、腕力に訴ふる事あり。如此亂暴に至りし者は、彼が兄二人とも、皆、早世して、彼一人やうやく生長せしを以つて、母は、殊の外に彼を可愛がり、余りに愛の度が過ぎると認めし時、私より忠告を致せば、女心の淺墓にも、却つて、私を怨み、遂には、病を引出すことあり。私も、此に至つては、手の下すべきなく、母のなす儘に任せ置きて、今日の如き、不良の子となしぬと言ふ。此も愛情の過度より來る處。さて、其の母親なる者に就いて尋ぬれば、夫は子に對して、甚、冷淡にて、少しも彼を愛せず、彼は不幸にして、如此邪見なる親を持ちたれば、不憫さも彌まして、常に彼を見るたびに、思はず涙を催すと言へり。吾々が見る所にては、夫は子に對して、至當の愛情を有し、敎育の何物たるをも辨へ居れば、決して冷淡なる人にあらず。母は只、愛するを知つて、敎ふる事を知らず。極めて、劣等なる愛を以つて、子に對するのみなれば、子は母を侮りて、望む處は、いかなる事にても得らるべしと、常に思ひ居るなり。在院中にも、子供の身の上を案じて、病氣

となりし事二回ありき。
劣等なる愛情を以つて、子供を育つる婦人は、是、目前に子供の喜悅する事を希ふて、將來の事には頓着せず、故に、多くは飲食を以つて、子の歡心を買ふを手初めとし、子供の欲する者は、勉めて、之を與へんことを思ふ。子供が望むで得ず、欲して叶はざる時は、必ず泣く。子に泣るゝは、自身が泣くよりも悲しく、如何なる塲合にても、子の泣聲のためには、心を動さゞる事なし。この習慣を重ねゆきて、子供は、母の心を動すべき手段を覺え、斯くすれば、母は驚くべし。斯く言へば、母は必ず應ずべしと。殆ど、子供の掌中に母を弄するにいたり、母も遂に、子供のために、終身の苦境を造り出すにいたるなり。　（未完）

育兒衛生談（二）

久利軍醫

小兒榮養法

小兒の各衛生中、尤も大切なるものは、何であるかと申しまするに、榮養法即ち養ひ育つる程、緊要なことはありません。何故なれば、小兒は、大人と異なりまして、小兒自身が必要の養ひを取りて、日々身體の消耗、取りも直さず、空腹を補ふことが出來ませぬ。それのみならず、小兒は、常に成育しつゝある者でありますれば、從つて、養ひの分量も增さんければ、成長することが出來ませぬ。それは、小兒の口や胃や腸は、大人と異なりますし、その他、一般の有樣が違ひまするにより、此の必要が起る譯であります。
なせ小兒の胃腸の有樣が、異なるかと申します

に、御存知の通り、大人は、歯ありて物をかみくだき、胃や腸は、それ〳〵運動し、食物を消化する力がありますが、小兒は、斯様なる作用は持ちませぬ。只だ口より入りし物を、胃や腸より吸收して、自身の體を養ふのみであります。實に此の作用は、盛なるもので、即ち此の作用が、成人と大に異なる所であります。且、小兒の身體は成人に比しますれば、身體の出入の働きが、頗る活潑でありますからして、尤も、營養と云ふことに注意し　規則を設けて遣らなければなりません。

そこで、小兒の營養上大切なものは、何であるかと云へば、第一母の乳、或は、乳母の乳であります。然るに、近來は、母體に異常のなきに關らず、どうも、牛乳養育が多いかと思はれます。之れは宜しくない。要するに、母の乳は、正しく小兒を養ふ、總ての大切の成分を持ち居るのみならず、味を付けることもいらず、温度も適當であり、且、清潔でもあり、又、他の關係よりして、下痢を起すと云ふやうなことがありませぬ。

又母の乳は、小兒の腹中に入りて、百分中九十七分まで、悉く養ひになるのであります。このことは、如何して分るかと云ひますれば、吐物を見ても知れます。即ち母乳は、胃中に凝固するも、極めて細かく、牛乳の如きは、大塊をなしますのは、大に着目すべき好例であります。小兒に乳を飲ましむるに、日本古來の習慣に依りますると、出產後數日間は、マクリと稱する、下劑を與へる樣に思ひます。之は、何の利益もありません。之は、惡習慣であるのでありますから、今日の世の中では、廢止するのが正當と考へます。小兒は、生れますと直に、胃や腸が吸收する力、即ち消化力を具へており。又母の乳は、下劑の用をなし

て、胎兒便を排泄する、不可思議の作用がありますからして、マクリの必要は、愈、無要に思れます。

飲乳回數　母乳にて養ひますに、廿四時間幾回を要するや、通例、七八回與ふるを正しとします。即ち二時間半乃至三時間毎に、飲乳せしめ、夜間は、可成其の間を長くして、三時間乃至四時間毎に、與へまするを可とします。なぜ如此、正しく與ふる必要あるやと申しますに、此の飲乳の度を誤りまするときは、營養法の、不規則の原となるからであります。兎角、働き續きと云ふことは出來ない。七日位に一日休暇せねば、健康の保全にならず。又如何に、勉强家と雖も、いつも晝夜兼行と云ふ譯には參らない。此の理由と同じことで、胃腸にも休暇を與へませんと、終には、病氣を引き起します。世間には、姑息の愛情に制せられて、泣くと直に飲乳せしめ、遂に、正しき規則を破りて、知らず〳〵、愛情の爲めに、疾病を起すのが多くあります。規則正しき飲乳法は、初めは困難でありますが、之も習慣にするときは、母子共に幸福であるのであります。

如此規則正しく養育し、一定の時刻が來ましたならば、乳を離さなければなりませぬ。其の時期は、甚大切でありまして、一定することは難し。通例、八ヶ月乃至十二ヶ月にて、離乳せしむる事を可とすと雖も、或る場合によりては、一應醫師に、其の利害を協議するを可とします。而して、若し母乳を止め、乳母の乳を代用し難き場合には、人工營養、即ち代用品を以つて、小兒の營養を爲さなければなりませぬ。然るときは、頗る注意を要します。即ち、急に代用品を與へず、六回與ふるものとするときは、二回は母乳、四回は牛乳とし、

徐々に牛乳に移り、又可成は、夏期よりは、冬期を可とします。

母乳も、或る場合に於いては、禁せねばなりませぬ。即ち、

一、母の衰弱甚しきか、或は、食物不良なる時、

二、母の乳房過小なる時、

三、母に疾病ありて、醫師の注意ありし時、

四、懐姙せる時、

五、月經時中に於いて、哺乳せしむれば、胃病を起し、吐乳痙攣するときは、禁ずるがよい。

●●●●●乳母の撰定注意　乳母を撰定するときは、醫師の體格檢査を要するは、勿論の事でありますが、豫め、左の件々に注意を要します。

一、乳母は、充分健康にして、體格檢査のみならず、親族の調査も、必要であります。

二、年齢十八歳以上、三十二歳以下を可とします。此の年齢には、最も良き乳を分泌するからであります。

三、乳母の分娩は、可成母の分娩と、時期を等うするものが宜い。若し時日を隔つるときは、乳の性状に、著しき差を生ずるからであります。

四、出産後の者は宜しくない。少なくとも、四週間乃至六週間後を可とします。是ハ、其の兒と母とに付き、如何なる變化のありしや否やを、知ることを得まするからである。

五、乳母の子に付き、健康なるや、遺傳の病氣ありや否や。

六、乳房は、適當の大を有し、之を壓迫すれば、數多の排泄口より、細線となり射出する事。

七、乳母の性質は、柔順なるを要します。其の他、都市よりも村落を可とすれども、遠隔のも

のは宜しくない。

授乳者と乳汁の關係　授乳者は、可成精神を靜かにし、營養品を多く攝るを可とし、又乳母には、習慣せる食品を、急に變換せしむるは不良であります。而して、風氣を釀すもの、或はウド、韮、葱、其の他、酒類は與へざるを可とします。

母若しくは授乳者の生活法　清潔法に注意し、數次温浴を執り、空氣の流通よき室内に住ひまして、小兒の愉快を失ふことなく、又新鮮の大氣中に、正規の運動を爲すを宜しとなします。

小兒の看護に就いて要件があります。授乳は、泣きますのを、靜める目的ではありませんからして、若し、飲乳時の間に於いて不穩なるは、衣服の爲めか、又は、涎或は、便の爲めに濕潤するからであります。因つて、之に注意すれば宜しいのであります。

兒を懷き、就褥するは良しくありません。爲めに、危險の事があります。

其の他、乳房は、常に、清潔になし居るを必要と致します。若し乳房に、少しにても創を生ずるときは、焮衝して、終に化膿しますから、能く〳〵注意するが必要であります。若し創を生じ、疼痛があります際には、百倍の石炭酸水にて、冷罨法を施すが宜しくあります。

久邇宮姫宮織田家へ御婚禮の一節

石井泰次郎

人きかぬ所にて、いかに、さきの日の織田子爵の君の家の、みあひの式の御ありさまはと、問ひはべりしに、そのよし答へまつらんは、さかしら心の

きはたかく、さいまくれたるやうなるべき。このごろのみあひの式の様につきては、禮節のはかせめかせる者の、さだしあへるなむ、をかしき事のみぞおはかんめる。閣下にも、とくより知りたまふらん。かゝる事うちかたらはんこそ、げに心ゆくわざにはべれとて、答へんともせず。深雪なすひげかきなでつゝはゝゑむめり。翁人のみ、こゝろにをかしと思ひたまふこの頃の禮節のさまは、童よくわきまへ侍らずかし。まづ、さきの日のこと、うけたまはりたうなんといへば、このごろの雑誌のうちに、をみなごの見るべき女子の友に、あにがし禮節のはかせが、ものしたる婚禮式の様なん、賤しきものゝせんだに、いかでかうはなさん。眞袖に食乞ふ人らの、すべき爲にやものしつらんかし。まいて、其のはかせは、學問せぬ者と見えて、上中下のけぢめもわかち侍らで、かしこびたるぞうたてき。このはかに、新にさだめたりといふ、婚禮式のやうあん、みあ袖に食乞ふ者のためには、いとよきさだめありかし。いかで上中下の差別たてゝ、その位にふさはしきさだめを設け得ざるらん。こは、禮節のをしへごとの、故の實あるを、子として親のはぐゝみをわすれたらんやうに、すぎにしことは、今はえうなしとや思ひなしけん。たゞしもあへず、いたづらに、はかせめかさんとするからに、禮節教授の、うひまなびをだになさずて、たゞに、書商人のために、其の名をおろしやりて、あしきとも思ひたらぬげあり。かゝる者のふみでのすさびに、人まどはせる時節にあひて、正しきこと語らんは、人わらひの料にやあるべきといふ。童は、そのふみにいでたる婚禮の式のこと、いまだ見はべらず、あしきものにやといへば、いかにもとて、やうやくに、かたりつゞけ

られ侍りしは、婚禮式の、いまとむかしのものがたり有りけり。そがうちに、董が要としはべるべきは、さきの日の、御めでたきことにして、よそごとは、よしともあしとも知りはべるべきことならねば、かきもとゞめず。むづかしきわげつらひこのむ身に侍らば、翁人とゝもに、人をやそしりはべるべきと思へば、なにとあうおそろしうなりてあむ。

しもつきのすゑのあぬかの日、うまのときすぐるころ、久邇の宮の姫宮純子姫と號す。御馬車の御よそひも、わきて、御ともの行列もわきて、たゞならずあやにうつくしうて、わかぎしたの御やかたに、入らせたまふ。せんく、みとも、にぎはしうつかへまつるからに、その御ひゞきも、とゞろく〳〵となりわたりぬ。御むかへには、子爵の家のさもらひ、女房たちのきはだちたる、御馬車より、みやかたにのぼらせたまふほど、臣下の者のまなびがたき御ふしこもりて、げに、竹の園生の御さまと、まづめでたうをがまれぬ。御休息所に入らせたまふより、御うきゆひのをはりまで、こまかうまをさんは、おそれおほしとて申さず。あらましをきゝとゞめつるやう。

御うきゆひの御次第は、ちかきむかしよりのためしを、今の御代のさだとひきむすびて、まづ、御箸初のついがさねをまゐらせ、つゞきて、御肴をついがさねにすゑて、まゐらす。衝重は三方なり。姫宮の御方には、四方を用ゐたまふべきを、聟君めでたまふ禮ひありてや、これも同じついがさねなり。御さかなは、伸鮑、海月を、くぼつきにめでたう作りて盛りたり。御前の方に、酢鹽を小土器に盛りたり。ついがさねの中央に、御箸を耳土器といふ物におきたり。御銚子御提は、御酒盞に

つゞきてたてまつる。二の御肴は、鯉、平坏に松がさねの紙立したり。御銚子御提は、御酒盞につぎてたてまつる。三の御肴は、鯛、是も平坏にもりて、紙立は梅重なり。御酒盞は、白き土器なり。御銚子は、長柄なり。蝶鳥のかた、柄の包みかたは、ひとつの古きふりをとゞめて、よくつゝみなしたり。さあるべうすさびたるも、艶に見えたり。さて、御うきゆひの御さかづきは、男よりとの古例にしたがはせたまひ、姫宮つゞきたまふも、めでたうをがまれぬ。

つひがさねのさゝけやうは、ひらつきのかさねの花やかなるにあはせて、けだかう、かしこき御儀式の御時も、さぞありつらんと、さすがに思ひまつらるゝもをかし。長柄とるをみなのあゆみかた、いまの立禮の御婚禮にはさもと、いにしへのはひ酌の事の、いまの座禮に用ゐられたることなど、思ふにも、いにしへ今のこのゝりに、心とゞむる老が身が、禮節のことあげつらふたづきにもなりて。

といひつゞくるほど、また、例のくせごとにやかたぶきぬらんと、心あやうくも、要あることを、すこしきゝとゞめつるになむ。

産所式（三）

有住常子

着帶の式をあげて、後々の支度には、産棚の次第あるべし。こは、現今の世間にも用ゐらるべきを取りて、用ゐがたきを省く事は勿論なり。

○産棚とは、産の時に用ゐる調度を、そなへおくべき爲のしつらひなり。

其の拵へかたの正しきは、

檜の木を、白木にて三重に棚をつくる。寸法

は定りなし。高さ三尺六寸計、棚板長さ三尺、廣さ一尺五寸計、板の厚さ七分計、柱の太さ二寸計、四角四本柱なり。

棚板三枚の間は、何れも同じ程あり。下の板は、疊に直に置くなり。

白木を胡粉にてぬり、雲母にて、松、竹、鶴、龜をゑがくべし。

此の棚に、押桶を置くあり。

押桶とは、檜の曲物にして、大凡、高さ五寸五分、徑五寸、何れもふたなし。數五ッ、是も胡粉にてぬり、雲母にてゑがくべし。湯を入れおく料なり。五ッは、上の段におく。又別に、曲物十二、月の數にあはせて、大方高さ三寸五分、わたり三寸、ふたなし。胡粉ぬり。ゑ同じ。是を中段におくべし。

上段の棚のめぐりに、しめ繩をはる。中段下段にはゝらず。又、押桶一つにしめをはる事もあり。毎朝湯をくみかへて、備ふるなり。百日の間、同じ事あり。

又產棚は、一七夜の後はとるといへり。此の説はあしゝ。百日までおくべし。此のため、北向にはおかず。

一燈臺　一箆　一たらひ　一湯桶

一胞衣包のきぬ　一胞衣桶　一胞衣桶の外家

一鼻ひねの緒

以上は、產屋の用意として、かねて、とゝのへおくべきものなり。

原料考物 初春料理

石井湧太郎出題

元旦より二日三日と、年のはじめの屠蘇白散の、肴

としての拵方を示さんに、黒豆の煮方、てりごまめ、かずの子の醤油づけも、十年むかしのことふりたれば、こゝには、即席に、家庭の祝儀、來客の馳走の一材料にもなりて、學校生徒の手すさみにも、女房たちの手料理としても、一寸まにあふ松竹梅を、菅公千年祭の執行あるべき、春のあしたの一仕事にもと、立わたしたる松の一ふさ、くひつみにつむ○○一枚、とりわはして記しつるのみ。

梅の花今さかりなり、もゝとりのこゑのこほしき春きたるらし

わが宿の梅のたち枝やみえつらん
　おもひのほかに、君がきませる

第一　原料は、右の歌詞に記しおきたれば、もとめ得てつくるべし

梅花○○○の拵へやう、

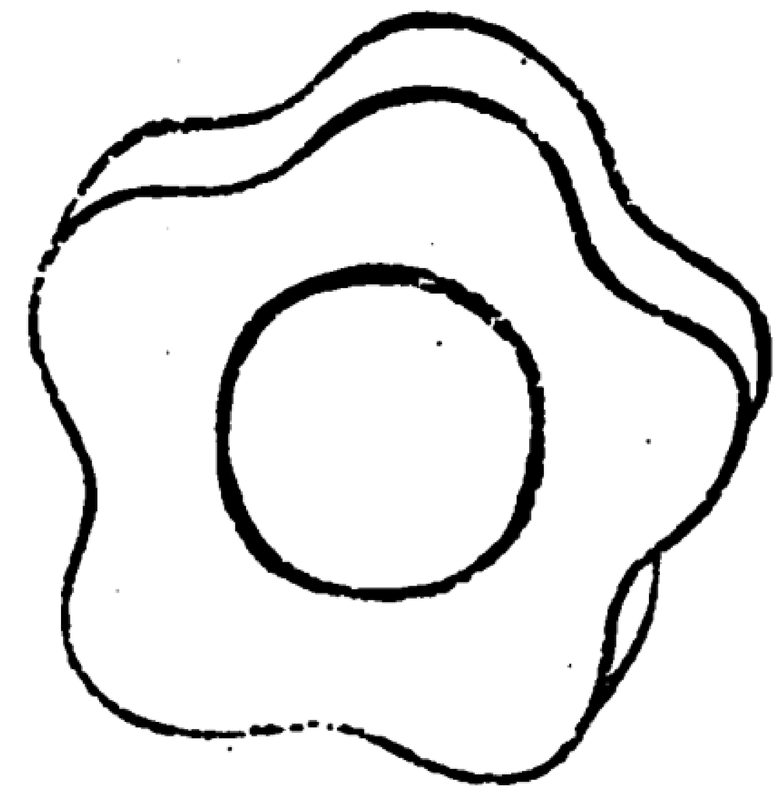
鍋に湯を煮たゝせて、其の湯のぬるむ時に、○○○を入れて、箸にてそつと、殼のあたりてくだけぬ様にかきまはしをる事、二十分間して、さて、金の目じやくしにて、一つをすくひあげて、鍋のわきに持出して見るに、すぐに、上部の乾く時は、ゆであがりたるなり。又、乾きの間ある時は、今少しゆでゝよし。

湯でたる鍋をおろして、水を加へて、手の入るだけにぬるめて、○○○を一つゞゝ取出して、殼を去りて、布巾の白きにて、四ッだてに包みて、有合せの雜煮ばし五本を、布巾の上より五所にあてゝ、いかのぼりに用ゐる二枚糸のあたらしきにて、二所はしの方をかたくしばりて、二三十分間さましおくべし。

さて、さましたるのち、糸をほどき、布巾をとり

て、〇〇〇を取出して、一つを、わとさきを切りて、正身を二つに輪切になすべし。是は、白梅の方なり。

盛方｛七輪　五輪　三輪｝



原料｛離煮箸　〇〇〇　凧糸　布巾　酢　口紅｝

紅梅の方は、右糸をときたる後に、鍋に、紅を酢にてときたるなかに、一つ二つ三つ四つ五つほど入れて、色をやきつくるなり。鍋を火にかけて、煙たつ時より、鍋をゆりて、〇〇〇をまはして、汁のなくなるまではまはして、やきつくべし。酢は少しにてとくべし。かく色づけして後に、わとさきを切りて、二つに輪切にして、紅梅となすべし。原料見あたり次第、早速につくりこゝろみたまふべし。原料は、ちかくにもあり。又、船來せる物もあり。ちかき方を用ゐるべし。とほくもとむることなかれ。

岩代の尾上の風にとしふれと
松のみとりはかはらさりけり

第二（原料は、右の歌詞のうちより〇〇てつくるべし。）

松の實〇〇

〇〇の肉を俎板にのせ、出刃庖丁にてよく切りて、細かになるまで叩くべし。かまぼこの肉の如くなるを、松の實の形に丸めて、まるめん時、醤油を手につけてまるむべし。さて、かつをのだし、醤油、みりんとを同位づゝ入れて、鍋にているべし。こげぬやうにこゝろすべし。さて、松の葉を一本づゝにして、其の煮あげたるにさすべし。

盛方｛五本　三本｝



原料｛門松○○の肉　醤油
　　　みりん　かつをだし

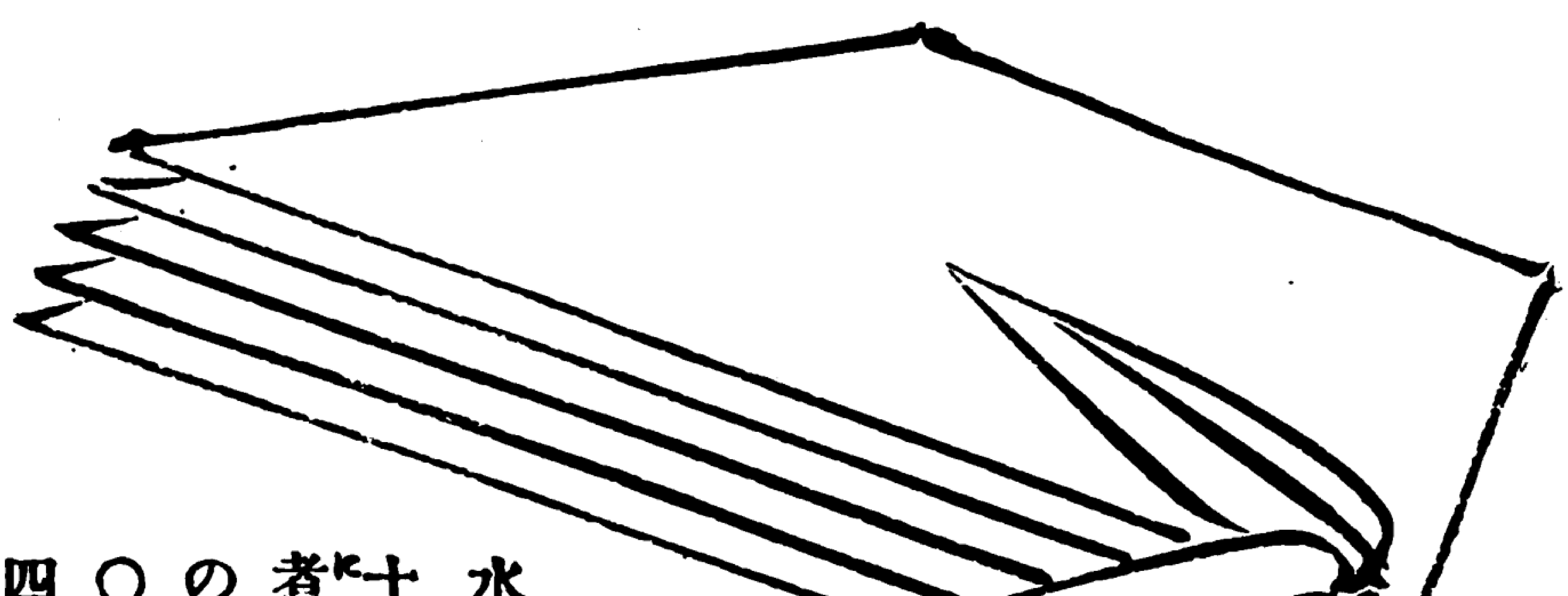
まつも、まへのうめも、數は、うつはによつてさだむべし。

原料は、○○と大よそに定めたれば、○○の類にて、何にても撰びてよし。肉に大づくりさせて、後に、をみなたちの手すさびにはすべし。とくおさへざれば、かなたへと○さるべし。

しめおきしまがきのそとにおひいて、
かけをひろむる宿のわか竹

第三（原料は、右歌詞をはたらかしてたづぬべし。たゞにては、もとめがたし。）竹節○○○の拵へやう、

○○○を水に浸しおく事、三十分ほどにて、能く洗ひて、鍋に入れて水かぶるほどにして、ゆでる



事三十分すべし。

○○○のよろしきをえらぶべし。品により、時間の加減あるべし。

ゆで上りたらば、○○○三枚に、砂糖二十匁、醤油三勺五夕、水一合五勺程の割合にて、三十分ほど煮こむべし。さて、煮えたるば鍋をおろして、別の器に入れてさまして、○○○五枚位づゝかさねて、長さ四寸位に切りて、はゞ二寸位に切りて、なゝめに竹のふし

の如く切るべし。これにて出來あがるなり。
別の〇〇〇にて、竹の葉形をきりて、盛りつくる時にそふるなり。

原料〇〇〇　砂糖、若水、醤油

右原料は、ゆづりは、のし、かちぐりなどつゞけて、名のよきを、めづるものゝうちになり。但、其のよびこゑ音讀にてよびて、二つ、はねたれば三つなれど、たゞしく、訓にてよぶべし。聲にしたがひて、いでくるものなり。
盛りつけやうは、梅花〇〇〇を向ふにつみて、左の方に竹をおき、右の方に松の實を、梅花にたてかけておくべし。そろへすぎたるはあしゝ。すこしみだしおくべし。しかすれば、もつともめでたし、めでたし。



學藝

國文學講義

紫式部日記講義(二十七)

井上頼文

れいのわた殿より見やれば、つまどのまへに、宮太夫、春宮太夫など、さらぬ上達部もさぶらひ給ふ。

釋義

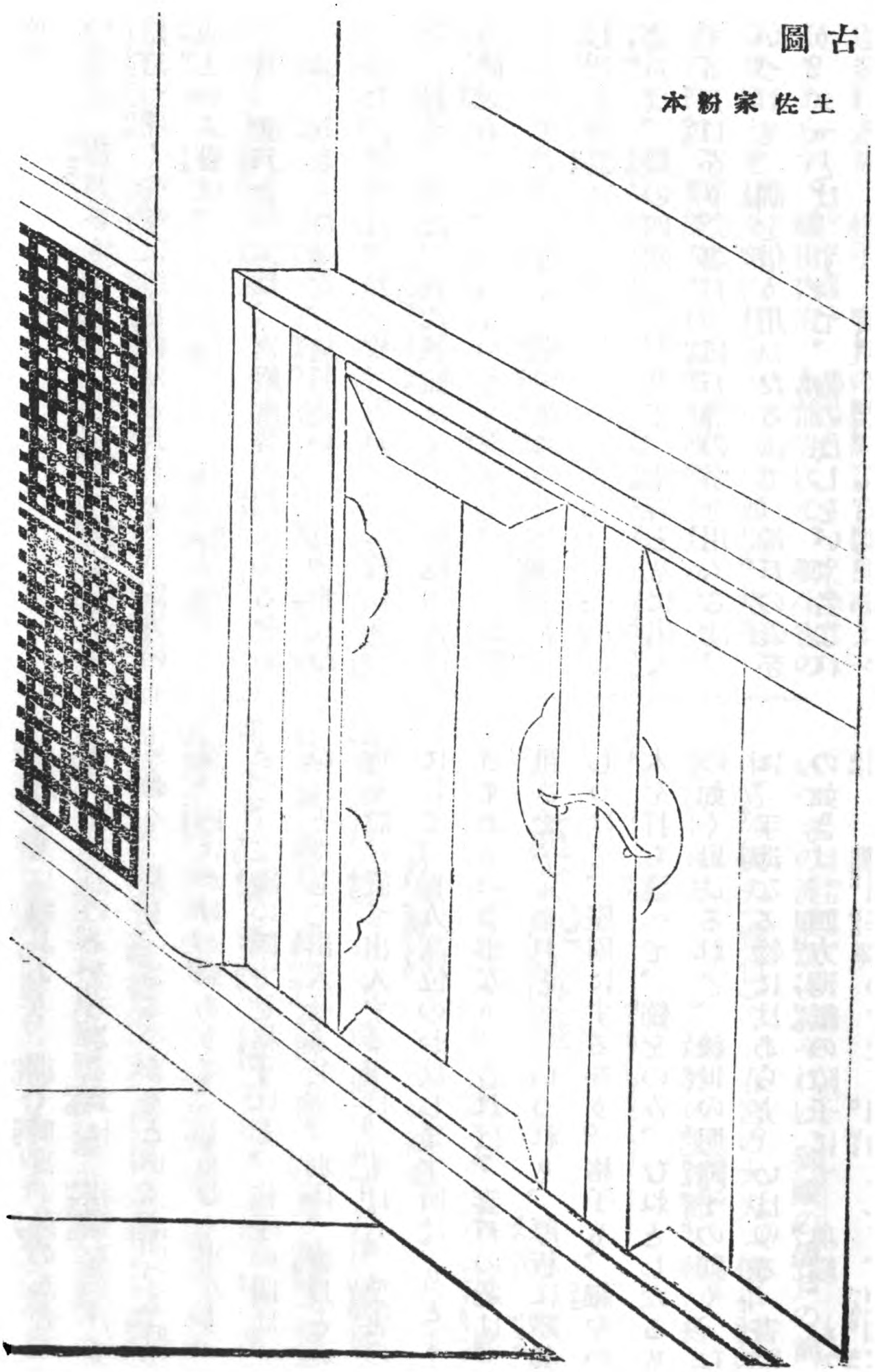
〇れいのわた殿、例の渡殿なり。上文に、わたどのゝ、戸ぐちの、つぼねに見いだせば、と、ある所なり。上の場所を、ふたゝびいへる故に、例とはかけるなり。わたどのゝ事は上にいへ

一圖（土佐古寫粉本）此類猶多し然れとも其製大なる異同なし



戸 古圖

土佐家粉本



り。

○つまど、妻戸あり。宮殿の廻廊等の端にありて、兩方へ開くやうに造られたる戸をいふ。四方の硯といふ書に、

昔、妻戸といふは、宮殿廊等の端にあるをいふ。端あらざるを、唐戸といふ。其の形はおなじ。妻戸は、戸一枚、唐戸は、二枚あり。

と、見え、なほ、貞丈雜記にも、その他の書にも諸説ありて、いさゝかづゝ異同あれば、おだやかなりと思はるゝ、家屋雜考の說を抄錄すべし。その說に、

妻戸は、殿の四隅にありて、主客ともに出入する戸口なり。妻戸、狐戸等の字を用ふるは、いづれも、訓を借り用ひたるにて、端戸の義なり。ツマとは、すべて、物のはしをいふ名なればなり。さて、そを作は、板戸を兩開にして、

内外ともに鐵具あり。開く時は、外のかたへ開き、其の戸のあをらざる爲に、掛鐵をかけてとめおく、是を、さるつなぎといふ。閉づる時は、又、内にかけがねありて、しめおく事なり。總じて、主殿の四方を格子にし、格子の間は、つねにとざして出入せさせず、別に、妻戸といふ物を設け置て出入する事は、もはら、要害の爲にして、貴人高位のおはします所は、もとより、さもあるべき事なり。されば、妻戸の造は、精粗さまぐ〵あれども、いづれも、厚板に鐵具をしつけて、堅固にするなり。格子も、細やかに木を打ち違へて、飾をのみ、むねとしたるものの如く思はるれど、後世の明障子の如く、むげに、手薄なる物にはあらず。いはゆる、書院造の如きは、四方薄紙の障子にて、奥端、おもに明るく、間毎にあけたて自由にして、便利多き

事なれども、格子、妻戸の堅固なるには准ふべくもあらず。織田内府、本能寺にて、御生害のさまなどをおもふに、そのかみの如く、格子、妻戸にて、翠簾をたれたる御座所ならんには、たとひ、賊兵はしたなく近づきまゐらすとも、鎗先にかゝりて、薨じ給ふまでの事はあるまじきなり。妻戸の制、さまぐ\あり。下に、一二圖をいだす、なほ考ふべし。と、見ゆ。

○宮大夫、　中宮大夫齊信卿なり。上にいへり。

○春宮大夫、　春宮坊の長官にて、小野宮左大臣實頼公の孫、參議右衛門督齊敏の二男、權中納言左兵衛督懷平卿なり。

○さあらぬ、　さあらぬの略にて、其の外の意。

○上達部、　公卿におなじ。されど、おほかたは、左右近衛大將、大納言、中納言、三位中將などをいへり。

譯解

いつもの渡殿より見やれば、御殿の妻戸の前に、中宮の大夫（齊信）や、春宮の大夫（懷平）などをはじめとして、その外の上達部も候ひ給ふ。

漢文學講義

佐々木天遊

材木巖記

林鶴梁

己未十月。余自二羽州一還。過二奥州下戸澤一。覩二所レ謂材木巖一。巖嵓々聳立。高數千仞。上摩二霄漢一。幅數百間。下有二一溪一。清冽如レ鏡。石根入レ水深。又不レ知二其幾千仞一。蓋其全形一石。壁立削成。而有二直坼者一。如レ攢二棟梁一。有二横裂者一。如レ列二桷椽一。所三以有二材木之稱一也。余得下其石片崩墜在二地上一者上。細覩レ之。其質堅緻。類二豆州御影石一。而石或四角。或六角。皆如二

琢磨成之者。澤々可以鑑焉。甚乎天巧之奇至此也。巖固骨立無膚。然石之崩墜者。其迹欲然成罅、而松生長其間。蒼髯黛色。浸影溪流。又有小鳥數百。翺翔和鳴於巖樹中。粧點以添其景致。實天下之奇觀也。屬吏杉立某在側。謂余曰。某嘗游松島。松島之勝。冠天下。其境彼此異觀。而今較論其勝。不易優劣也。余因慨然起嘆曰。彼名大顯。而此則寥々。無情頑石尚然。況於人耶。安政六年。冬十月三日。屬稿於福島客館。

巳未十月、余羽州より還る。奥州下戸澤を過ぎ、所謂材木巖をみる。巖矗々として聳立す。高さ數千仭、上霄漢を摩す。幅數百間、下に一溪あり。清冽鏡の如し。石根水に入ること深し。又、其の幾千仭なることを知らず、蓋、其の全形一石にして。壁立削成す。而して、直坼するものあり。棟梁を攢むるが如し。横裂するものあり。

桷榱を列ぬるが如し。材木の稱ある所以なり。余、其の石片の崩墜して、地上にあるものを得て、細に之を觀れば、其の質堅緻にして、豆州御影石に類す。而して、或は四角、或は六角、皆琢磨して、之を成もの丶如し。澤々以つて鑑すべし。甚しいか、天巧の奇此に至るや、巖固より骨立して膚なし。然れども、石の崩墜すること、其の迹欲然罅をなす。而して、其の間に生長す。蒼髯黛色影を溪流に浸す。又、小鳥數百あり。巖樹中に翺翔和鳴す。粧點して、以つて其の形致を添ふ。實に天下の奇觀なり。屬吏、杉立某側に在り。余に謂つて曰く、某嘗て、松島に游ぶ。松島の勝、天下に冠たり。其の境、彼此觀を異にす。而して、今其の勝を較論すれば、優劣し易からざるありと、余、因りて、慨然として嘆を起して曰く、彼は、名、大

に顯れて、而して、此は、則ち寥々たり。無情の頑石、倘然り、況んや、人に於てをやと。安政六年、冬十月三日、稿を福島客館に屬す。

材木巖の記、　記は、事を紀す文であります。偖、己未の歳の十月に、余、自分が、羽州地方から還りましたが、その還り路に、奥州の下戸澤と申す所を過ぎ通りまして、所謂、世人が名を附けて、材木巖と申して居りまする所の、巖石を見物致しましたが、其の巖石の形を申してみますと、矗々（矗々とは、イヨヤカに突立たる有様を謂ふ形容詞なり。）とイヨヤカに、聳え突立て居りまして、其の高さは數千仭、（八尺を一仭と云ふ。）三四千仭も、高く聳え立ちて、上の方は、霄漢（霄漢とは、大空のことなり。）大空を摩しなでゝ、見上るばかり、高く空中に聳えてをりまして、其の巖の幅は、三四百間計あります。ソウシテ、其の巖の下の方には、一脈の溪川がありまして、其の水が清く澄みきつて、丁度、鏡の様にあります、（冽も清に同じく、水の清くして冷たきこと。）が、巖の根は、溪水に浸りて、水の中に深く根ざしはいりて居りまして、其の何千仭あると云ふことは、知られぬ程であります。葢、（葢は、發語の辭なり。）其の巖の高さは數千仭、幅さは數百間、水に入るの深さは、幾千仭もある大きなものが、其の形を全ふして、全く、一枚の石より成立たるものでありまして、壁を立てたる様に、眞直に突立ちて、斧をもつて、削り成した様に、眞急に聳え立ちて居ります。ソウシテ、直坼、竪目に石の脈が、坼けて居る所がありまして、（坼は裂に同じく、サクルこと。）其の裂けて居る形が、ムナギ、ウツバリを、一處に攢め合せた様になりて居ります。又、横目に、石の脈が、裂けて居る所がありまして、其の

形は、ケタや、タルキなどを、連ね並べた樣になりて居りまして、巖の裂目が、竪横共に、材木を立列べた如くになりてをりますが、是が、材木と謂ふ名稱のある、わけあひでありますのぢや。(茲所の也字は、決語あり。)余自分が、其の材木巖の石の、一片の缺け崩れて、墜落して、平地の上に落ちて居る所のものを、拾ひ取りまして、細かに、仔細に、其の石片をながめてみました所が、其の石の質分は、堅くめづまりて居りまして、(緻も堅に同じく、堅くめづまりてをること。)伊豆國より產出致します所の御影石に、よく類し似て居ります。ソウシテ其の石が、殆ど結晶體をなして、或ものは、四角形になりて居り、又、或ものは六角形になりて居りまして、孰れも、皆、琢磨、うちみがきて、拵へ作り成したものゝ樣にきらし〳〵と、石の表が滑かに光りて、澤々、(澤々は、物の光りて、つやある貌。)つや〳〵として、以つて鑑みて、物の影を照し寫すべき程であります。甚しい乎、(甚乎とは、驚き怪むの詞なり。)天巧之奇、造物者の巧な業の、奇妙不思議なことが、此迄の事に、至り及んで居ると謂ふものは、ナントマア、大變なものではあるまいかの意あり。)ヒドイものぞよ、造物者の巧な仕事が、此の材木巖の樣な、奇妙なものを作り出す迄に、奇妙不思議にあるとは、ナントマア、奇の甚しきものではあるまいか。)茲所の也字は、決語にあらず、語勢の餘に使ふ助字なり。)

材木巖は、固より、本から瘦せて、骨のみ突立ちて、皮膚と云ふものがなく、少しも、土などを被りてをりませぬ。全く、肉も皮もなき骨計りの石であります。さりながら、(然の字は、上文の反撥して、一轉する時に使ふ。所謂轉語辭なり。)石の

切が崩れて、離れ落るものがありまして、其の崩れ墜た迹が、欿然(欿然、欿は坎に同じ。容坑なり。欿然は、窪く陷りたる皃。)と窪み陷りて、巖に間隙を生じて、罅穴を生じて居ります。(罅は間隙を云ふ。)ソウシテ、松の木が、其の間隙の生じて居ります所の罅の間に、生ひ育ちて居りまして、蒼々とした松葉の髯の(蒼髯とは、松の青葉を云ふ。松の葉が、人の髯に似たるの故に。)翠な色が、其の影を、溪川の流に浸し浸りて、蒼々とした影を、水に寫してをる。ソウシテ、小鳥が、三四百羽もありまして、巖の窪みに生へて居る所の松の樹の中に、彼方此方に翔り翔りて、飛び舞ふて、しはらしき聲を出して、和らぎ鳴きて居りまして、粧ひ點じて、其の材木巖の景色と風致とを、添へ增して、一段の好き風景を、粧ひつくりなして居りまして、實に誠に、天下の奇妙なる、面白き見物でありますのぢや。屬吏自分の下役人の、名は杉立何がしと申すものが、側ソバニ居りまして、余、自分に告げ謂ふて申しますには、某、拙者が、嘗て以前に、松島に遊びて、見物を致したことがありましたが、松島は、中々景色の好い所でありまして、其の風光の勝れたることは、天下第一等であります。(冠は、人の頭に戴くものでありますから。物の上にあることを、總て冠と申します。茲所では、第一と云ふ意。)が、其の土地の景色が、(境は、境界なり。土地の樣を云ふ。)彼の松島と、此所の材木巖とは、觀ながめを異にして、風景は、違ふて別でありますけれども、今松島と茲所との風光が、孰が勝れて好きかと云ふことを、比較しくらべて、論じあげつらふときは、容易に松島と茲所と、其の孰が優り勝れてをるか、劣り負けてをるかを、定むることが出來ぬ。中々に、茲所も、

松島に優り劣りのなき、勝地でありますのぢや
と申しました。ソコデ、余自分が、杉立某の語
を聞きましたに因りて、慨然(慨然とは、憂ひ憤
りを起す皃。)と、憤りを發し、アヽと嘆息をなし
て申しますのには、茲所も松島も、同じく、優劣
なき天下の勝地でありながら、彼の松島の方は、
景色の好いと云ふ名が、大に世の中に顯れ知られ
て、天下の勝地として、日本三景の一にも數へら
れて、天下第一の景色と、もてはやされて居る。
ソウシテ、此の材木巖は如何であるかと申せば、
則ち、其の名聲が、寥々とさびしくして、誰も其
の勝地たることを、知りて居るものさへもないの
ぢやが、何ぞ松島の幸にして、何ぞ材木巖の不幸
なることぞや。幸と不幸と、運不運と云ふものは、
無情にして心なき、頑然無知(頑は、無知の皃。)
の石に於いてさへも、尙且然り。其の樣であり

て、不仕合せな不運に遇ふたものは、好い景色が
ありながらも、一向に世間の人に知られずして、
寥々として、さびしく終らねばならぬものを、マ
シテ況んや、(況は、更進之詞なり。マシテヤと、
意味を更に推し進むるの詞。)有情の人間に於いて
をや。無情無知の石ですらも、幸不幸がありて、
世に顯れぬもののあるものを、況んや、有情の人間
に於いては、猶更のことで、左迄の人でなくとも、
仕合な幸運に遇ふたものは、世の中に名が知れて、
時めくものもあり。賢人君子でも、不仕合せな運
命に遇ふたものは、名もなく朽果つる人もあり。誠
に嘆しき次第である。(耶は、哉、乎の字と、字義略
相似たり。されども、但微しく、婉轉の意を帶び
て、乎、哉の二字に較ぶれば、悠長の趣味ありと
知るべし。)時は、丁度安政六年の冬十月三日に、
奥州の福島の旅の館に於いて、此の文の草稿を屬

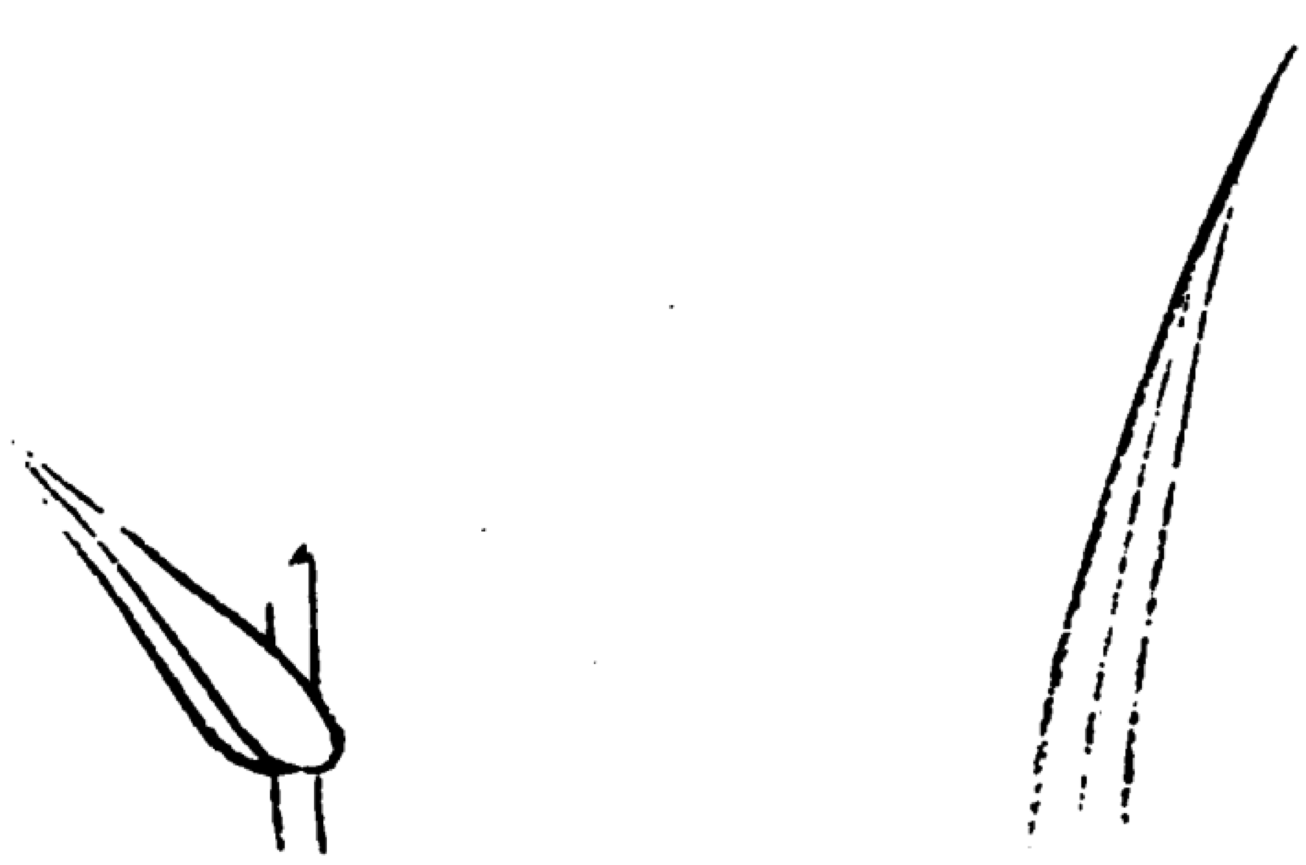
して、綴り作りました。余因慨然起レ嘆曰の、末段の二十六字が、此の文の精神でありまして、材木巖の寥々として、其の名が、天下に顯れざるに感を起して、人にも幸不幸がありて、ツマラヌ人が世に時めき、然るべき人が、却つて名さへも知られぬで、沈淪してをる。慨嘆に堪へぬとの意を寓して、全篇を結んだもので、限りなきの趣味があります。茲所らが、文章の波瀾と申すものであります。

和畫通信講義（第廿二回）

山崎彩峨

菖蒲は、濃紫白色二種の花なり。墨畫に、これを畫かむには、淡墨に筆を浸し、その筆端に濃墨を附して、符號の順に畫き、次に、淡墨を含めし筆先に、濃墨を片端に附して、子房の部分を畫き、次に、挾墨にて、莖葉を畫き、乾きてのち、花心に淡墨の限を施し、濃墨にて、葉脈を入るゝなり。彩色にては、藍紅等分の濃紫色にて、花瓣を畫き、それより、黄がちの青色に、藍か又は濃墨かを片端に附して、子房の部分を畫き、次に、尋常の草色に、藍か濃墨かを挾墨となして、莖葉を畫き、乾きてのち、藍墨か濃墨かにて、葉脈を入れ、花心に、黄色を點ずるなり。

葉　脈





眼
四十一
四十三
四十六

漫錄

女子古代の服飾（承前）

椎園信成

二、衣

此の時代は、衣といふものに、上頸、垂頸と云ふ二つの種類がある。上頸と云ふのは、上に示した處の圖の如く、襟を固く頸に卷き、細き紐を以つて、胸をあらはさない樣に結んだものである。又、垂頸といふのは、今日、我々の着て居る通りのもので、何れも、左衽で在つたのである。丈も今日のとは違つて、甚短く、膝迄に達して居ない。併し、稀には長いもあり。又、裳と一つになつて居たのも在つたらしい。之は、地中より堀出した土偶中に、往々見る處である。袖は、上頸垂頸共に、筒袖で在つて、其の行は、何れも、手くびのかくるゝ程で在つたらしい。

三、裳

これは、衣の上から腰に卷いたもので、其の長さは、脛がゝくるゝ程である。而して、其の上は、帶でしめて居たのである。これこそ、今の袴に似たもので在つたらしい。日本書紀と云ふ書の神代卷、天照大神の裝ひを申した處に、「大神、髮を結ひて髻となし、裳を縛つて袴となす」と云ふことがある。又、本書を註釋した、神代紀纂疏と云ふものにも、「下衣曰レ裳、脛衣曰レ袴、男女通用、然此裳言ニ女裳一袴言ニ男袴一也。」とある。して見れば、裳と袴とは、大抵同じ樣なもので、廣狹とか長短とかに、少しの別が在つた位であらう。

四、帶

これも亦、其の製り方は詳かでないが、古書に依つて段々考へますれば、今日の樣な長くもなく、又、廣くもなく、只、一條の紐で在つて、地質は、大抵布類を用ゐ、稀には、組紐をも用ゐ居たのでせう。又、日本書紀に「御帶の倭文機結ひたれ。」と云ふ詞があるより思へば、縞織の帶をもしめて居たのであらう。而して、此の帶の仕形は、土偶などによりて知ることが出來る。即ち、一條の紐をまはし、其の兩端をば、少し横腹に寄つた方に結び、其の端をば、垂らして居たのである。

五、襲

其の作り方は、少しもわからないが、思ふに、後世の被衣に似た物で、男女共に、顔をかくす爲の物で在つたらしい。古事記、八千矛の神の御歌に、「おすひをも未だとかねば、」云々。とあるを、本居宣長先生は、其の著書古事記傳に、「於須比は意曾比と通ひて、襲覆を約めたるなり。古は、男女共に、人に誰と知られじと、面貌をかくす料と見えたり。……扨、女は、常に人に見らるゝを耻ぢて、顔をかくすものにしあれば、いつとても着けたるなるべし。」と書いて居られるが、誠にその通りで、外出の時などには、頭から被つて、衣の上を被ひ、下は裾まで垂し、内に居る時には、頭に被つて居るのをはづして、裄まで下げ、裾を引上げて、腰にでも纏つて居たのでせう。

これ等の衣服の原料としては、布類が尤も多い。これは皆、麻、栲、葛、楮などの皮で織つたものである。以上の布類を總稱して、上古は、タヘ又はハタと名づけ、其の中、上品なのをば、ウツタヘ、アカルタヘ、テルタヘと云ひ、柔かなのをば、ニギタヘと云ひ、粗惡なる苧布、葛布、志奈布、麻布などのたぐひは、總稱をアラタヘと云つて居

る。又、布類の緯糸を種々の色に染めて、横ざまに織つたところの、倭文子など云ふものも在つた此の他稀には、絹や絁と云ふ樣な物を、用ゐて居た者も在つたけれど、元來我邦では、昔より清淨を以つて貴しとして居る人民であるから、絹布などは卑しいものとして、少し身分のある人は、用ゐなかつたのである。
又色も、此の時代は、白を貴び、赤を其のつぎとし、青、黒の色は、非常に卑しむで居たのである。此の時代、かやうな色をつくるには、榛、鴨跖草と云ふ樣な草の、花や葉を用ゐ、又、色土をも摺りつけて染めたもので、後世摺衣と云ふのは、即ちこれである。以上申しましたので、衣服の事は、大畧おわかりでせうから、次は、頭髮の事、及び、裝飾品について記ることゝいたしませう。(續出)

女子要書解題（比、毛、之部）

三浦千畝

女訓 ひとへごろも　一卷

卷末に、『太氣能綾足これをしるす。幷妹伎都女、をちこち説わかすことばをくはふ。』とあり。綾足は、陸奥の人にして、建部氏なり。初め、俳諧を業とし、涼袋と號せしが、後俳諧をやめて、凌岱に改む。又和歌を能くし、國學に通じたり。晩に、片歌を唱へ、自ら道の中興を以つて擬す。性極めて豪放、一世を玩弄す。安永三年歿す。年五十三。

此の書、大意は、序に、『(上略)ことさへぐ唐ふみの中に、曹大家とふ刀自、をみなの誡めを七つのくだりにのりわけ給へるものぞ、いと貴く覺ゆるなべに、こを大和言にかいとり、又此國

がらに當らざることは、かいそけおどして、廣く、少女等が讀まんものとせばやと、云々。あや大理大人にまみえて、やつかれ久しく、しか思ひしことと語り侍るに、やがて、十まり七つの條に、さる教どもをかいつけて見せ給へり。云云。明和七年かのえ寅とふ年の長月、かは非うましゝるす。』と見ゆ。さて、書名をひとへ衣と號けしは、唯うらもなくといふ意なりとぞ。

桃の若葉　一卷

上杉鷹山侯の著なり。侯の略傳は、『老がこゝろ』の解題にいへり。此の書の大要は、左の卷末の文を見て知るべし。

ことし文化の五、夏、我家の孫女嫁するに臨みて、常に心にとゞめ置べき事、書記してよと求るに、余が聞事の寡き、其の益あらん程の事もあらねど、切に求る志を感じ、稻船のいなむべきにもあらねば、曹大家の女誡などに本づきて、其の有增を解し安からんやうに、和語にあらはし、其の他、古人の云ひ置し事ども取集めて、此の行の贐とおし侍る。

拙稿、回を重ね號を追うて、本紙の餘白を汚すこと、こゝに一年餘。一と先づ、今回を以つて此の稿を結び、他日その漏を補はんとす。蓋、變化乏しく、興味少なき這般の記事は、到底讀者諸媛の欠伸を禁ずる能はざりしならん。加之、余の陋學なる、解說極めて下拙、粗誤亦多かりしことを信ずれば、今、この稿の終りに臨み、深くその罪を謝す。諸媛焉を諒せよ。

各國婦人の特色（承前）

三石直方

▲他の長は、資つて我が短を補ふべし。他の短は、以つて反省の料とすべし。
▲たゞ我長をすてゝ、他の長短をあはせ取るの愚をなすべからず。

（十七）媒人程合を見はからひ、二度目の書簡を出す。此の書簡出たる時、花娘に衣服を着かへさす。花娘、支度出來たらんと思ふとき、媒人、又三度目の書簡を出す。此の時媒人より、多蒙盛設深感厚意且請成席と、あいさつす。主人程よく酒席を引く。既に、花娘の用意整へさせ、内房の口より、直に轎子にのせ、僕など轎子を舁きて、廳堂に送り出



す。媒人立つて辭儀をなし、先にたちて出れば、すぐに、花娘の轎子を舁きいだす。親類の婦女は、内房の口迄おくり、親類朋友なども、外廳の口までおくる。其のあとにて、女婿も、立ちて主人にむかひ、多謝丈人錯愛といひ、又、一座の客にむかひ、各位先生少倍と、いふて立ちいづる。みな〳〵送らんと跡より立てば、婿、不敢々々請留步といふ。婿、廳堂口に出づれば、主人堂前に立ちて、禮儀をなす。媒人堂前にて、主人並に、親類朋友抔に辭儀をして、先にたち門前にて轎子にのる。花娘の轎子は、媒人の轎子舁上げたる跡にて、行列をとゝのへ、

此の花娘の轎子を、さかさまに昇出すなどいふ事はなし。又、先祖四品以上の官に昇りたるもの、子孫は、執事等の儀仗をもちゆ。（四品以上の官、知府布政司の類。）

紅燈　執事（一に、鸞駕と云ふ。）鼓樂　旺相　紅黑帽　喝道

（十八）花娘の轎子ゆきたる跡にて、新郎（花婿と云ふ事也。）轎子に乘る。

（十九）男家より一丁程も前より、媒人、人を遣し、嫁の來るよしをしらす。

（二十）男家の門前には、人を出し、花娘の來るを伺はせ、媒人の使來れば、直に內へしらす。內にも用意して、主人、媒人の迎として門際を出で、手を拱きて立ち、媒人轎子より下りて、主人の前に來れば、主人勞駕と云ひ、媒人豈敢と答ふ、主人先に立ち、案內して廳堂に至り、主人より請上座と云へば、媒人不敢當と答へ、主人再應請座々々といへば、媒人得罪と云ひて、傍娘、（婢の類。）新娘を轎子より下し、廳堂の口にて、傍娘等、兩方より手を引きて、媒人の次に立たしむ。養娘等傍に付添ひ、（養娘は、乳母也。）花娘の衣裳は、下に、披風袂衣と云ふ樣ある、常の衣服を着し、上に、大紅の圓領といふ上着を着し、頭に、頭面覆と云ふ紅の被やうの物を着す。

（二十一）新人相見畢りたるとき、父母廳堂に上り、椅子に着す。新人二人並びて、天地を拜し、次に、家廟を拜し、次に、父母を拜す。畢つて、新人二人を、傍娘養娘ども案內して、他の室に入る。此の跡に、母は廳堂を立ちて、內廳に入る。父は媒人幷に親類客に、請寛と挨拶して、內廳に入る。外廳の客、おの〳〵座定りて、談話におよぶ。奴僕茶を持出で、媒人にすゝめ、次に、相伴の客などにも茶を出し、茶終りて、桂圓湯、扁豆湯、杏酪の類を出し、卓子を出し、酒宴を始む。主人出で、

媒人の盃を取りて、酒を掛み兩手にさゝげ、奉敬一盃種々費心多勞々々と挨拶して、其の外の客にも、來位相煩、來陪請、寬暢飲と挨拶して、酒をすゝむ。



（二十二）新娘は、先に一室に來りて立居る。新郎より入來れば、養娘より、相公請座といふ。新郎床の緣に腰を掛く。此の時、儐娘新娘を伴ひ、同床に座せしめ、儐娘合巹、盃を持出

で、二つに割りて手にもち、丁髮等、酒瓶の酒を、程よく二つの盃につがせ、こも〴〵盃に移し合せて、新人二人に一時に呑しむ。是を合巹といふ。(瓢、或は金にて造り、中より二つに割てもちう。)合巹畢りて、始めて、花娘の頭面覆をとり、圓領を脱がせ、天青色の(紅桔梗といふやうなる色也。是は、清朝の吉色にて、男子は、妾に服する事能はず。先祖にても、天子よりたまはりたる事あれば、庶人といへども、着する事を許す。)上着を着かへさす。其の時、母ならびに親類の婦女姉妹の類、皆來りて談話して盃事あり。新娘は、答話せず。諸事、傍娘養娘等答話す。

(三十三) 外廳には、媒人其の外の客、酒宴深更にいたり、興酣なるとき、爾家、(下部の内、年よりたる手代やうなるもの。)紙にて張ぬきにこしらへたる獅子を持出で、廳堂の眞中に据置けば、衆客酒興に乘り、爭ひて、獅子の手をとり、足頭を取りて、銘々分取にす。

(三十四) 第三日目には、花娘早くおきて、父母の居間に行きて辭し、室中に入る。婿も、はやくおきて支度し、父母を拜し室中にかへり、新人二人、同卓にて朝飯を吃す。此の日より、親類朋友都來道喜、また、親類朋友より、慶賀の贈り物品々あり。何れも、謝帖を修する也。使の者には、賞封をとらす。(婚禮の日より送るもあり。定たる事なし。)

(三十五) 婚儀濟みて、三日目或は五日目程に、婿の方より請帖を以つて、外父外母を招請する事あり。是を進門といふ。(請帖は、父の名を以つて申入れ、外母には、母より帖を遣す。)此の日に、酒宴をまうけ、親類朋友にも案内して、饗應す。又、樂人等をも呼おく。外父外母、暮前より出宅す。遠路なれば轎子を用ゐ、近邊なれば歩行す。外母は、近邊なりとも、轎子を用う。花娘の兄弟姉妹も打連て、婿のかたへ一同に來る。女は皆轎子をもちう。

(三十六) 婿の門前には、下部の者うかゞひ、外父外

母の來るを、内にしらす。主人並に婿等、廳堂の口、また門限迄出むかひ、手を拱きて、主人より、敢勞移玉といふ。客、豈敢々々と答ふ。主人案内して廳上に至る。堂客(すべて、女たちを堂客と云ふ。)養娘の類出でて、廳上にて迎へ、しばらく立ちて挨拶す。其の間に、養娘の類、花娘を伴ひ出で、堂客に挨拶して、内廳に伴ひゆく。

(二十七)主人は、外父小舅等に挨拶して、椅子に坐せしむ。婿は、下座のかたに、手を拱きて扣ふ。(饗應は、婚禮吉期の時の如し。)

(二十八)内廳には、花娘の兄弟の妻女、並に姉妹等にも、卓子を出し饗應す。相伴は婿の姉妹、並に、兄弟の妻女等出で、陪坐す。母出で、外母に酒を勸む。(饗應は、吉期と同し。)

(二十九)酒宴深更に及んで、客より挨拶すれば、主人も、程合を見合せて、席を納む。

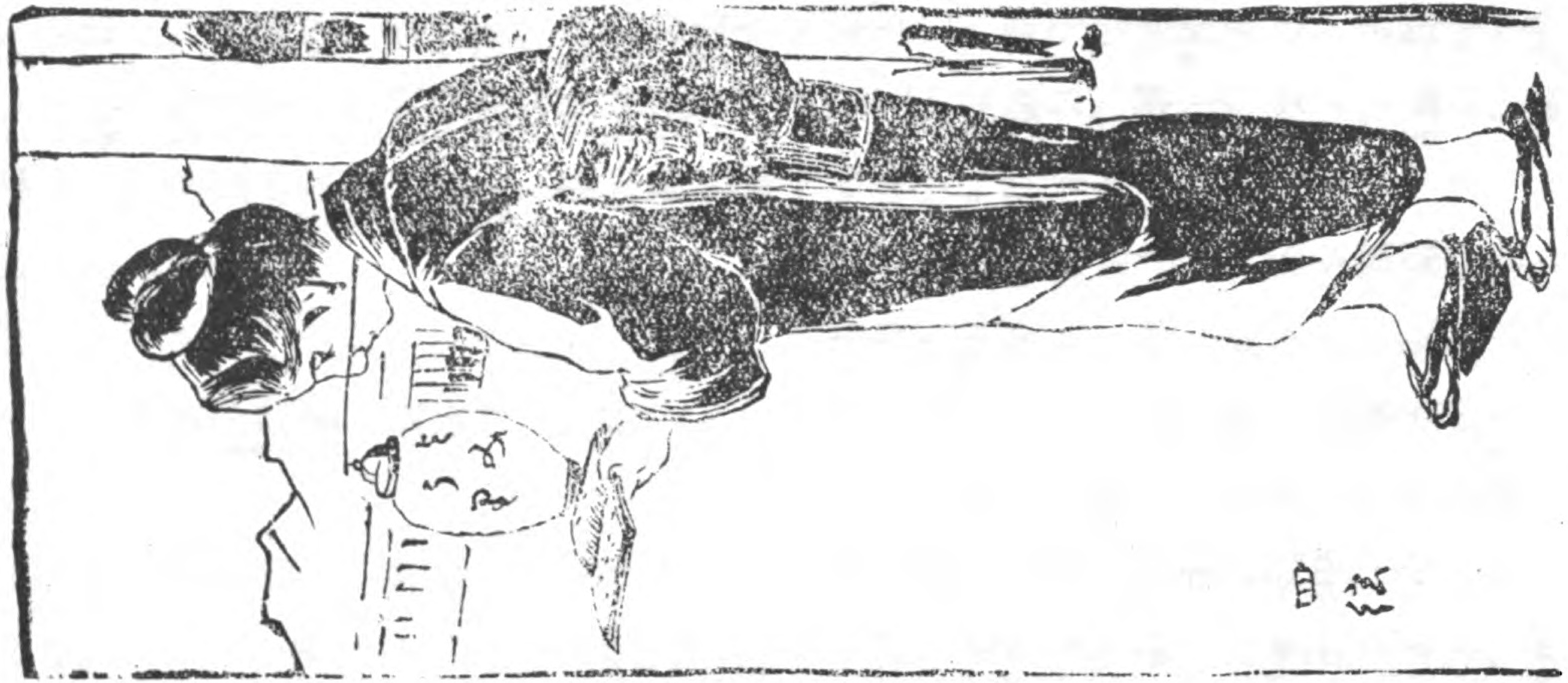
(三十)進門すみて、數日過ぎて、舅のかたより婿を招請する事あり。此の時、新娘も伴ひ行き、是を回門といふ。(此の方の里びらきなるべし。親族を請せず。)

(三十一)婿舅方の門に入れば、舅父廳堂口に出でむかひ、案内す。婿、廳堂に至りて、下座のかたに手を拱きて扣へ、丈人請坐といへば、婿、辭讓して、不敢と、答へて坐せず。丈人強て、請坐々々我也要坐といへば、婿、得罪といふ。丈人まづ、主席に坐せば、婿も坐す。親戚朋友など出で、婿に對面す。婿立ちて、逸々辭讓して、請坐々々といふ。一同に椅子に坐す。

(三十二)花娘は、轎子のまゝ、直に、内廳口まで舁ぎこむ。轎子より下りて、養娘など付添ひて、廳に入る。

(三十三)内廳には、嫁の母をはじめ、姉妹姑の類までも相伴して、嫁に饗應す。父も折々來りて、酒

を勸む。外廳の酒宴畢れば、內廳も見合せて、酒宴を收む。婿立ちて、丈人に挨拶して、廳をくだり、其のゝち、內庭よりも、嫁も姉妹も、辭儀して、外庭に出來り、外庭口にて轎子に乘り、養娘など付そひて、門を出づ。



（三十四）婚姻の後、一月程を過ぎて、嫁、親里に歸省する事有り。此の時、人事として、品々贈物あり。（菓物時新の物、或は、火腿の類、等しからず。）親里に、一月程も逗留し、迎來りて歸る。此のとき、舅の方よりも、おくり物有り。（品々ひとしからず、是、古の歸寧の遺ならんか。）

（三十五）舅の方より、娘に逢ひたき時は、僕奴を以つて申遣せば、嫁より公姑にうかゞひ、其の後、夫に伺ひ、幾日頃にまゐるべしとて、日取を定めて、實母の方に返事して、其の日になりて、公姑丈夫にいとまを乞ひてゆく。親類朋友より、此娘を招請する事なし。翌年の正月か、或は、壽誕などのついでにまねく。態々嫁をつれ行く事はなし。（清俗紀聞）

以上は、支那北部一帶の儀式慣習にして、南部廣東附近にては、近時、專ら聘禮を重んずることにのみ傾き、聘禮の輕重に由つて、婦女の美醜を別つに至れり。今、其の聘禮として贈る金額の最も少なきは、五六十兩にして、多きは、千兩内外に及ぶと云ふ。左れば、極貧のものは、假令結婚期に至るも、聘禮を濟す能はざるが爲め、空しく、恨を孤閨に呑むもの少からず。

夫の米濠等に、出稼ぎせる幾萬の支那勞働者の多くは、獨身者にして、勤勉貯蓄數年にして、歸國するは、蓋、十分の聘禮を齎して、目出度、結婚式を擧げんと欲するに外ならざるなり。

此の如くなれば、支那婦人は、聘禮の輕重に由つて、其の身命を左右せらるゝものにて、殆ど、物品賣買の嫌あり。然れ共、之あるは、畢竟、婦人の獨立する能はずして、男子に依るといふ弊習より來れるものなり。（完結）

はきよせ（五）

在近江　松竹莊主人寄贈

大阪の町中を、淨るりを語り、三味線を彈き、米を貰ひあるく乞食同樣の竹次郎とて、あだ名「しつかり」といふ男あり。此の者、少し愚なる生れつきにて、若き時、大阪にて名高き三味線彈、鶴澤某の弟子となり學びけるが、生得愚なる者故、覺えあしく、數年稽古すると雖も、つひに一段も、習ひしまゝには、語る事も彈く事も出來ざりけり。されども、師匠を大切に敬ふ事厚し。師匠死して後家一人暮しけるが、誰有つてたづきを助くべき者あらざれば、家財をも賣り食にせしまゝ、今は、朝夕の烟もたちかねるを、多くの弟子あれども、

誰とて、世話致すべしと云ふ者無きに、竹次郎、後家の家に至りて云ふやう、私、愚にして、もはや年三十に近しといへども、女房さへ無くて、獨ぐらしなり。實に人の情にて、其の日を送り、飢渇を凌ぐまでなれども、御師匠様に習ひし、三味線の彈き語りにて、家々の門先に立ち申さば、やはか、三四舛の米は得られざる事なかるべし。夫を以つて養ひまをすべければ、我等方へ來り給へとて、頓て引き取り歸り、市中に出でゝ商家の店先に至り、一切語るべしと云へば、店の手代共、ひまの折からは、をかしきものに思ひて、望にまかせ、店先の邪魔にあらぬ樣にして語る。愁の所も、乗地の所も同じ節に三味線ひきければ、笑はれ、仕まひて米を與ふるに、しつから然下といふ。是多くつかみて呉れよといふことにて、終に、あだ名となり、名を呼ぶもの無かりけり。後には、師匠の女房を、母の如くして養ふことを、皆聞き知りて、米も多く與ふる樣なりけれ共、三味線箱に一杯貰ひたむれば、其の餘を貰はず、早々持歸りて、師匠の後家に渡し、風呂へ入る錢までも、後家に貰ひ、やがて行くなり。市中にて錢をやらんとて、手に渡せども更にうけず、米を貰ふは三味線彈の法なれば、貰へども、錢は請くることなし。若、持ち歸れば、おしげさまに叱らるゝといふ。(おしげといふは、師匠の後家の名なり。)さて、毎日〱三味線をひきに出るには、後家に禮をなし、又、廻り道して、師匠の墓に詣で、市中に出づるとなり。後には、誰しらぬ者なく、此の者を呼び捨てにせず。殿付けにていふ。竹樣々々とも呼べり。自然と名を敬ひて呼ぶは、師匠を大切にする德なるべし。かゝる貧しき愚なる者にても、斯く師匠を大切に敬ふべき事を守るに、歴々方に、師

弟の義の缺げたる人はいかにぞや。

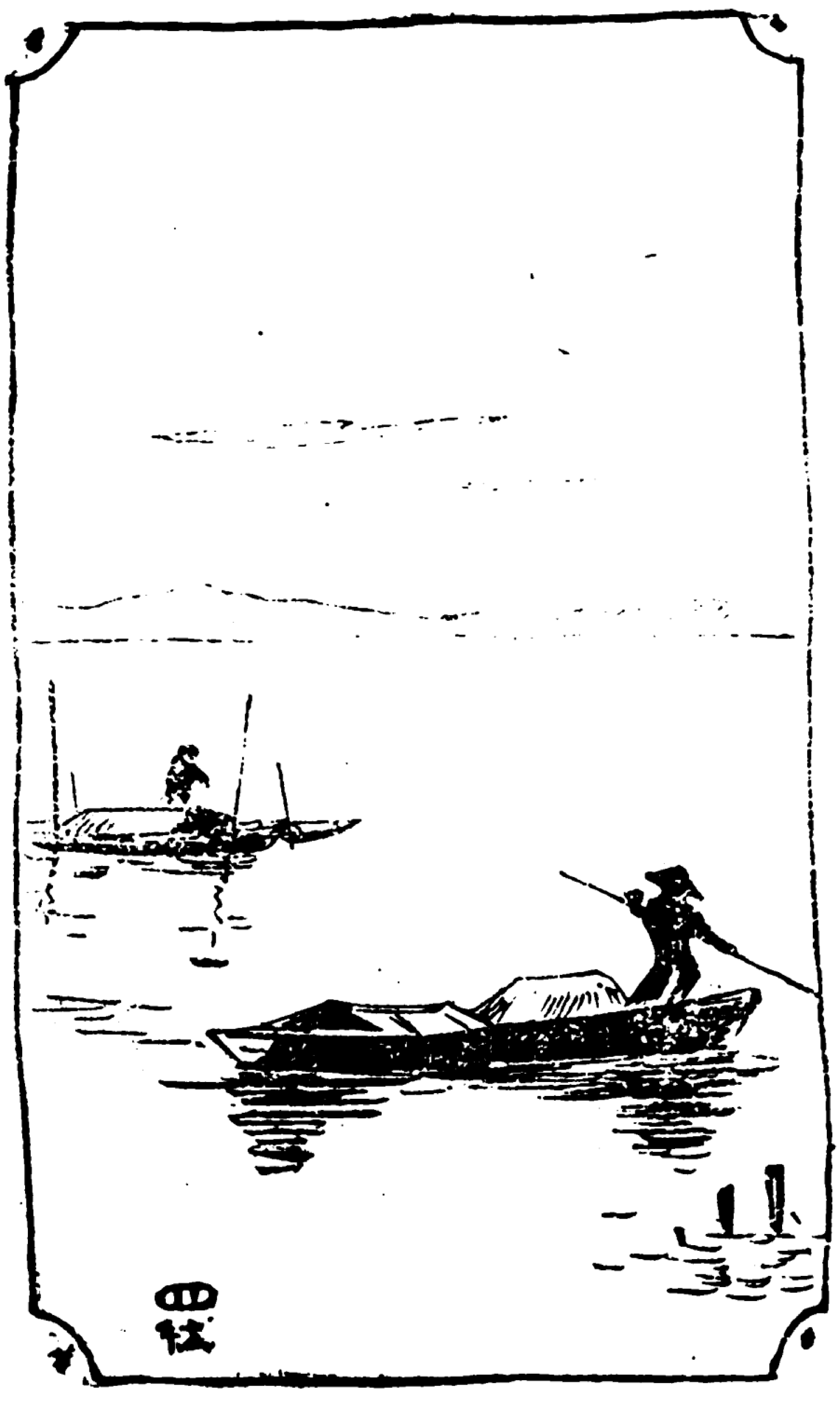
大和めぐり（承前）

井上頼文

六日　（午前の記者は澤田氏なり）

一眠りしたらむと思ふ程、夢は、はしなく破られぬ。何事にかと聞けば、鹿のなきたりとて、人々のいひさわぐなりけり。春日わたりならむといふ聲す、われも聞きぬ。われは、夢のうちにてなど云ひしらふ。あなかま。よしなき事にたちさわぐ人たちよと、頭ひきいれて、今一寢入と思へどかひなし。とかくするほどに、はや空は白みそめしなるべし。厨の方もさわがしうなりぬ。はしため等の起き出で丶、朝げの用意始めしなるべし。戸あくる音、向ひにも隣りにもおこりぬるは、全く明けはなれたるにや。折しも、柱時計のなるを聞けば、五時なりけり。奈良の早起とは、かねて聞き及びたれど、思ひの外なる心地せられたり。人人の聲もをさまりぬ。再夢路にたどり入りしなるべしなど思ふほどに、われも、又まどろみぬ。おきよ〳〵の聲に驚きし頃は、夜全く明けはて丶、皆すでに起き出でたる後なりけり。さてもねすぐしけることよとて、急ぎ床收めさせつ。（評、いぎたなといひそ。きのふのつかれもあるに。）ほどなく朝げもをはりぬれば、いざとて出で立つ。時に七時なりけり。今日は空のけしきあやしげにて、雨さへそぼふれり。蝙蝠傘さしかざして、二三人、四人づ丶連立つ。猿澤の池に名殘を惜みて、今日九重にとよみけむ八重櫻を、いくたびとなくかへり見つ丶行く。奈良坂を上れば、右手に長屋やうの物あり。光明皇后御浴室の遺趾と、ふだ打ちたり。三間に十四五

間もや有らむ。いと荒れ果てたり。二三町も來たらむと思はるゝ右傍に、般若寺と云ふ有り。治承の亂れに兵火にかゝりしかど、門と經藏とのみは殘りたりといひつたふ。扁額の三字は、嵯峨天皇の宸筆とも、又、空海法師の筆とも云へり。定かならず。抑、此の寺は、三十五代舒明天皇の勅をうけて、高麗の慧灌法師、般若寺といふを造れり。其の後、聖武天皇の御時、伽藍となり、般若寺と改む。前なる十三層の塔は、おなじ天皇の御建立にかゝれり。岩淵寺勤操僧都之を作る。高さ五丈餘。中には、天皇宸筆の紺紙金泥の大般若經、一部をゝさめたりなど云へり。又大塔宮の、此の寺に忍ばせ



たまひしをり、ひそみかくれて危難を免れたまひし經櫃ありと聞けど見ず、門を出づる頃、師の君たちの來たまへるにあへり。かくて八九人とありて、共に急ぐ。先手の人々は、早、遠く行きしなるべし。こゝは、すでに町のはづれなり。やゝゆくほどに、道左右に分れたり。右は笠置道にて、左は京道あり。近しと聞きて、道を左の方

に取れり。前の人々におひつかむとてなりけり。傍に、木標あり。大和、山城の界と記せり。又道二つにわかる。こたびは、右にとれり。やゝ行きて山路にさしかゝれり。行く事一里餘り、笠置への本道に出づ、かなたよりこし人に、われ〳〵如き様したるものにあはざりしかと問へば、あへり、今すこしさきにてと答ふ。行き越されしをくやめどせむなし。こゝは、相樂郡、梅谷村と云ふめり。師の君たちは、こゝの茶屋にてやすらひたまふ。われらは急ぎて、先手の人々に追ひしきたり。此のあたりは、おかしき所もなし。式内加茂神社にぬかづく。かくて、木津川のほとりに出づ。わたし舟にて、向ひの岸にうちわたる。後にてきけば笠置への本道は、彼の岸の山ぎはなりとかや。すべて、此のあたりの山のけはひ、川のけしき、いとおもしろし。一里餘りの道は知らぬ程に過ぎたり。しばしかたへの茶店にいこひて、あるじに笠置寺までは、こゝより、いかほどあるかと問へば、此の川のあなたにて、凡そ八九町もあらむといふ。用なき川渡りせし事よと、くやみ再かなたにわたる。山影の細き道なり。程なく笠置村に入りぬ。空は、いとようはれて、風少し吹き出でたり。かゝるほどに川を渡らで、山ぞひの道をたどり来たまへる師の君にゆきあひぬ。いでや、昔のあと弔はむとて、おの〳〵傘を杖にして、笠置の山をよぢ登る。坂は板を立てたらむやうにて、二三町の程は、鼻も地につかむ計りなりき。左に曲り、右に折れ。つゝらをりなす八町の急坂を、あへぎあへぎ、やう〳〵のぼりをへつ。瀧なす汗は、衣をとほしてしとゞになりぬ。松の雫も半置きそへしあるべし。(評、松の雫の一句、いとめでたし。)さるにても思ひやらるゝは、元弘の昔なりけり。かしこくも、一天萬乘

の大君にまし〳〵て、ある時は西海の波に御心をくだかせたまひ、さては、此の山の松吹く風に、御夢をおどろかし給ひけむ事よとおもへば、いきどほろしき事、かなしき事など胸にせまり、そゞろに涙ぐまれて、われしらず、袖は、いやそぼちにそぼちぬ。小高き所の松が根に腰うちかけて、あたりの景色打ち見やる。峻山左右に聳えて、天然の険とはかゝるをやいふべからむ。こゝの谷かげ、かしこの山の端に、木々のもみぢの目もあやに、錦おりかけたるは、其のむかし四十九の僧坊が、兵火にかゝりけむも、かくやとおもはれて、いとあはれに、はらわたもたちきらるゝ心地す。誠や、こゝは行宮の舊趾といへど、今は、たゞ、僅に一堂の殘れるのみ。しばらくして、師の君たちも登り來ませり。茶など、こゝの僧に乞ひ受けてひるげをへつ。こゝの寺の、下仕などにやあらむ。物など運びゐたる僧あり。ほどよくもてなす。此の僧、丈たかく、眼大きく、其の聲梵鐘の如し、辨も亦さはやかなり。(評、此の僧實に、元弘の遺物。)其のかみの事ども語り出でゝ、慷慨の狀おもてにあらはれたり。我らも、いよ〳〵懷舊の情にたへざりき。(未定)

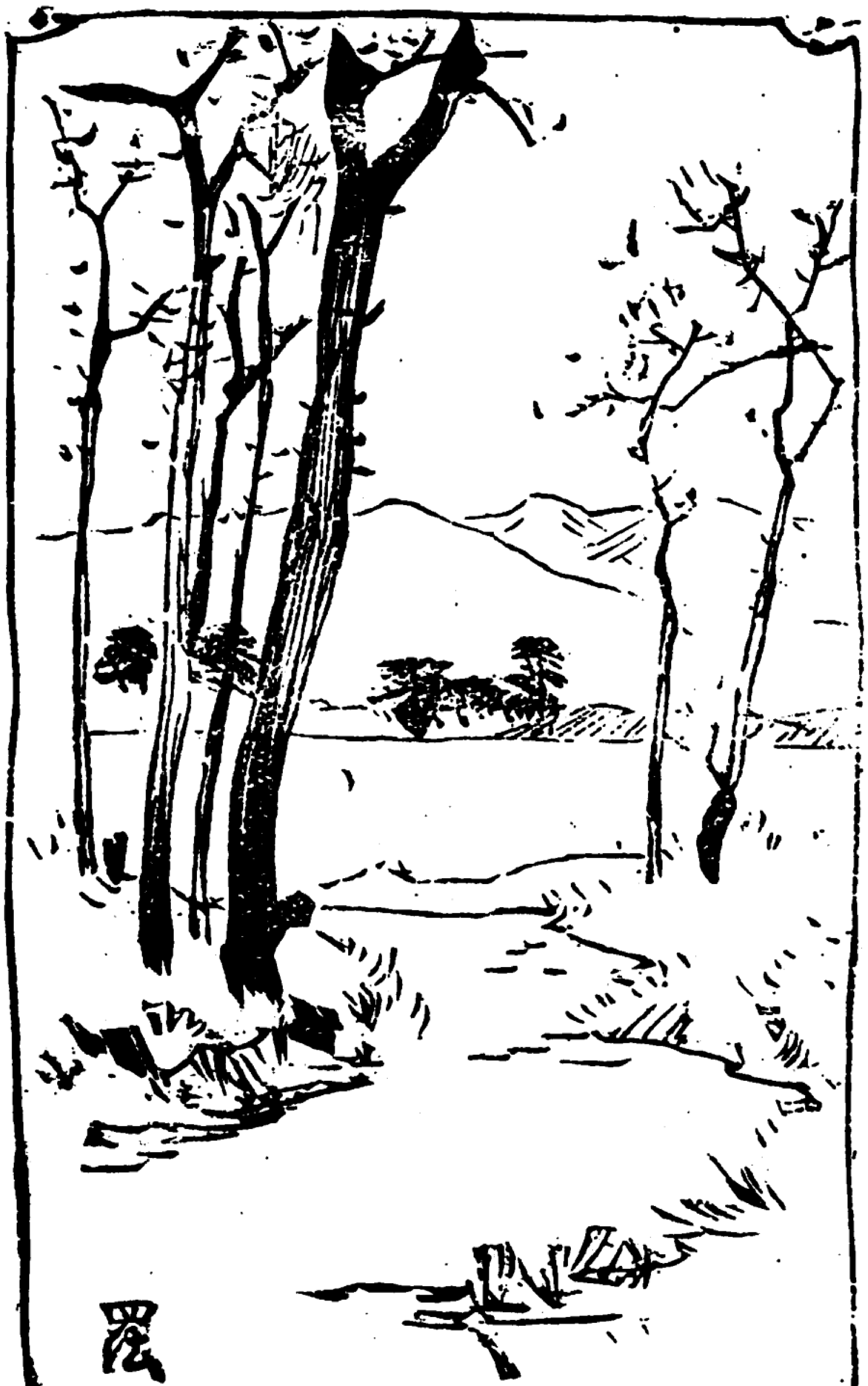
衝口漫言(十二)

白松園主人

◎消極的諷刺

眞金吹く、吉備の中山の麓なる、なにがし村と云ふ里に、富み榮えたる家ありけり。この家に、ことし六十ばかりなる樂隱居あり。物足らぬ事もなきまゝに、我世とぞおもふ此の世をば、いと温かにふるほどに、出入の者、朝夕に絶ゆることなく、春光門にみち〳〵たり。そが中にも、彦八と呼ば

れたるをのこは、ことし四十余りあるが、わきて辨口ある者なれば、日毎にまうきて、昔物語をなしては、樂隱居を慰めけり。この樂隱居、すぐれた話の好きなりければ、彥八のくる毎に、彥八話せ〳〵とぞ云ひける。いかなる過世のむくいなりけん。この樂隱居、鼻欽げて、物云ふ聲のあやしう鼻聲なりければ、あかぬ事もなき中にも、足らはぬ事はありけりと、皆人いとはしがりけり。さるほどに彥八は、日毎の



昔物語に、さすがの話上手も漸く種うせて、あす、また話せと云はるゝ時はいかにせん。まめやかに責めらるゝ苦しさに、要こそあれと思案して、その夜をすぐしぬ。明くる日、隱居は、いつもの如くに彥八話せ〳〵と云はれければ、彥八承りて、さていふやう、やつがれ昨日、さる山に薪とりにまかりけるに、計らずも、いといかめしき天狗にいであひ侍りぬ。殺されけるよと思ひしに、さはなくて、天狗の申すやう、はやをれ樵夫よ、おのれと角力取

りね、いなむ時は、辛き目見せん、といはるゝに、せん方なくて、隙をうかゞひつゝ、よその處にては叶ふまじ、と躍り上りて、高やかなる鼻を、兩手にしかと握りければ、さすがの天狗もたまりかね、鼻をばつまゝれながら、彦八、はなせ〳〵と申し侍りぬ、と聲怪しげに眞似びければ、隱居は、顏を赤めて、再び云はずなりぬとぞ。

如上の如きを名づけて、消極的諷刺といふ。たとへ、その目的を達し得とも、頗る蠻的の陋手段と云はざるを得ず。曾呂利新左衛門の一諧、蜀山人等の諷刺的狂歌、馬琴の胡蝶物語の如きも、未だ、この範圍を脱する能はず。之れ等は、概ね愚弄的にして、惡聲あり。野卑なり。人を善道に導くといふ趣意に反せり。故に、特に、文明時代の人の取るべき手段にあらず。淺見絅齋の如き、高山彦九郎、及び蒲生君平の如き、賴山陽の如き、二宮尊德の如き、皆之れ、一代の好諷刺的人物なり。近來の我國が、北清事件に於ける行動の如きも、外國に對する文明的諷刺にして、その手段や積極的なり。吾人は、苟も、明治時代の民たらん者は、すべて此の如く、男らしき諷刺の、個人の上にも行はれんことを希望する者なり。

◎敬語の亂派

敬語の亂派は、明に、品性の墮落を表白する者なり。當時學生間の言語が、いかに敬語法を無視するかを見よ。師に對する語も、親に對する語も、他人に對する語も、すべて差別なきが故に、從ひて、之れに對する禮法も、しかならざるを得ず。但、こは生徒のみを咎むべきに非ず、教員の如きも、注意せずして、自ら此の不敬を來すもの多し。されぱこそ、讀本の中に、君主に對する處を講せしむるにも、平民に對する語を用ゐしめて、怪ま

ぬなれ。こは、東京などには、却りて多し。ある東京の小學校生徒が、乞食を指して、お乞食といふ者は云々。と云ひけるを聞きしが、敎員は、もとより何とも云はざりき。さらでも。乞食の事を菰被と云はずして、お菰といふは常の事なり。敬語の轉倒も沙汰すぎては寧ろ惡むべし。女子の如きは、尤も敬語に留意せざるべからざるに、近來、無禮の語をもて活潑と心得、大に亂脈を來したるは悲しむべし。之を要するに、廉恥なき者は、必、敬語を省みざる者なり。破廉恥の行爲を犯して、之を咎めらるとも、さまでに思はず、之れと同じく、生徒の言尻を捕へて、その不敬を咎むれども、更に意に介せず、却りて、此の如く些細の事を咎むるは、師の度量なし、などいふ心得の者多きが如し。かくては、國語上特に國體上に、尤も重大なる美德を、蹂躪する者といふべし。

◎女子文の平調

彼の狂歌を以つて聞えたる、木阿彌(金子正雄)の妻智惠の內侍が、夫の留守に、鐵砲洲の人來訪しけるに、

てつぼうすおとにきこえしたまの客
亭主の留守はねらひそれたか

といひたるが如き、破格的の言を使へといふにはあらねど、兎角、當時、雜誌などにて、女子の手になれる文を見るに、いつも平調の文字にて、躍動せる文を見ること稀なり。おとなしきがよければとて、精神なくて、死せるが如き文を作りたりとも、何の益かあらむ。淸少納言や、紫式部の文をのみ、女のかくべき文と心得るからに、思想の進歩も、文字の使用も、氣魄といふ點が乏しきなり。一の美術として、中古文の練習をするもよけれど、思想を展ぶる點より云へば、いかにして

も、徳川時代わたりの、隨筆雜史を讀まねば、用には役立たぬあり。俳人横井也有が、俳文の一節を左に抄せむ。

◎朝寝辭

神儒佛の教さま〴〵なる中に、上は、かしこき朝まつり事より、下は、十露盤のせわしき世渡り、市の出買のその日過まで、朝寝せよとの教こそなけれ。……されば、用を欠きても寝よとにはあらねど、三四五月の短夜に、枕加減のよき頃は、朝寝こそ又おかしけれ。必ず、目の醒ぬものにもあらねど、うつら〳〵と夢見夢見ず、花の朝日の匂ひたるも、松に有明の残りたらんも、かのれやながら思へるは、起きてみるにも優るべけれ。いつもの豆腐うりの聲行すぎて、車井の走りしおと、雀の餌ばみにあつまり鳴くなど、幽閑の情に堪ぬ折しも、けうとき物申の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四つ頃にもたけすぎて、さし心得たるわらはのくみおきたる手水湯は、名ごりなくさめきりて、その奉公の氷になるもかはゆし。

流暢にして、しかも、心も詞も足らひたる。いかにその手腕の巧みなるかよ。古りに古りたる平安朝の文字を味ふのみあらんより、之れ等の文章に、眼を注ぎては如何。本誌讀者の姫君たち。（以下次號）

教の庭

梅薫風

一月二十日兼題

天　神田三崎町三ノ一南十三號深見角太郎方　鈴木はる子

鶯のねくらやいつこ世にうとき
たに間の風もうめか香そする

評、調高くはたらきあり。

地　石狩國岩見澤村　阪本粂子

いつこよりさそひきぬらむ春かせの
ふきのまに〳〵うめか香そする

評、調つゞきなだらかにゝほひふかし。

人　但馬國養父郡宿南村ノ内淺倉　田尻保代子

いよすたれかゝくる袖にゆかしくも
うめか香おくるはるのあさかせ
評、優美高調。

甲之部

夕やみになはたとれとかをちかたの
うめか香おくるの へのはるかせ
東京 山本梓子

朝戸出にうめか香きそふはるかせを
きあれてろものそてにしめはや
伊豫 竹村竹里子

乙之部

きねのころ雪ふきはらふあさかせに
かもなつかしくに匂ふうめかな
中澤とし子

あさかせの吹のまにくふみまなふ
まとにうれしくうめか香そする
志村ます子

いつのまに春は來にけんうらくと
吹きくるかせもうめか香そする
生駒もと子

やまそひのさかゐのみつなくむ袖に
うめか香かなるはるのあさかせ
横田音羽子

朝かせはよしさむくともうめのはな
さきてかなれるまとはとさゝし
田代喜和子

春かせに香をおくらせてうくひすの
こゑまちかほにゝほふうめかな
田代鶯子

うくひすの聲もなかれてうめつかは
そこはかとなくかせかなるなり
桝田登子

賤かすむふせ屋のゝきもうめさきて
に匂ひゆかしくかせかなるなり
内田さだ子

うれしくもさきつとつけて鶯り來ぬ
うめのつかひの野へのあさかせ
永井さい子

まちわひし梅はさきけりふゆこもろ
まとふくかせも香にゝほふまて
近澤和子

さねかへろ野邊のあさかせ寒けれと
うめか香にこそ浮かれ出にけれ
河原芳子

月やとろのき端のうめのさきしより
ねやのひまもろかせかなるなり
増戸そで子

咲くとしも知らぬたにまの梅のはな
かなれろかせそしろへなりけろ
松山らん子

丙之部

はろかせに梅のはつはなかなるなり
なくうくひすのこゑもきこねて
岡田桝子

梅のはなさくはいつこのいへならん
のきはにかよふかせかなるなり
三輪はる子

かくはしき梅か香おくろはろかせに
しつかふせやもにきはひにけり
齋森かの子

玉たれのなすふきはらふあさかせに
うめか香たかくかなりきにけり
北島功子

はなもなきにはの朝かせかなるなり
となりのうめやさきいてぬらん
山田よれ子

よは春になりにけらしなやまさとに
山田いれ子

ふきいるかせもうめか香そする

ふくかせにうめかならすはゝろも猶　村上操子
わかやとをとふひとなからまし

ふく風をみちのしるへに来てみれは　田村多豆子
うめのはやしはゝなさかりなり

その花もつひにと思へとなつかしき　上原操子
うめか香さそふのきのはるかせ

春かすみ立ちそめしよりこゝかしこ　後藤のぶ子
うめかゝさそふかせものとけし

そよとふく風のさそへるうめか香は　林くに子
こゝのへふかくにほへゆくらん

梅のはなわかやとちかくさきぬらむ　田島正子
ふみよむまとにかをるあさかせ

うめの花咲けるあたりは吹きわたる　井野てる子
かせもにほひてのとけかりけり

ふたつみつほころひそむる梅の花　江藤操子
かをりをさそふにはのあさかせ

うふすなの一木の梅の咲きぬらし　野村幽子
かをりもたかきまとのあさかせ

をちこちの梅やさかりになりぬらん　長澤よし子
吹きくるかせもはなの香そする

春あさみ身にしむかせもうめか香の　秋山都子
にほへおくれは寒むけくもなし

一もとの軒端のうめの咲きそめて　清水てる子
にほひゆかしきまとのあさかせ

をこたりのまとおとろかしふく風に　長谷川登茂子
こゝろうきたつうめの香そする

あら玉のとしのはしめのあさかせに　星野とき子
にほふもうれしにはのうめか香

吹く風にいとゆかしくそかをるなる　井村きく子
ふせやのにはのはやさきのうめ

朝かせにそのふのうめのかをりきて　木嶋きよ子
ふみよむまとそたのしかりける

このあさけかをりゆかしくうめの花　市村てつ子
まとふくかせにゝほひぬるかな

吹く風のにほはさりせはうめのはな　川上孝子
ゆきとのみこそひとは見るらめ

月おちてうめのこすゑをふくかせの　小高嶺子
にほひもたかしはるのあけほの

いつこよりさそひきにけんうめの花　横山芳子
かせのまに〳〵香にゝほひけり

かゝけてしはたてもなひくはる風に　瀬戸ゑい子
のきはのうめもかをりきにけり

のとかにもふきくる風のかをれるは　見永せい子
そのふのうめのさけるなるらん

千代までもかはらぬ梅の咲きいてゝ　横田秋子
かせこそはるのにほひなりけれ

おほろよに花はそれともわかれとも　椎野ぬき子
わかそてかをるうめのしたかせ

をちこちの梅やさかりになりぬらん　椎野秀子
はなゝきのきもにほふはるかせ

ふきおくる風のまに〳〵かをり來る　田代綾子
そのふのうめのなつかしきかな

うきものとおもひし風もうめか香を　徳永廣子

春かぜもかをりきにけりゆきとのみ
　さそへる今朝はなつかしきかな　德永萬壽子

ふりつもる雪もいとははてうめの花
　おもひしにはのうめやさくらん　德永純子

風ふけはとなりのゝきにさくうめも
　かぜにさそはれかをりきにけり　荒野たに子

ふく風はうめのに𛂦ひになりにけり
　わかすむいほに香をりきにけり　河田いし子

はる寒みふきくるかせは身にしめと
　いつれのうめもさかりなるらん　大阪谷信子

のとかにもふきくるかせの梅か香に
　うめのにほひのなつかしきかな　伊勢村壽子

ふく風はまたさむけれとうめか香を
　しらぬやま路をわけいりにけり　伊勢村花子

うくひすのこゑもひとつに春かせは
　おくるあしたはのとかなりけり　佐々有鄰子

梅のはないまをさかりとはるかせは
　のきはのうめの香をさそひくる　佐々小琴子

春かせの香をおくらすはのきちかき
　わか文つくゑにかをりきにけり　齊木たま子

うちなひくかすみをもれてうめの花
　うめのはつはなしらてあらまし　坂本登子

さく梅のはなのかはかり身にしみて
　さけるあたりはかせかをるなり　衣笠澄子

わかやとの軒はのうめや咲きぬらし
　かせのさむさはしられさりけり　稲原菫子

　いやなつかしきけさのはるかせ

梅か香をしつかにかせのさそはむは
　知らてやすきんしつかのき端を　岩田春子

わかにはの梅のはつはなさきぬらし
　そよ吹くかせも香にゝほひつゝ　林環子

さしなみのとなりよりこそ匂ひけれ
　わさめのまとのうめのあさかせ　牛山素子

吹くかせをしるへに遠く來て見れは
　ゆきにましりてにほふうめかな　岡田春子

春かせのふき入るまとにふみよめは
　いつこともなくかをるうめか香　岡田みき子

をりをりにかせのはこへる梅か香は
　となりのにはのこすゑなりけり　松村あさ子

吹きわたる風もゆかしくかほれるは
　うめのはやしやちかくなるらむ　田村稻子

はゝきとる手にもさむしと思はぬは
　うめかゝほりをさそふあさかせ　岡田いの子

玉たれのをすのしたかせかをるなり
　のきはのうめのはなさきしより　岡田とも子

一月廿日兼題

遺失物を返しやる文

天

伊勢國渡會郡宇治中之切町　河原芳子

昨日は、久々にてのまどゐに、つもる思ひを語り

合ひたる樂しさ、何の風情もつかふまつらず、いとはいおきわざに侍りしかど、打ちくつろぎての骨牌あそびに、心ゆく迄打ち興じ侍りしは、いみじう嬉しき極みにおん。さて其の跡にて、この包み物を見出で侍りしものから、誰樣のおらむ、はや追ひまゐらせて、と思ひ立ち侍りけるに、心得がたきまゝ、今朝に及び侍り。時しも旭はおやかに匂へる梅の小窓に、籠飼の鶯のはゝとうたひ初めたる嬉しさに、あはれ歌もがおと打ち傾かるゝに、ゆくりなくも包みの主の明らかに辨へられ、げにや、お身の初音集にて侍りしかと心附き侍るまゝ、おくり參らすにこそ。あなかしこ。

我宿に一夜とめたるかひありて
　けさうくひすの初音をそ聞く

評、簡潔にして要を得たり。

地

大阪東區平野町三丁目　桝田益子

日ごろは、思ひの外にもよそ〳〵しう過ぎ侍りしを、廣き御心にとがめさせ給はで、ふりはへて訪はせ給ひし嬉しさよ。初音きゝつけたらんよりも、中々にてあん。ひさしかりしほどの御みやび語りに、心もすが〳〵しう爽やぎ侍りぬ。立歸らせ給ひしふしは、雖も雪と思ひ給ふるもかひおければ、そう〴〵しうこそ。あやしの伏庵に、めざましう打匂ひぬるは、何ぞとふと見つれば、御そらだきの一包、御わとべにのこり侍りしかば、打おどろかされてあん。兼て、けふの御まどゐに、物し給ふよしたしかめ侍れば、夜のにしきとなさせ給はぬまにと、とく〳〵いそがせ持せおげ侍りぬ。君にもさこそ求めさせ給ひつらんかし。とのみ事て心おちゐず、とり亂しつるおめしの罪はさるかたにゆるさせ給ひて、繁き人まゝえて御らんじさぶらへ。きこえまほしき事ども侍れど、そは、御まのあたりにきこえ上ぐべく。あなかしこ。

評、うるはしうかゝれたれど、やゝうきたるふしなきにあらねば、地の位にすゑぬ。

人

東京麹町區元園町一丁目三拾七番地　野村幽子

豐坂昇る初日の光り、何となう年と共に新らしく覺え侍り。千代も變らぬ君が代を、猶萬世かけて祝ひ納めまつるにおん。扨ひと夜隔たりし去年の日、年忘ればやと御招き參らせしに、路の程の淋しさをもいとはせられで、ふりはへ出でまし給ひ、いたう嬉しう思ひ給ふるに、かてゝ御心筑紫

の琴の一とふし、折柄興まし賑々しく、山鳥の尾の長き夜も、なか〳〵に短かき心地して、名殘惜しうかこち給ひし方々われのみならず、幾人となうおはせしやに承り候。其の節、おん身の失はせ給ひし御琴の爪、はからず只今、次のざしきの思ひもよらぬ處より見出だし侍れば、とりあへず、使にもたせ、御とゞけ參らすにこそ。今日朝まだきより驚かせ參らすは、いと心なき業なれど、彈初の御例しを知らぬ人ならばさてそはあらめ。おぼろにしれるわが思ひには、日頃御用ゐ馴れし品なれば、さぞなは、恨みかぎりなうおはさんかと、御なめげをも顧みず、かくなん。いづれ、ひごろ過ぐさで參り侍りて、よろづ聞え上げまゐらすべく候。かしこ。

評、調たくみならねど、あつきこゝろばへのほど、友の君もさこそ喜びたまふらむかし。

(以下原稿到着順)

佐々有隣子

年のはじめには、青柳のいとはやく音信たまへる厚情、鳴謝の言葉なく侍り。妾ことは、いまだ、欠禮の罪さりがたく恐存候。さては、弊屋の茶室に、紫色の御ふくさに包まれしもの、御かへりのあとにて見つけ侍り。よりて、小間使の小女にもたせて、差上げ侍りぬ。御品物に侍れば、御下掌あそばされたまはりたく候。はたまた

小庭の梅花一枝、さしそへ侍り。霜雪をしのぎてさきにほひぬるけしき、うるはしく見そなはし給はらば、こよなきよろこびにこそ。あなかしこ。

星野とき子

さし昇る朝日の影も、昨日とは變り、空ふく風の景色も、今日はあらたまれる心地して、長閑なるこの初年を、いかに向へさせ給ふらん。定めて、はれがるたなど、おもしろう賑々しき御事ならんと、ゆかしく存じ上候。降りて、こなたも、事なう年を加へ候間、御心安う思召され度候。昨日は、空うち曇り、池の薄氷も、ひる過ぐる迄とけやらで、近頃になき寒さにて候ひしを、ふりはへて御出下され、殊に、御惠み給はりし御菓物は、八重の潮路を隔てたる、南の國の産とかやにて、珍らしう打嘗りて、共に年忘れ致し候樂しさは、たとへんかたなくて、日記にかきとめ申候。其の節、御手袋御忘れなされ候ひしを、とく心附なば、女中して、跡を追ひかけさせ申すべきを、大方、御家へ御着なされし頃に見出だし、口惜しく存じ候。殊に、寒かりし路の程、如何にして御歸りなされ候やらんと、宅にておぼつかなう申居候。いづれ、御年玉かた〴〵參上致し、御めもじの上、御禮申上べく候。先は、とりいそぎ、使にて御とゞけ申上候。あら〳〵かしこ。

川上孝子

住家といふも名のみにて、見る影もなきあばらやなるを、よくも舊き交りを忘れ給はで、御車をよせ給へる嬉しさは、何にかは譬へ侍らん。久しき間の積る御物語の面白さに、何といふ御もてなしはなけれども、せめて、一夜だに御泊りあれかしと聞えつるに、母君の御待ち給ふとて、歸らせ給ふを、遠く隔てぬる身は、又いつかは逢ひ參らすべきと、そゞろ御名殘の惜しまれて、御車の影見えざらむまで御見送り、門を入らんと致し候足もとに、小さき

服帛包の見あたり候へば、誰様の落されしにやと取り上げ、夕暮なれば、其の儘内に入り、燈の下に紐解き候に、中には、用ゐふるされたる小洋書一册これあり候も、あはれ横文字讀めぬ身の、折惡しく弟は、夜學に參り居れば如何はせん。さるにても、何か印もがなと開き候に、小形寫眞一葉、こは忘れもやらぬ幼き頃、御地に遊學せし頃、君と共に、お庭の松の根に腰打ちかけて、君は人形を抱かせ給ひ、わらはゝ御愛猫、玉を膝に乘せて、只樂げに餘念もなくうつせしもの。はさまれあり。當時の光景た想ひ出で、其の頃は、世に運命などいふ事のありとも知らず、只、何日までも、かく同じ事にて有るべきと想ひ候を、今はかくばかり、境遇の變ればかはる世の中よと、そゞろ昔の忍ばれ、かつは、行く末如何にやなど、さま〴〵に思ひめぐらし候。こは定めし、御乘車の際取り落し給ひしを、車夫の心づかざりしにてもや候はん。昨日は一番列車にて、御歸りあらせらるゝことゝ承りぬれば、今宵ならではと、なつかしき御遺物、今しも夜學より歸りし弟に持たせ、御届け申上候まゝ、御受取下され度、御つかれの折から、永々しき繰り言、幾重にも御わび申上候。未筆にて、失禮ながら、御母君さまへも、よろしく御傳へ給り度候。かしこ。

山本梓子

きのふは久々のたいめんにて、御物がたりどもつきせずて、引とゞめまゐらせしを、夜ふかきほどの御かへるさ、御かぜのこゝちなどそひたまはむかと御あんじ申上候。さてその折、いそぎものしたまひしあとに、御ふくさ御取おとし被遊居候へば、只今しもべにもたせ、御届け申上候。御あらためのうへ、御受取被下度候。まづは、右用事のみ。餘は青柳のいと日永の折をまちて、聞ゐあくべく。あなかしこ。

江藤操子

瀧に殘る雪の色小田に彳む白鷺も、いとゞ寒さはましがほに候を、先日は遠路態々御出下され候處、何の風情もこれなく、御そまつに打過ぎ候だん、御許下され度候。其の節、御秘藏のだいやもんど入の指輪、御失ひ遊ばされ候を、その際は來客多くて、つひ見あたり申さず、そのまゝに御歸宅遊ばされし後にて、所々さがし候處、思ひもかけぬ處より見出し候まゝ、本日、使を以つて御とゞけ申上候に付、御受取下され度候。先は取あへず、要事まで。かしこ。

横山芳子

昨日は、ようこそ御こし給はり、色々の御物語より、御久し振りにて妙なる琴の御しらべまで拜聽致し、まこと年の始めの懇親會に、こよなう樂しみ暮し申候。しかし、何の御あいそもなく、さぞ、御窮屈に在らせられ候御事と案じ罷在候。さて、折柄御歸りを急がせられ候爲とて、御大切の爪袋、そのまゝ席に殘り在候まゝ、御さらへの御妨げにもやと、とりあへず御届け申上候。何れさぶらひて、よろづ御きこゐ申あぐべく、まづはこれのみ、かしこ。

宇高のぶ子

亂れがきながら、一筆申上候。先つ日は、御遠路の處をもかへり見ず、御まれき申上候處、御いとひなく、御早々と御出下され候御心ざしの程、誠に〳〵うれしう、厚く御禮申上候。其の後は、久々御目もじも致さず、怠り心にまかせ、御たよりもたゐだゐに過し居候事なれば、何より申上げて宜しきや、あれもこれもと心にはゐがき居候へど、いざとて御目もじ致し候へば、たゞうれしさに心とられて、御はなしも後やさきに、かてゝ時こくもうつり、兼て御まれき申置候かたがたと、御揃ひ遊されて、かるたの遊びに心せき、つもる御話しも未だつきず、殘りをしう存じ居り候。

御ひまもあらせられ候はんには、何卒今一度、御みあし御はこばせ下され度、ついでながら御願ひ申上置候。さて先つ日は、御院様にて、かるた會も殊の外にぎわしく、ことにあなた様は御目立ち遊され、いつも御目出度勝をしめさせられ候御事の、いかにも御めざましやと、御歸り後、皆々様たたへ居られ候。皆々様御歸宅のあとにて、兎角取かたづけ候處、貴女様の御名刺入殘り居、さぞかし御歸宅の〻ち、御さがし遊され候はんと存じ、早速御屆けに、みづから參上致し、さきの日の御禮申上かたく\\、御手渡し致し度と、只今まで留置候所、あいにくにも、今日遠方よりの客來にて、手すくなの所とて、心ならずもたんなに持たせ、御屆け申上候間、何卒ちこくの罪御免し下され、悪からず御受取下され度、まづは御屆け物にそへてかくなん。あらく\\かしこ。末ながら御母上様にも、あなた様より、よろしく御傳へ下され度候。

長澤よし子

寒氣つよく候へば、先々御一同様、御機嫌よく入らせられ、こよなう目出度存上候。さて昨日は、わざく\\御出被下候を、何の風も情なく、御粗末申上いとく\\恥入り申し、ふかく御わび申上候。其のせつは、手風呂敷御わすれなされ候らひしを、誰ならんとも心附かず、御歸りの後、始めて相知れ、口惜しく失禮仕り候。只今、使にて御とゞけ申上候間、御改め御落手被下度候。何れ後日、御面會の節、萬々可申上候。かしこ。

瀬戸ゑい子

昨日、ようこそ御らい會下され、誠にたのしき讃芹會にておはし候。隙ば夕ぐれ御きたくのせつ、御遺失にあひなりしにや。今朝庭きよめせろ下男、萩がゝきれに結こうなろかんざし遺失ありしとて、とゞけきしを見れば、あなた様、近頃、御もとめの由仰せられし品に、まぎれもあらずと、覺え候へば、すぐさまもたせ參らせ候まゝ、御受取被下度候。先は御とゞけまでよろづはみめもじにとあらく\\かくなむ。かしこ。

生駒もと子

昨日は、新年會として、小宴相催し候處、御遠路の所も、御厭ひ遊ばされず、御來車被下、誠におん身の物事に怠り給はぬ御心のほども見ゑて、こよなう嬉しくぞんじ上候。折柄は、何くれと取まぎれ、何の御相そうもなく、おそれ入候。尙其の節、御忘れなされたろ時計、とくに御返し侍ろべきを、つひ、そのまゝ取り置き候に、今しもふと心に浮び候まゝ、早速このものに、持たせ上げ候へば、御受取下され度、偏へに願上候。かしこ。

樂園

小說

雪の梅（上）

饗庭篁村

宵の霙は雪とあり、寒をおくる戸障子の、隙間の風のおと見えて、洋燈の光またゝくに同じく、其

の身も瞬きして、オヽ積るかして、戸にあたる音もないが、屋根が時々ミチ〳〵する、是では親父さんも、嘸挽き悪からう。大層今夜は遅いが、能い仕事でもあつて、遠くまで出たのか。夫ともまたお客がないので、仕事の出來るまでと、丁場を張て居るのか知らん。一づゝ歳を取れば、血氣盛りの時分とは違ふのに、身體を大事にして呉れば能いが、私の内職の足袋底ぐらゐでは、家賃と太坊の小遣が、漸やう。アヽ身體を厭はず、無理な仕事をするのも、皆な私等を養ふ爲め。……云ふと愚痴になるばかりだから、口では禮も他人らしいと、叱られるのを考へて、云ないだけ、倘は氣の毒。……せめて、編物でも覺えて置けば宜かつたもの。……太坊や、風邪を引くといけないから、先へお寢。オヤ〳〵、折角の繪を、最う切り細ざきか。ナアニ斯う切抜いて、裏を張つて、お

相撲を取らせるのさ、淺草に犬の相撲があるといふから見たいな、今度親父さんに、左樣云つて連て行つて貰はう。母親さんも一所にお出な、何だネ此の三月は、學校へ上るといふ者が、犬の相撲なんぞを見たがつて、親父さんは、毎日お仕事にお出だから、そんな所へ連て行く隙はないよ。ソヲ寒くなつたらう。朝睡がるくせに、サア早くお寢。……母親さん一人で起て居たッて、ナニ淋しい事があるものか、ホラお寢衣がこんなに暖まつて、ソラ〳〵背中が焦るぞ〳〵、と甘やし立てて子を寢かし、あとの炬燵の火を直し、亭主の寢衣をかけながら、ホントに此樣な古家のくせに、まだ柱が干破れるよ、餘程寒い晩だ、今夜のやうな時は、無理な仕事をしないで、早く歸つて呉れば能い、こんな雪になると思つたら、お酒も最う一合取つて置いたもの、タッタ一合のお酒では、寒さを忘

れないうち、なくなつて仕舞ふだらう。……太坊は睡たから、此のうち一寸行つて取つて來て置かうか。……例だけだと思つてお出のところへ、餘り寒いから。ハイお銚子のお代りと出したら、どんなに悦ぶだらう。こんな時に氣慰さめ、悦び顏を私も見て悦びたい。……良人が雪の中を驅廻るから思へば、何でもないこと、夫だが、其のうちにも歸るか知れない。世間も大層シンとして來たが、どんなに積つたか知らんと、袖口折つて身震ひし、立上るとき、サク〳〵と音のして、夫が歸へりし樣子なれば、洋燈を明るくして障子を開け、お歸りかと聲を掛ければ、オヽ歸つた、矢鱈に戸を開けると風が飛び込んで、洋燈が消えるぜ、外はなか〳〵風があるよ。……オット能し、車は己が引き込むが、此の笠の紐を解いて呉んねヱ、手がかぢかんで。……太郎は寐たのか。……夫は

能かつた。……足は雪で奇麗だから、拭いて置きやァ能い、隨分積つたよ、吹溜りぢやァ五六寸あらう。此の分で朝まで降り通しちやァ大事だ。往來でも一尺餘は積るだらう、左樣すりやァどうせ仕事にも出られねヱから、屋根舟を仕立て、雪見と洒落やう。アハヽ、車夫が舟遊山と來ちやァ、郵便や新聞の配達は、滊車旅行と出かけるだらう。オイ炬燵の火は澤山だよ、急に强い火にあたると逆上るよ、舟遊山より炬燵の山籠り、斯く仕事から歸つて緩くりした心持は、どんな金滿家も知らないだらうよ。ヤァ最うお燗がついたのか、此のまた一杯が、百味の飲食にまさる。……待て〳〵チャンと居住居を直さないと、殿樣らしくねヱ、……有難い〳〵。……ヱお前何所へ行く。……一寸買物なんぞはいけねヱ、此の雪に今夜に限る買物もあるめヱ、夫とも餘り寒いので、一風呂暖ま

るといふ段取なら、まだ湯はあるから、行つて來ねエ、斯く献立が並んで居れば、殿様御手酌結構だ。……何だ酒を最う一合だ、飛んでも無エ、止て呉んな、此の中で、一合も酒は奢だ、己も夫ほど好ぢやアねエから禁酒と觸れ出しても、お前が夫では仕事から歸つても、話もなく手持無沙汰だから、飮で呉れと賴だから、迷惑ながら奥方の顏を立て丶、斯う召上るといふ譯だ。アハヽヽ、一合で澤山、道理で表の戸締りをしないと思つた、己は、實は餘り寒いのに、御膳も少々底を出したから、鍋燒温飩でも奢るといふ洒落かと、當推をしたのだ。其の心配もなければ、早く戸締りをしねエ。此の頃は物騷だ、家構へが金物らしいからな、慌てた奴が、銀行と間違へて飛び込むかも知れねい、銀行と云へば、腹掛まで濡れたから、中の紙幣が濕るといけねエ、出して金庫へ納めて呉んな。……ナニ今日は、カラ不可よ、夫だが聞ねエ、歸りに能い客を乘せたよ。……慾張ちやアいけねエ、能い客と聞くと、直に左樣景氣付いて、舟遊山を實行する氣になるから堪らねエ。能い客といふのは、お前も知てるだらう、一人は、盲、一人は目明の婆さん達が、琴を彈いて貰つて歩くのを。……それよ夫がの、己も今日は寒も強い上に、暮方濕氣にあつたから、最う見切つて歸らうと思ふと、千住まで急ぎといふので勢ひが付いたが、歸りはカラの事と諦めて、勸めもしずにぶら〳〵と來ると、いよ〳〵雪は本降とあり、道はグシャついて、空車でも重いのよ、こんな時には、客があると駕能いにと思つて、フイと振り向くと、外套で駒下駄がけの若い人よ、淺草の廣小路まで幾許で行くといふから、此方は誂への御客こんな時には、駒下駄の足元を見て吹掛る者もあるが、己は

そんな事はしねエ、丁度私も、田島町まで歸るのです、夜分だから十錢下さいといふと、ヂロ〳〵と己の顏を見たが、淺草の廣小路まで確に十錢かと、念を押して乘たが、大かた廿五錢の三十錢のと吹掛られて居たのだらう、是で蠟燭の冗ぢあいと驅け出したが、行には向ひ風で吹つけられ、目口へ雪が飛び込んで、挽辛かつたが、今度は追風だから、譯はねエ、忽ち廣小路へ來ると、此の客は、其所から鐵道馬車へ乘り繼ぐので、十五錢吳れた。先づ有難し是にて御歸宅と、門跡樣の後へ來ると、何だか四五人人だかりで、行倒れだといふのよ、此の寒さぢやア行倒れぢやアねエ雪倒れだらうと思ひて、車を挽きながら、其の人だかりの中へ飛び込んだ。トコロデ其の行倒れは、今話した二人連の婆さんで、手引の目明の方が、急に病氣になつて倒れたので、盲はからッきしマゴマゴして、只病人に取縋つて、お前さん死んでお吳れでないよ。と泣くばかりよ。……ア、寒い話しはまだ長い、少し炭をついで置きねエ。話し出しても濕つぽくならア。……左樣忙しなく聞きあさんな、今一杯景氣をつけてよ。……夫から、……無論勿論只見て通るものか、オイお婆さんしつかりしねエ、と飛び込んで樣子を聞くと、矢張雪で弱つたのよ、己も多分左樣だらうと思つた。家を聞くと萬年町、譯はねエ私ヤア車夫で、ドウで空で歸るのだから、乘せて行てやらう。ナアニ錢はいらねエ、心配しなさんな、……ダガお前さん、病人が目明ぢやア一人乘へ其の人を乘せて、あとの盲のお婆さんが仕樣が有ますまい、ソコだ、其所で己も少し困つた、車が合の子か、一人が子供あらどうにかなるが、加之に琴まであるのだから、飛び込んだ時は、豪氣に景氣はよかつたが、

一寸たぢろいだ、何しろ私の車は一人乘だし、お前たち二人だ、一所に乘せて行くわけには行かない、先づ病人を送つて來て、夫からお前さんの迎ひに來るから、寒いだらうが些のうちだ、此に軒下へ入つて待て居なさいと、斯ふ先づ工夫をつけたところ、へまた一人の豪傑が飛び込んで來た。お鳶、世の中には氣持の能い者もあるものだナア。其所へ飛び込んだ豪傑が、矢張車夫よ、エ、お鳶斯ういふと少し御耳障りだらうが、同じ車夫でも、向ふはズット上等だ、梶棒が象の鼻で、車へかけるのが豹の皮、着付は身體中が今出來立といふので、法被に茶糸の縫紋があつたが、其所までは見ないが、提燈は九曜の星よ、若し車夫さん、今お前さんのお詞で樣子は分りましたが、一人乘ではお困りのやうだ、其の一人は私が送りませうと、詞つきから丁寧で親切だ、有難うございますと、

心から己は頭を下げて、お婆さん安心しなさい、二人で一所に送つて上げるよと、マア病人の方を己の車へ抱き上げた。盲の方を其の人に頼んだが、是は主人の車でございますから　失禮のやうですが、斷つて、車かけや膝かけを、簀蓋の下へ入れて、其所から取り出した自分の袷を蒲團に敷いて、盲と琴を乘せた。……可哄なものよナ、此樣な時も車夫同士は義理があらア、梶棒を上げて、先づお前さんお先へといふと、土地がよく分りませんからといふから、御免なさいと己が先へ出たが、其の時二三人連の書生が、イヨ慈善車夫君萬歳とひやかし半分の贊成には、キヤリとしたよ、車夫君萬歳はねつから有難くないネ、萬年町で家は直に分かつた、是は云はずともの御麁末な住居さ、飛入の其の車夫が送り届けても、まだモヂ／＼して居るから、マサカ賃錢を呉れでもあるまいと、

病人を介抱して居るといふ譯にも行きません、歸りませうと云ふと、私は泉龍町まで、今晩主人の娘御のお迎ひに參りましたのですが、今晩かるたのお催しで、お泊りにおりましたので、空車を挽いて歸りがけでございました。此に今頂いて來た御祝儀が有りますから、少しばかりだが上げて行きたいと、已に對して氣の毒さうに云ふから、夫は結構な事だ、遣つて下さい、眞似をするやうだが私もと二十錢出すと、外へ出てから私が出過たので、貴君に惠金の付合までさせて濟ませんと、御挨拶よ、お婆さんは、二人とも嘸悦びましたらうネエ、悦んだどころか、此の景氣で、病人の方もグットよくなつたと這出して禮よ、隣近所からも皆な出て、歸る後まで禮を浴せられたよ、マア眞個に能い事をおすつてネエ、其の車夫も、眞個に感心な人ですネエ、實に感心よ、已に金を出させまいと、極り惡さうに、祝儀を包ごと出したところは、如何にも車夫にはない大氣な仕打だ、殿樣御自身、慈善の爲に車夫をおさるの丶と思つた。夫は能いが、歸りに何處までも話しながら一所に來るから、お前さんは何處だと聞いたら、本所邊でございますとばかりで、却つて此方の名や所を聞くから、此方も此の近邊とばかりで、合羽橋で別れて歸つた。其の一件で、今夜遲くおつた譯よ、マア能く其所へ左樣いふ人が來合せてネエ、思ひ出すと云ては濟おいが、私の祖母さんも、今夜のお婆さんと同じやうに、お前さんのお世話におつて、……オイお篤、其の話は云出しつこなしさ、夫が緣で、とう〳〵お前を此樣お貧乏世帶に嫁ぶらせて。夫こそ勿體ない、云出して下さるお、貴君も彼の時分、夜だけ車を挽いて、學資にしての御勉强を、私ゆゑに學問もなされず、太郎が出來

てからは、とう〳〵眞個の車夫に……、また愚痴が始まるよ、ソコダ車夫君萬歳のところだ、併しまだお前若エやな、車夫で萬歳も過ぎまいよ、アハヽヽと取付けたやうに大きく笑へば、其の響きにや。庇の雪のドッサリ落たる音の後は、更る夜いとゞ靜なり。



天津籠城中の鄭夫人（七）

森林生記

時に英人は、鄭領事に向ひ、「貴官にお目に懸りたいと云ふ令孃と、少年がありますが、會ふて下さいますか。」と問ふた。スルと鄭領事は、

領事「甚麼云ふお方か存じませんが、お目に懸りませう。」と云ふを、彼は喜んで、間もなく連れ來りしは、英人の令孃と少年で、二人は、鄭氏夫妻に對して、恭しく禮をなし、令孃は、先、口元に愛らしき笑を湛へて、而して、花の如き唇を開きました。

令孃「妾は、英國ロンドン府の醫師の娘、オチリヤと云ふ不束なる者であつて、是なるは、妾の弟であります。まだ、見ず知らずの異國のお人に、突然、御面謁をお願ひ申せしは、此の上もなき無禮なれども、平に許させたまはる樣。」

と、爽に述べる所、其の風姿と云ひ、擧動と云ひ、何となく氣品あつて、流石、世界に文明を以つて誇る、英國の淑女と見へる。

夫人「是は、御叮嚀なるお言葉で、却つて、妾も恐

入ます。貴嬢方は、何か妾共に、御用とのことでムいますが、如何云ふことか承りたく存じます。」

と云ふと、オチリヤ嬢は、暫しの程無言にて、下俯いて居りましたが、稍あつて面を擡げ、

令嬢「妾等、年端の行かぬ身として、差出がましと思召さんが、日本は、此の國と海を隔つとは云へ、他の國に比ぶれば、最と近き邦ゆゑに、妾等他國人にして、此の重圍危難の中に陷り居るもの、誰しも皆、日本國の救援を待ちつゝ居るのであります。故に、日本國の軍隊は、何日頃參りまするや。それを承りたいのであります。」

と姉の詞の終るや、弟の少年は、進み出で、

「日本國のお人よ、吾等幼年の身を省みず、憖ることを申すは、いと無禮なれど其は許させたまはる樣。我等は、日頃、吾父より聞くに、日本は東洋の文明國にして、其の國小なりと雖も、人心義に厚く、勇敢の氣に富めり。後年、東洋の覇權を握るもの、必ずや、日本ならんと、我父は、誠に日本贔負なり。吾等姉弟、父の詞を信ずるが故に、亦、日本を信ぜり。吾々は、自らの信ずる日本軍隊の、一日も速かに來つて、此の危難重圍の中に在る諸國人を救はんことを、希望して止まざるものなり。然るに、多くの他國人の中には、日本を罵つて、人道を知らざる野蠻國なりと惡口するものあり。或は、日本は小國にして、迚も、大軍を出し得る國にあらずなど、いと憎さげに云ふ者あり。今宵に至りては、其の罵詈誹謗も、最早、極度に達し　吾々日本贔負者をして、殆ど、聽くに堪へざらしむ。夫が故に、斯く無禮をも顧みず、敢て、貴夫妻方にお尋ね申すなり。豈夫日本國は、吾々各國人の危殆を他に見捨てゝ、救援隊を送らずに

は居らず。必ずや、派遣するならんと信ず。果して然らば、凡そ、何日頃、當地に來着するや。日本のお人們へは、定めて知れ居るならん。願くば、明かに告げて、吾々を安堵させ玉はれ。」

と、如何にも愛らしく嬌氣なき中に、悲壯慷慨の情を含んで、辯舌爽に問ふたのである。スルと、鄭領事夫婦も、大いに感じまして、

鄭領事「誠に御道理なる、貴兒方のお詞である。他のお人達が、何と云ふて、日本國を罵詈誹謗なさるか知らぬが、日本は、決して人道を知らざる國にあらず。又、軍備も充分あるゆゑ、必ずや、不日に日本軍は、到着するに違ひないです。併し、我々とても、何日に必ず到着すると、確乎したお答へは出來ないが、何でも不日に來るから、それは、御安心下さい。」

と應へると、彼の姉弟は、大いに喜び、「それを承つて、吾々も嬉しくあります。」と云ふたさうだ。

濱子夫人は、オチリヤ孃に向ひ、

濱子「失禮ながら貴兒方は、何日頃から、當地に御滯在なさいますか。御兩親も、定めし御一所でムいませうね。」と信切に尋ねると、孃は、唯「いゝえ」と應へたばかり、後は得云はで、暫し涙汲み居たりしが、良あつて、紅手巾に兩の瞼を押拭ひ、

令孃「好くぞ、御信切にお尋ね下さいました。其のお尋ねにお應へ申すは、心苦しきことなから、答へずば、何、無禮とや思召さん。眞實を申せば、吾等の母上は、黄泉の人、父なる人は、悲しくも空行く雁の音信さへ、絶えて久しき燕京の、いと憐れある籠城者。」

と聞きて、驚く鄭領事も、

「ナニ、燕京に籠城。アノ父上が。それは、定めし御心痛でありませう。お二人の御心情お察し申

しすが、父君は、餘程前から、北京にお出ですか。」

令嬢「いゝえ、ツヒ此の春の末頃からで。……始め父は、日本國の山水秀美なるを愛で、其の漫遊を思ひ立ちて、故郷を出でしは去年の秋、無事に日本へ着したる、郵書の報知のありしまゝ、年は易れど、其の後の安否は、少しも便りなく、吾身等の心配一方ならずして、遂に、姉弟心を決し、遙々、日本へ渡つて見れば、父上、既に日本を去り、支那漫遊の途に在りと聞きて、またもや、日東の帝の國を後となし、朝鮮海の高浪や、渤海灣の荒風を凌ぎ、憂きが中にも、親人に、廻り遇ふ日を樂みと、來りし甲斐もなく、妾等姉弟の天津に着きし其の日は、鐵道も團匪のために破壞され、水陸ともに路絶えて、思ひ焦るゝ父上と、相見ゆるよしのなきのみか、此の身二人の命さへ、明日をも知らぬ今の境界、情も厚き大和人、お察しなされて下さりませ。」

と、露に凋るゝ姫百合の、花も耻らふ風情である。

鄭領事夫妻も、其の情を察して、誠に氣の毒に思つたから、せめて、慰めてなりとも遣らんと、濱子は、

濱子「尊兄方の悲みは、御道理でありますが、然し、モウ近日に救援軍も來ませうから、爾うすれば、北京に居る人々をも救ひ、尊兄方が、懷しき父君にお會ひなさるのも、遠くはありますまいから、氣を落さずにお在でなさいまし。」と云つて、力を附けて遣ると、彼姉弟は、大層嬉しがつたさうであるが、不思議にも、記者は口こそ噺かないけれども、船中で、此の外國人に會つたのである。それは、記者が歸國の途に就いたのは、一昨年の十月

一日であつて、仁川丸と云ふ滊船へ乘込んで、少し沖へ出た頃、竹中中佐の室へ行くと、其の向ふの室に、外國人で、親兒らしいのが三人居て、一人は娘であるが、頗る美人で、事務長に聞いて見ると、「彼箇は、父親が北京で籠城し、二人の子供は、天津で籠城した。其の親兒が今助かつて歸るのだが、頗る、日本贔負の人だから、日本へ立寄つて、保養をして、それから、英國へ歸るのださうだ。」と恁う云ふから、では、若や、天津領事館で聞いた、人達ではないかと思つて、尙好く、尋ねてみたら、果して爾うであつて、記者が時々甲板上へ出ると、其の少年が、船の譚などを書いて居て、覗くと、莞然笑つて、實に愛らしき少年である。此の人達は、船が門司へ着いたら、上陸した。記者は、其の後姿を見送つて居たが、今でも、時々、其少年の愛らしき姿が思ひ出される。イヤ、話頭が、一寸餘事に渉つて恐れ入るが、次回よりは、愈、本編の眼目になります。

家庭童話

三 猫のはなし

五十園德文

猫のはなしをきいた翌日、春雄は、學校から歸つて來て、

『おつかさん、あなたは、私どもに、遠い國の獸のおはなしをして、聽かせて下さる筈でしたね。』

母『さうでしたね。おはなしゝて聽かせませう。たまのお話がすみましたら。………たまは、今、何處にゐますか。』

お花『たまは、今、兒猫を抱いて、箱の内に入つて

ゐますよ。』

母『たまは、良いおつかさんです。大さう、子供が好きで、始終、その番をしてゐます。それで、兒猫が、十分に、自活の出來るまでは、精一ぱいに、氣をつけて、それを保護してそだてるのです。』

猫は、又、自分の子供を、あちこちと運びあるいて、遂には、ほかの者の行くことの出來ぬ天井に、床をつくつて、そこに、その少い家族を安全に、圍ふこともあります。』

お花は、道を隔てた向側の空家の入口にすわつてゐる猫を指して、

『お向のお冬さんの家の猫は、おいて行かれて、まあ、力なさゝうに、がつかりとしてゐますこと！。』

母『私が、今朝、あの猫の、何處か、よそへ行くやうにと思つて、よんで、魚肉をやりましたら、食べて、又、もとの處にもどつてゐるのです。』

『猫は、自分のすむ所を、非常にしたはしがつて、そこを離れるのを、否がるものなのです。たとへ、主人が、外へ移轉して、自分は、後において行かれても、其の邊をはなれません。』

『猫は、又、遠い處へ遣られた時に、もとの家に歸る道を見出すに、不思議な力を持つて居るものです。ある時、夜、五六疋の猫を、籠に入れて、二里ばかり隔つた處へ連れて行つて放して來ましたが、其の内の一疋は、一時間ばかりの内に歸り、ほかのも、夜の明けぬうちに、殘らずもどつて來たことがありました。』

春雄『野や山に棲んでゐる猫もありますかね。』

母『人が、家に飼はない前には、猫は、皆、野生があつたのです。英國では、今でも、稀には、

山猫を見ることがあるといひます。それは、スコットランドや、アイルランドといふ國の山の中に棲んでゐるといふことです。

『山猫は、猛獸です。それで、雞や、飼兎や、野兎などを捕つて食べます。丁度、遠い國に棲む獅子や虎のやうに、夜になると、食物をあさりに、遠いところまで出あるくのです。』

『山猫は、飼猫とは、少し、形がちがひます。其の尾は、飼猫のよりは、短くて、もつと房々としてゐ、脛は、もつとつよくて、頭も、もつと大きいのです。』

お花は、ふと心づいたけしきで、

『あゝ、私の本に、山猫のおはなしが書いてでざいますよ。』

といひながら、起つて、書物を取つて來て、それを開いて讀みました。其の文に

『スコットランドの北の方の旅人が、ある荒原にさしかゝつて、枯れた藪生の間に匿れてゐた山猫に、はからず出會ひました。

山猫は、猛り立つて、つと、人の上られぬ巖の上に、はねあがり、こちらに向いて、大きなおそろしい眼をむぎ出して、旅人を睨まへました。

旅人は、三疋の犬を連れてゐましたから、犬と力を合せて、其の山猫をうちとらうとしましたが、何としても、其の猛獸の立つ處までは、近づくことが出來ません。旅人は、よく繁つた枝を伐り採つて、なほも、猛獸に立ち向ひましたが、其の時、猛獸は、犬の顔の上に、まつしぐらに、飛びかゝつて來ました。

山猫が、宙を飛んで、犬にかゝつて來るその時に、旅人が、これを、うち落さなかつたらば、疑もなく、自分も、犬も、甚しい害をうけたこ

とでしたらう。山猫が、うち落されると、直に、犬どもが、それに、よつてたかつて、到頭かみ殺しました。』

文林

新年梅　　久我建通

あら玉の年のことほきいふひとに
おくれすゑめる梅のはつはな

水雷艇　　鍋島直大

忍びつゝやみのまきれにあた船を
くたくはことにいさましき哉

寒山月　　松浦詮

ふり積る雪のひかりにみかゝれて
かけすさましき山の端のつき

森冬月　　前田利鬯

冬かれしもりの梢にかゝりけり
あらしにさゆる夜はの月かけ

笛　　水野忠敬

たかやとにふきならすらむ笛竹の
いとも妙なるこゑそきこゆる

野冬月　　宮地厳夫

空さむくすみこそ渡れまかみなく
すかの荒野のふゆの夜のつき

冬風　　岡部譲

きつね啼くこゑものすごく月ふけて
かれ野の末にふくあらしかな

窓寒月　　芝葛鎮

霜さやくまとのくれ竹おきふしに
もりくる月のかけそ身にしむ

薄暮雪　植松有經

うす雪のふれる垣根をゆふつきの
影のさすかとおもひけるかな

遣水氷　千葉胤明

やりみつの音はさら〳〵替らねど
物かげよりぞ氷りそめたる

夜氷　岩崎勝從

寐覺して夜さむの程そしられける
てわらふみつも氷りはてつゝ

頼山陽　近衛貞子

わらはしゝやまとの書は大丈夫の
やたけこゝろをひき立てにけり

加茂眞淵　南郷栁子

いにしへのうたの姿もうつりなむ
眞のふちのなかれくみなは

酒　松平健子

月の夜もはなのあしたも面しろく
うきを酒とはたかなつけゝむ

辨内侍　小池道子

わた波を防かれにしをちきりにて
つひに尼ともなりし君かな

竹雪有聲　北島以登子

園もりのゆきうち拂ふこゑすなり
よはわけぬらむまとの竹むら

女學校　岩崎寧子

世のかせにたへむためとて姫松を
をしへのにはにおほし立らむ

社頭杉　坂田泰子

いそのかみふるきやしろの廣前に
神さひたてりすきのひともと

鷺　小川直子

茂りあふもりかげくらき澤みつに

ひとりすこくもさきぞ立つなる

艦隊操練　中島歌子

軍ひとならし野よりもおほ海の
上にきそふかいさましきかな

山家友　河村重子

山ふかくのかれすむ身もたまさかに
とひくる友のあるぞうれしき

新年ほがひの歌　下田春興

あら玉のとしのはしめと
内日さす都大路も
天さかるひなのくまても
わしりてのかなと戸の外に
わか松をねふかくおふし
なよ竹をいたかくたてゝ
高光る日の大御子
安見しゝわか大きみ
萬代にいやとこしへに
わしりてのかなとの外の
わか松のみわかへいまし
なよ竹のなよひいましして
しか枝のさかゆくこと
しか葉のとはあること
ときしくに榮えいまさと
内日さすみやこをはしめ
天さかるひなのはて迄
あら玉の年のはじめを
をろかみておやにかしこみ
ことほきまつる



蘭の若葉

清水橋村

短かき夜

謡たふをやめよ木かくれに
影見えすとも花鳥の
聲は人目にふれやすし

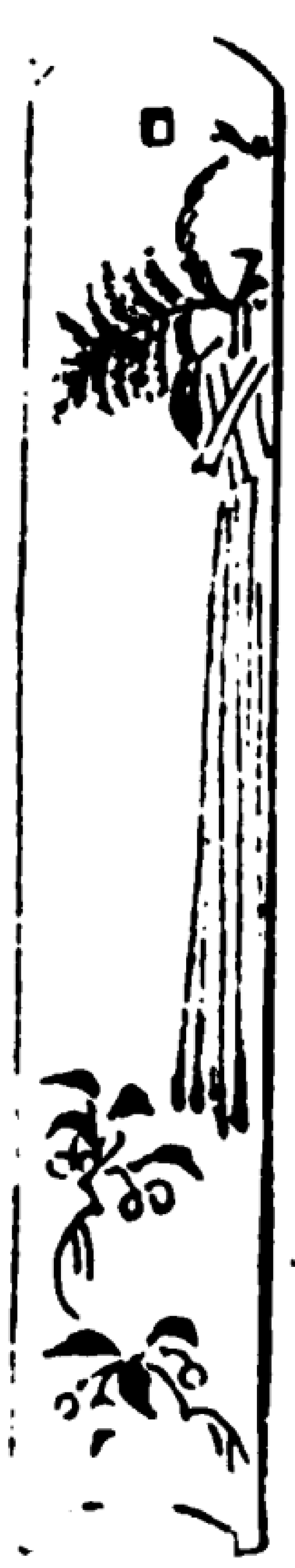
謡ふをやめよ夏の夜の
逢世短きわれらそや

春の潮のわき立ちて
胸は亂るれみたるれは
言ふにもあまる思ひ哉

語らはせめて君とわれ
蝶の夢もや草に得ん

假名かき

小ふすま寒き閨の戸の
すきもる風に眼さめては
涙にしめる假名かきの
文字こそたとれ君か文
契りし人のしはしたに
別れかたきを白雲の
か丶れる山にへたて丶は
文のたよりをよすかにて
思ひかね
肌につけても見つる哉
墨いろにしむ
君かたまつさ



雑報

雲のうへ

●稚松の御製　去年、京都南禪寺なる山縣侯の別莊、無鄰庵竣工しけるに、德大寺侍從長は、勅畏み、「京都別莊落成の趣被聞食、小御所前庭の稚松二株、下賜相成、家門と共に、永く、繁榮候樣にとの御内意に被爲在候。」との書に副へて、件の稚松を賜はりしが、其の根つきいとめでたく、綠の色うるはしうおひしげりて、雪を凌ぎ、龍とありぬべき勢ひあれば、山縣侯は、之を寫眞に撮りて奉れるに、畏くも御製を下し賜はりぬとぞ。

京都の宮庭の松を、いぬる年、山朋におくりけるに、かく生しげりたりとて、寫眞を見せたるによめる。

おくりにし若木の松のしげりあひて
　老の千とせの友とならなむ

侯爵うれしさにたへで、自ら「御賜稚松記」をものして、碑に刻みて、永久の紀念となしぬといふ。侯の歌は、

みめぐみの深きみどりの松かけに
　老もわすれて千代やへなまし

おひしけれ松よ小松よ大君の
　めぐみの露のかゝるいほりに

あつき御めぐみのほど、いともかしこきことになむ。

●新年の御製　天皇陛下には、元旦より五日までに、「新年梅」と「鷄鳴告曉」と、其の外の御題にて、既に百八十餘首の御製をあそばされ、又、御試筆

には、「九天靜處鶴高飛」の古句を、御揮毫あらせられたりと申す。皇后陛下にも、八十餘首の御歌を詠じ玉ひしと承りぬ。

●元旦朝拜　明治三十五年の元旦は、いとよく晴れたりといふにはあらねど、曇らぬ空のおだやかに、條を鳴らすの風もなく、げに、をさまれる御代のさまをあらはしたりき。宮中に於いては、午前四時に四方拜の御儀あるべかりしも、侍醫の奏上によりて、出御あらせられず。御祭典も、岩倉掌典長に御代拜仰付けられしが、午前七時三十分鳳凰の間に於いて、晴の御膳を召させられ、九時、兩陛下御正裝にて、同所へ出御せさせ給ひ、伏見宮、有栖川宮、同妃、閑院宮、同妃、小松宮、同妃、華頂宮、久邇宮、梨本宮の各殿下を始め奉り、宮内省勅任官に拜謁仰付けられ、同三十分、正殿に出御あらせ給ひ、各大臣以下に

拜謁仰付けられぬ。皇后陛下、及び、各皇族妃殿下の裳を掲げ奉つりたるは、左の人々にて、何れも學習院生徒なりと。

濱口正男　板倉勝則　嵯峨實勝
渡邊八郎　尙　昌　岡澤精三
園田滋　壬生基弘　岩倉具重
木下利朗　山口重鑑

●葉山の新年　葉山御用邸御滯在中なる、皇太子殿下には、去る一日午前六時御起床あらせられ、御盥嗽の後御改服の上、御用邸の南庭より、はるかに宮城に向はせられ、うや〳〵しくぬかづかせ給ひぬ。七時御儀式の御膳を召させられ、つゞきて、齊藤大夫、高辻侍從長、村木武官長、其の他侍從武官、侍從、侍醫の方々に拜謁仰付けられ、十一時より金子男爵、及び周布神奈川縣知事、黑岩警部長、榊原横須賀警察署長、横須賀、鎌倉町長等の、ことほぎを受けさせられしといふ。

●●●●●東宮殿下　東宮殿下の御英發は、申すも畏きことなるが、殿下には、御研學の進歩と共に、內外の形勢にも御通曉遊ばされ、特に內外の政事、及び軍事に御留意あらせられ、侍臣の進め奉る數種の新聞紙のみに滿足し玉はず。切拔通信の方法に依り、全國新聞紙の記事をみそなはし給はむとの仰思召により、切拔通信社に、皇室、政治、及び軍事に關する切拔通信を、御下命あらせられしとぞ。

●●●●●●新年の皇孫殿下　伊藤侯爵夫人は、去る四日、大磯鍋島邸にあらせらるゝ　廸宮殿下に伺候したてまつりけるに、殿下は、そをみそなはせられ、川村伯夫人のもとをはなれ、み氣色うるはしう、侯爵夫人にいだかせられたりとぞ。　殿下は、こぞ御轉地あらせられてより、少しも御さはりなくことに、み心すぐれさせ、稱痘のごときもいとかろらかに渡らせたまひ、參候のひと〳〵拜謁おはせつけらるゝ毎に、常におんよろこばしさ、み顏にあふれ給ふ。

●●●●●宮中の新年宴會　去る六日正午、宮中に於いて、新年の御宴をひらかせらる。　兩陛下には、竹の園生の御かた〳〵を始め奉り、百の司、位、たかき人々に拜謁おはつけられ、　天皇陛下にはあまたの式部官を從ひさせられ、御式場なる豐明殿に出御あらせらる。桂總理大臣をはじめ各國使臣にいたるまで、おごそかに立ちて、最敬禮を表しけるに、　陛下は、玉音朗かに、左の御趣意の大詔を賜りたりと承りぬ。

朕、新年の佳辰に際し、內外臣僚と共に、此の宴を共にするを喜ぶ。

かくて、桂總理大臣は、もろ〳〵の臣僚にかはり、つぎのごとき奉答をなしたりとぞ。

新年の佳辰に當り、親しく臣等を召され、饗宴を賜り、且優渥なる勅語を拜し、臣等恐惶の至りに堪へず、臣、群臣を代表し、恭しく、陛下の萬歲を奉祝す。

みぎをはりて、我が國、駐剳各國公使のうち、最も、古參なるスペイン特命全權公使、ドハレラ氏は、外臣一同を代表して、佛語にて、左のごとく答へまつりしといふ。

外臣等、新年の佳節に當り、親しく宮中の饗宴に召され、且優渥なる勅語を下さる。謹んで外臣一同に代り、陛下の萬歲を祝し、併せて、皇室の益々御繁昌に赴かせらるゝを慶し奉る。

こは、戸田式部次長の譯して、奏上したてまつりたるものなるが、陛下には、ことの外御滿足におぼしめさせられけるとぞ。さて、陛下の御座につかせたまふや、一同、定まりたる席につき、御宴を始めけるに、うるはしき音樂のうちに、陛下は、皇族殿下、及び、公使等と親しくさまぐ\の御物語あらせられ、一時ごろ、再び、もろく\の人々を從へさせ、御入御あらせられぬ。皆、十二分の歡をつくし、同三十分ごろより、宮中を退下せりと。

●●●●●

●御講書始め　去る七日は、年のためしとて、宮中にて、御講書始めを行はせられけるに、天皇陛下は、德大寺侍從長、田中宮内大臣、以下をしたがひさせられ、鳳凰の間に出御あらせられ、左の進講を聞召されたりとぞ。

英國々會改革の顛末　文事秘書官長　細川潤次郎
日本紀卷の三　東宮侍講　本居豊穎
書經大禹の篇　仝　三島毅

また、葉山御用邸にあらせらるゝ皇太子殿下には、同じく八日、御用邸の表御殿において、御講書始めの御式を行はせられ、本居侍講は、萬葉集の一節、三島侍講は周易、三田侍講は、ピーター帝の御逸事を進講したてまつり、をはりて後、一同に御祝酒をたまはりたりといふ。

●松の緑　梅が枝をかざしにさゝば、老のかげさへかくるゝとかや。まいて、松のみどりの色かへぬ常磐のかげにやすれらへば、千歳の坂も、おど越えられざるべき。畏くも、皇太子妃殿下が、いまだ幼くおはしましける頃、東京府豊多摩郡和田堀内村の、おんほとりにいらせられにしかば、昔おぼゆる野山の忘れがたくやおはしけむ。日うららかなるにそゞろ歩きしたまひ、かしこの木蔭に若艸を摘み、こゝの流れに、笹舟うかべつるも、早う過ぎぬる世の夢なりけるよ。など忍ばせたまふ御事、いとたふとかれど、そのわたりの村人の譽はさることながら、いたくも喜びあへるあまりにや、こたび、妙法寺の近かきところ／＼に、ふた本の姫小松を植ゑあらべ、千代に八千代に榮ゆべき、君が御稜威の天地と共に、極りなきにたぐへて、御ことほぎの意をこめたてまつり、新らしき年の三日を、天つ御神のみ心にも協ふべき、生日の足日と定めまつりて、その御祝ひをぞ行ひけるとぞ。あはれ、めでたきことならずや。

●桐の間御飾棚　宮中桐の間正面、高御座の左右に飾らせらるゝ對の御棚は、かねて、日本漆工會社へ調進をおほせつけられ、保井抱中氏擔任して、專ら、それに勉められしが、美しう出來にしかば、去年の末つ方、之を上納したりとぞ。その御棚の木地は、奈良新薬師寺の古材、凡そ、千百余年を經たる檜の柾目にて、木地師は岩本峯造氏、塗師は小宮桑吉氏、蒔繪はすなはち保井氏なり。上部を四枚戸の袋棚とし、中央は違棚、下部は二枚戸の袋棚とし、奥行一尺五寸、高さ四尺三寸、横は一尺にて、地は總黒臘色、蒔繪は、桐大柄の高繪蒔にして、葉には金切金を施し、幹は、荒き金胡粉に金平目地の霞をあしらひ、棚板の裏は金梨地

柱、縁などは平目地蒔繪、御金具の赤銅、及、金覆輪菊唐草は、海野勝珉氏の彫りたるにて、頗る精巧を極めたるものなりといふ。

●献納の繪畫　京都なる華族は、講學講習所を設けて、以前より生徒を養ひ居けるに、畏きあたりより、毎年二回、その繪畫をみそなはさるゝのあつき大命を蒙り、皆感奮して、この頃、そが中にて善きものをえらみて、献納に供へたるが、すなはち、左の八幅なりとぞ。まことに名譽のことゝいふべし。

○梅に鬪東尾長の圖、子爵六角玄通　○秋景山水、同豊岡圭資　○晩秋野景、同八條隆正　○殘嵐小禽、伏原絡　○白椿桂鳥、山本公親　○雪中牡丹、山本公之　○菊花の圖、持明院哲謙　○梅水仙、中園秀雄

●柳澤伯母堂の逝去　舊大和郡山藩主、柳澤保惠伯の養母、明子刀自は、かねて、病にかゝられしが、去る七日、五十七才をかぎりとして、つひに逝去あらせられぬ。御一門のなげきはさらなり。皇后陛下の御心のうちやいかなりけむ。刀自は、九條忠香公の長女におはし、皇后陛下のおん姉君にわたらせられ、つとに淑徳のほまれ高く、おん行ひ、つねに嚴肅のきこえありき。ことに、下をいつくしむこと慈母の赤子におけるがごとく、かつは、人をしるの明に富みたまへるからに、いやしきはしためにいたるまで、あつきしたはざるものなく、家のうち、長へに、春風ふきたらむやうなりき刀自の朝な夕なのおきふし、必、定まれる時ありて少しもたがふことなく、さふらひのもの、時辰儀にさへかへたまひ、御食膳、さては調度のごときたゞ〳〵質素をのみむねとせられ、いかなる品をまゐらすればとて、決して、み氣色をそこなひしことなしとぞ。げに、一般婦人のよき摸範とこそい

ふべけれ。
刀自は、　皇后陛下のたゞひとりのおんはらからにおはし、おんなからひいと睦く、刀自のやまひにふさらるゝや、岡侍醫局長どもして、つねに拜給せしめ、御容體を伺ひまゐらせしと申す。友愛の情、いともかしこきことになむ。

梅のかをり

●孝子　忠孝をもとゝして、建國したる御國のことなれば、古より、數へあへぬまで多かれど、まのあたり、かゝる孝子のあらはるゝこそ、あか〳〵にうれしけれ。茨城縣土浦町に、柳町竹四郎といふ人ありけり。永の月肺病を煩ひける末、つひに、去年十月歸へらぬ旅に赴きぬ。その後は、妻の阿久と、おさなき三人の子供を合せ、一家四人の暮しにて、さなきだに貧しさ洗ふがごとくなるに、たよるべき人を失ひしより、ひときは活計の道にも差つかへ、阿久の心をいたむることひとかたならざりしかば、僅か十三歳の喜久は、けなげにも母を勵し家のなりはひなる豆腐の製造をなしゐたるが、そのさまのいと哀ありければ、阿久は、母の身として、之を見るに忍びず、かゝる貧しき家におかむより、せめて奉公になりとも出ださむには、かれも、今の苦みなく、家も一人の糊口を減ずればとて、逢ふ人ごとに、そのことを計りて、ひと時も、わが子の幸かれと思ひけるを、喜久は、之を聞き、おのがおさなくて、物の役にも立たざれば、さることをおすあらむと押しはかりけん。其よりは、朝なはくらきに起きいで、かひ〴〵しく母を助けて、豆腐をつくり、之を終へなば、いこふ事なくやがて箱につめ、小さき肩に負ひて、あどけなき聲を振しぼり、町をうり歩むさま、いとゞけなげあり

しかば、人々これをきゝ傳へて、同情の涙をながし、喜久の商ひに來るをまち構へて、買ひ求むる樣になしければ、益々、これを褒めたゝふるもの多きのみか、商ひもいよ〳〵廣くなりゆきぬ。さて、喜久は、家にかへりて、母の喜ぶを、こよなき樂みとなし、この寒空に少しもたゆまず、なりはひに力を盡し居れりとぞ。

あはれ、風さむく雪もつもらむずる冬の日は、暖かき爐邊にうづくまるならひなるに、まだしき身にありながら、その寒さをもいとはで、殆ど、おのが力もて、一家を保ちゆくこそ、いみじき心ばえなんめりかし。

●孝子●● めでたき年の初めにあたり、つぎ〳〵に孝子のいづるぞ、大御代の光くまなきしるしなりける、埼玉縣北葛飾郡幸手町に、増田半次郎といふ人あり。青物を商ひて、貧しきがうちにも、長男松二郎の敎を怠らざりけるに、その後、ふとせしことより、益、貧苦に迫りしを、年端もゆかぬ松五郎は、之を見るにたへで、朝な夕な、よく兩親の手助けをなし、わづか十二才の遊びざかりを、骨もくだけむばかり働くより、あたりの人々、賞めたゝへざるものなく、かの鈴鹿の孝子にも、をさ〳〵劣るまじなどいひはやし、おのが子女の誡めには、必、引きいでつべうなりつるに、増田の家運いよ〳〵衰へしかば、いづれもこれをいとはしく思ひ、互に義捐して二百余圓をとゝのへ、之を銀行に預けしめ、かつ一方には、同郡長より、知事にむかひて、褒賞授與の儀を具申したりといふ。實に心地よきことゝいふべし。

●愛國婦人會●●● 去年、この會を創立せし以來、全國各地にて、賛同するもの頗る多く、昨年の末の調べによれば、本部及び支部をおはせて、會員、既に一萬六千餘人に達するの盛なるにいたれり。さて、さる十五日に、九段牛が淵本部にて、評議會を開き、事務上のうち合せをゝはりて、新年祝賀式を行ひたりといふ。

●落葉籠　記事輯輳につき、やむを得ず、また休載せり。次號誌上には、大に盛大となさむのつもりなれば、奮つて、諸媛の投書を望む。

陽德院夫人御消息の解（題字參看）

御消息の書き出しに、「けふかちやうのいわゐ」とあるは、嘉祥の祝なり。陰暦六月十六日に、疫を祓ふとて、貴賤、菓餅等、數十六を供へて食ふ事を云ふ。此の事、仁明帝承和十五年六月、神告に因つて、嘉祥と改元ありて、始まれりと。又一說には、後嵯峨帝の時、宋の嘉定通寶錢を用ゐられしに初り、故に、嘉定の字なりと。俗間にては、錢十六文を以つて、食物を供ふるなり。宛名の「ゑちせん殿」は、嫡子越前守忠宗卿、仙臺藩第二世なり。

社告

懸賞和歌募集

東久世伯點評

題　都立春　二月五日〆切

すべて投稿するには、必、投書式によるべし。

賞品
- 天　土佐日記燈　富士谷御杖大人述
- 地　女子文章軌範　指原乙子女史編
- 人　女子の本分　三輪田眞佐子女史著

女鑑歌文月次兼題

二月五日　一月廿四日〆切
歌　山霞
文　紅梅を乞ふ文

二月廿日　二月九日〆切
歌　朝鶯
文　餘寒見舞の文

三月五日　二月廿日〆切
歌　故郷柳
文　希望

三月廿日　三月九日〆切
歌　夜春雨
文　學校の樣子を問ひ合されしに答ふる文

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○天地人を取りし人には賞品を呈す。

附録

ひとゝせものがたり

ひとゝせものがたり（下）

（口繪參照）

七月　中納言朝忠

ふぢの舍

朝忠は、名にしおはゝ逢坂山のさねかつらの歌を讀みたる三條右大臣の御子也。その性質人にすぐれて、唐大和の書はさらなり。よろづ學びの道にくらからず。かつ、すがたなよやかに、かたちもなか〳〵にうるはしきからに、みかどの御おぼえやむごとなく、世の聞えも高かりけり。つねに、笙の笛を好みて吹かせたまひけるに、中納言になりてよりは、體、肥えふとりて、息ぐるしう、立居さへまゝならざりしかば、いたくうれひわづらひたまひ、醫師重秀をまねきて、やせ細るべき藥もやあらむかと問はるゝに、わけてさるべきものあらねど、冬は湯づけ、夏は水漬にて、おものをめさるべきよし答へければ、そのをしへに從ひてけるに、たゞ、ひたふとりにのみふとりゆけば、いまはせんすべなくて、再び重秀をよびて、いましが教へつるやう食事を試みたれど、少しもそのしるしなし。このうへは、何とせましとおほせらるれば、頭をかきつゝ、さてまた答へけるやう。おのれの申し上げしごとくなされたらむには、曾てふとるべき筈なきに、さはいかなる故にかあらむ。まづ水づけはいく切つゞ召上られしや、承らまほしといひければ、さらば、まのあたり食するを見よとて、やがて、さぶらひめして、膳盤をとゝのへさするに、みごとなる鮎に、はゝ爪めきたる

ものを、山のごとく器に置かせ、金椀に飯たか〴〵ともりあげ、わづかばかりの水をさゝせ、箸をあげて、二かき三かきせしよと見れば、こと〴〵くゝひ盡し、また、前のごとく、ひきかへ取りかへ、しばしの間に殘りすくなうなりぬ。そのめざましさたとへんかたなし。重秀このさまにいたくあきれて、たとひ、水ぐひなればとて、かやう數かぎりなくおびたゞしからむには、いかでか肥えふとらではあるべからずとて、そのまゝ立ちて歸られたりとぞ。からの張齋賢のたぐひなるべしや。

あはれ、このふるごとこそ、一時のたはぶれに似たれ、區々たる細事にかゝはらず、あどけなくおほらかのあとの忍ばれて、おもしろし。されど、こは男子のことなり。女子とて、すべてこまかきふしにまでゆきわたるうちにも、寛容の德なからむには、などて、まことしき婦人といはむや。

八月　西行法師

鐵軒居士

よしや君むかしの玉の床とるもかゝらん後は何にかはせん。とは西行法師が、讃岐の白峯なる崇德天皇の御廟に詣でし折に、詠ぜし所なり。白峯寺の緣起には、此の歌を神前へ捧げしに、御廟震動せし由を記しぬ。天皇の神靈も、道理と思召し玉へるにやあらむ。最も尊し。(此の緣起は、應永十三年七月、淸少納言入道常憲之を草し、侍從宰相行俊の淸書せしものなり)辛丑の春、居士讃岐に遊び、綾の松山に登りて、崇德天皇の御陵を拜し、白峯神社に詣づ。社前左の方に、西行法師の石像あり。丈二尺二三寸、右脚を竪て、左脚を横へ、右手を膝に置き、左手に念珠を執る。眉濃く鼻隆く、顏瘦せて顴骨高く露れ、眼光人を射る。超世出塵の

風骨、別に一種犯し難き威容を具へ、文武兼備の名士、佐藤義清の昔偲ばれて、西行其の人は、斯くありしならんと想像せられたり。高雄の僧文覺、平生西行を悦ばずして曰く、彼は僧侶の道業を修めず、四方に周遊して吟詠に耽る、實に釋門の賊なり。吾之を見ば、必ず擊つて其の頭を破んと、一日西行高雄に抵りしに、文覺與に語りて、大に歡ぶの狀ありしかば、弟子等怪しみて、師、前には凌辱を加へんと言ひ、而も今、此の若きは如何なる故にやと問ひしに、文覺答へて、爾曹、西行の狀貌を見ざるか、彼固より我に毆たるゝ者にあらず、却つて、將に吾を毆たんとする者なりと云へる由。是等を思ひ合するに、石像は能く、其の眞を得たるものなるべし。本誌に揭げし圖は、西行一夕、大將軍賴朝に見えて、弓馬の道を談し、翌朝辭し去るに臨みて、賴朝、銀製の猫兒を遺りしに、之を受け、門前に遊戯せる兒童に拋げ與へて、飄然立去るの狀なり。彼が洒脫の風、神を描き得て、紙上に奕々たり。今此の圖に對して、端なく讃岐の曾遊を思ひ出し、まゝ筆を執りて、數言を題しぬ。

九月　小督局

木邊もと子

小督局は、高倉の帝のおほん時の女房なり。そのかたちのうるはしさ禁中ならびなく、琴のしらべさへことにたくみなりしかば、主上の寵愛いとふかかりければ、平清盛、おのが女の時の中宮なりしをもて、大に之をいかり、遂に、これを失ひたまはむとぞしたりける。局、わが身のみならず、主上のうへもおぼつかなしとて、みやこの奥なる嵯峨のほとりにかりほをかまへて、世にわびしくも過ぐさせたまふ。主上戀々の情やみがたく、即、仲國を使として、そのいほをとはせけり。その事、平家物語

にっまびらかなれば、左に、

まことや、法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、參り給へることもやと、そなたへ向きてぞあこがれける。龜山のあたり近く、松のある方に、幽に琴ぞ聞えける。峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる內に、琴をぞ彈きすまされたる。控へて是を聞きければ、少しも混ふべうもなく、小督の殿の爪音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫を想ひて戀ふと讀む、想夫戀といふ樂なりけり。

仲國さればこそ、君の御事思ひ出で參らせて、樂こそ多けれ、この樂を彈き給ふことのやさしさよと思ひ、腰より横笛ぬき出し、些とならひて、門をほと〳〵と叩けば、琴をば彈き止み給ひぬ。是は內裏より仲國が御使に參りて候、あけさせ給へとて、叩けども叩けども、咎むる者もなかりけり。やゝありて、內より人の出づる音しけり。嬉しと思ひて待つ所に、錠をはづし、門を細目にあけ、いたひけしたる小女房の、顏ばかりさし出でて、是はさやうに、內裏より御使など賜はるべき所にても侍らはず。若し門違へにてぞ候ふらんといひければ、仲國返事せば、門たてられ、錠さゝなんずとや思ひけん、是非なく、押し開けてぞ入りにける。妻戸の際なる椽にゐて、御故に思し召し沈ませ給ひて、御命も既に危くこそ見えさせましまし候へ。かやうに申さば、上の空とや思し召され候ふらん。御文を賜りて參りて候ふとて、取り出で奉る。ありつる女房取りつぎて、小督の殿にぞ參らせける。是を開けて見給ふに、實に君の御書にてぞありける。やがて、御返事書きて引き結び、女房の裝束一襲添へてぞ出されたる。仲

國御返事の上は、とかう申すに及び候はねども、別の御使にても候はゞこそ、直の御返事承らでは、いかでか歸り參り候ふべき、と申しければ、小督の殿、實にもとや思はけん、れ自ら返事たまひけり。

そこにも聞き給ひつらんやうに、入道あまりに、恐しき事をのみ申すと聞きしが、あさましさに、或夜竊に忍びつゝ、内裏をばまぎれ出で、今はかゝる所住居なれば、琴彈くこともなかりしが、明日より大原の奥へ思ひ立つことの候へば、あるじの女房、今夜ばかりの名殘を惜しみ、今は夜も更けぬ。立ちきく人もあらじなどすゝむる間、さぞや昔の名殘もさすがゆかしくして、手馴れし琴をひく程に、安うも聞き出されけり。などて、御涙せきあへ給はねば、仲國もそゞろに袖をぞ絞りける。やゝありて、仲國涙を抑へて申しけるは、定めて、御樣などもやかへさせ給ひ候はんずらん。然るべうも候はず。さて君をば何とか參らせ給ふべき。ゆめ〳〵叶ひ候ふまじ。相構へて、此の女房、出し參らすなとて、供に召し具したる、馬部吉上など止めおき、其の屋を守護させ、我身は寮の御馬に打ち乘りて、内裏へ歸り參りたれば、夜はほの〴〵とぞ明けにける。仲國、やがて寮の御馬つながせ、女房の裝束をば、はね馬の障子に打ちかけて、今は定めて御寢もなかりつらん。誰してか申すべきと思ひ、南殿をさして參るほどに、主上は、いまだ夕の御座にぞましましける。南に翔り北に向ふ閑雲を、秋の雁につげがたし。東に出で西に流る、只懺法を曉の月によすと、御心細げに打ち眺めさせ給ふ所に、仲國つと參りつゝ、小督の殿の御返事をこそ參らせけれ。（平家物語の一節）

かくて、宮中によびかへされしが、平相國にとらへられ、尼になされておひはなたる。主上これをうれひたまひ、遂に夭うかくれさせたまひしかば、濃き墨染にみをやつし、後世を弔ひて、嵯峨野の奥にすまひけりとなむ。いとも、ゆかしき心ばえなり。

十月　博雅三位

黒金子

霜氣空に滿ちて、寒月影淡く、老樹葉落ちて枯草徑を埋む。四顧寥寂唯虫聲の喞々たるを覺ゆ。一個の茅屋、擔傾き壁壞れ、闃として主なきかを疑ふ。一人の公卿戸外に佇立し、耳を欹て丶聽く所あるもの丶如し。是れ博雅三位が相坂に蟬丸の草庵を訪ふの圖なり。傳に云はく、蟬丸は、宇多帝第八の皇子、敦實親王の雜色なり。兩眼物を見ず、和歌を善くし、又琵琶の妙手にて、其の曲に、流泉啄木と名くるものあり。殊に秘して彈ずることなし。時に三位源博雅も、亦琵琶に專精なりしが、常に其の秘曲を得んと欲して、蟬丸の隱棲に往き、窺ひ聽くこと三年に及びしも、嘗て彈ずることなし。一夜月曇り、風凄きに乘じ、例に依り、往きて之を伺ひしに、蟬丸忽ち盤渉調を彈き出しぬ。三位宿望を達するの時至れるを喜び、只管其の秘曲に及ばんことを冀ひしに、蟬丸聽て撥の手を止め、蕭然として嘆息し、嗚呼其の人なき哉、誰か當に此の靜夜を共にして、心事を語るべき者ぞと言ふ。其の時、三位聲に應じて出で、名を通じ、且、具さに向來の事を語りしかば、蟬丸も其の篤志を感じて、悉く秘曲を授けしと云ふ。此の圖の妙は、蟬丸を寫さず、唯三位と其の四圍の景色のみを描きて、大絃小絃嘈々切切、

盤上珠を轉ずるの聲あるを想像せしむるにあるあり。凡そ如何なる技藝にても、其の閫奥に達し、精妙の域に躋らんとせば、異常の艱苦に耐ゆるの精神なかるべからず。琵琶は一遊技に過ぎざれど、三位は其の秘曲を得んとして、三ヶ年の久しき、蟬丸の草庵を訪へり。其の忍耐艱楚、常人の能く耐ふる所にあらず、遂に一代の名手となりしも、亦宜なる哉。區々の遊技する猶斯の如し。況や、是より大なる學術を研究せんとする者、忍耐心なくんば、爭でか能く其の目的を達することを得んや。三位の事蹟、假りて以つて、教育界の指針となすに足るものあり。讀者願くは、匆々に觀過し玉ふこと勿れ。

十一月　狩獵

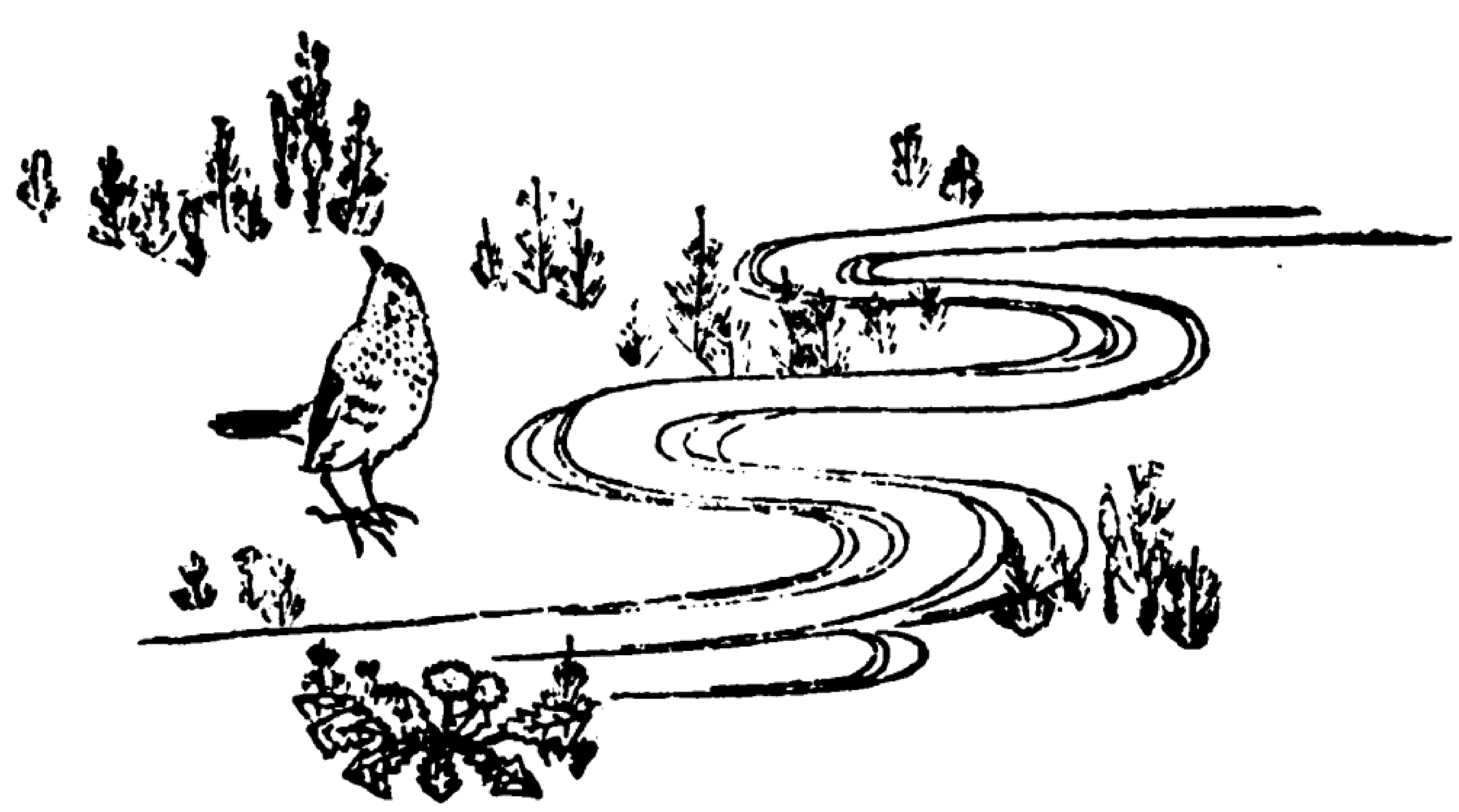
福富幸子

このねぬるけさの朝けに
　もの丶ふの益荒猛雄か
わかこまにした鞍おきて
　雄々しくも弓矢取もち
雪ふかき野みちを分けて
　枯はてし草ふみしたき
あさりする小鳥やねらふ
　しもさやく堤にたちて
いけ水のこほらぬかたに
　むれ遊ぶ鴨をやねらふ
吹すさふかせにきほひて
　引はなつゆつるのひゝき
　　高くきこゆる

十二月　最明寺

不愧庵

一郷の牧民官としては、この人、或は適任ならん。大局に立ちて、政權を行ふべき技倆は、認められず。菲薄身を持し、行脚までもして下民の疾苦を問へる、事や奇とすべきに似たりといへども、畢竟是れ瑣事、未だ許すに國器を以つてすべからじ。思ふにこの人は、本を遺れ末を修め、終生齷齪として、一も成すところなし。北條氏の久しからずして、潰然覆没を速げる所以なり。寧そ、鎌倉の執權などいふ派手なとこを遣らずに、潜心禪道を修め、自得する所を擧げて、一宗を開きもせば、後世、同情者を得る、却つて衆かりしやも知るべからず。然るにこの人、志此に出でずして他を求む。時頼は矢張どこまでも時頼なり。妄言多罪。



ひとゝせものがたり（終）

●感化生入院の依賴に應す

本院の感化生は、滿八年以上十八年以下とす。在院中、中學、小學、農業、工業の各科とも教授す。

本院の入院生は、自費生、給養生の二種あり。本院慈善會員の紹介あれば、給養生の入院を許す。

東京南豐島御料地澁谷村羽澤
東京感化院

至急稟告

從來、小生の編輯致居候、女鑑、今般、國光社出版部に於いて、編輯發賣致すやう相成、すでに、事務一切引續きを終り候間、爾今、編輯に關する書類、すべて同部へ宛て、御送り下され度候

田島利三郎

株式會社國光社出版部發賣圖書目錄

三版

單級式作文教授書

岡五郎廣瀨爲四郎序石川榮司著

全壹冊　定價金參拾錢　郵稅金四錢　郵稅代用一割增

天朝正學

從六位内藤耻叟序故正三位文學博士栗田寛著

菊版定價金參拾五錢　美本郵稅金四錢　全壹冊　郵劵代用一割增

家庭歌訓 修身百首

杉谷正隆編

菊版定價金貳拾錢　美本郵稅金四錢　全壹冊　郵劵代用一割增

日本米穀之將來 及米價變動の原因

●伯爵副島種臣題辭　●富田鐵之助序文
●文學士濱田健次郎校閲　●岡勇次郎著

全壹冊　定價金參拾錢　郵稅金六錢　郵劵代用一割增

第三版

信用組合提要

故品川彌二郎平田東助合著

全一冊　一部金五錢　郵稅二錢　郵劵代用一割增

福羽美静大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全壹冊
和装美本
定價金卅錢
郵稅金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至るを九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相模、阿佛尼、鵜殿よし子、弓屋しづ子、三島そや子、荷田蒼生子、西三條條實公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内荻子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち每葉に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる終身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必らず無比の好伴侶たらん

紅塵庵俗禪譯

四版

清風秀美高優節雅 國の譽 獄の花

神氣清潔なる一名士が國事上の冤罪に座し黑暗の裡を悲傷殘忍暗澹なる鐵窓の下に苦悶するに當り高尚優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を援精救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物は古今無比の至花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀式の下に最清淨なる結婚を爲すに至る嶄新奇警高尚なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が清淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

彩色優美口繪挿繪入
總クロース製美本
金文字入 全一冊
正價金五拾錢
郵稅金八錢

再版

伯爵副島種臣題字 堀内文麿編

家庭の鑑

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の褒綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むか如く身恰其地にありて其境に臨める感あり世の教育家父兄及子弟婦妻の座右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦た此種の冊子を備へざる可らず

菊版美本全一冊
定價金拾八錢
郵稅金四錢
郵券代用一割増

第五版

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵劵代用一割增

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや九版忽ちに賣盡し十版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を說く溫厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり本書亦版を重ねて五版に至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子敎育に重大なる責務ある敎育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を揭げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

目次

國光社編纂

抄譯獨逸讀本

定價金貳拾錢
郵税金四錢
郵劵代用一割増

武井義述

執中考

和裝紙半本全壹冊
定價金貳拾錢
郵税金貳錢

武井義述

執中考附言

和裝半紙本全壹冊
定價金貳拾錢
郵税金貳錢

日本教育

菊版全一冊
定價郵税共金貳拾五錢
郵劵代用一割増

濱口吉右衛門著

財政と國力

全壹冊
金貳拾參錢
郵税金四錢

井上頼圀校訂 小澤政胤編著

慶長以來國學家畧傳

洋裝八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢

郵税十里以內七錢百里以內十三錢百里以外廿四錢

伯爵副島種臣題詞 西澤之助著述

列國干渉論

洋装定價金參拾錢
全一冊郵税金四錢

伯爵副島種臣先生題辭
從二位尾崎忠治先生題辭
鹿川宮内默藏先生著述

王學指掌

全一冊洋装美本
定價金壹圓
郵税金拾錢

大林弘一郎先生著

中等國文學史

全一冊洋装美本
定價金六拾錢
郵税金八錢

國際貿易論

定價金六拾錢
郵税金八錢

注文略規

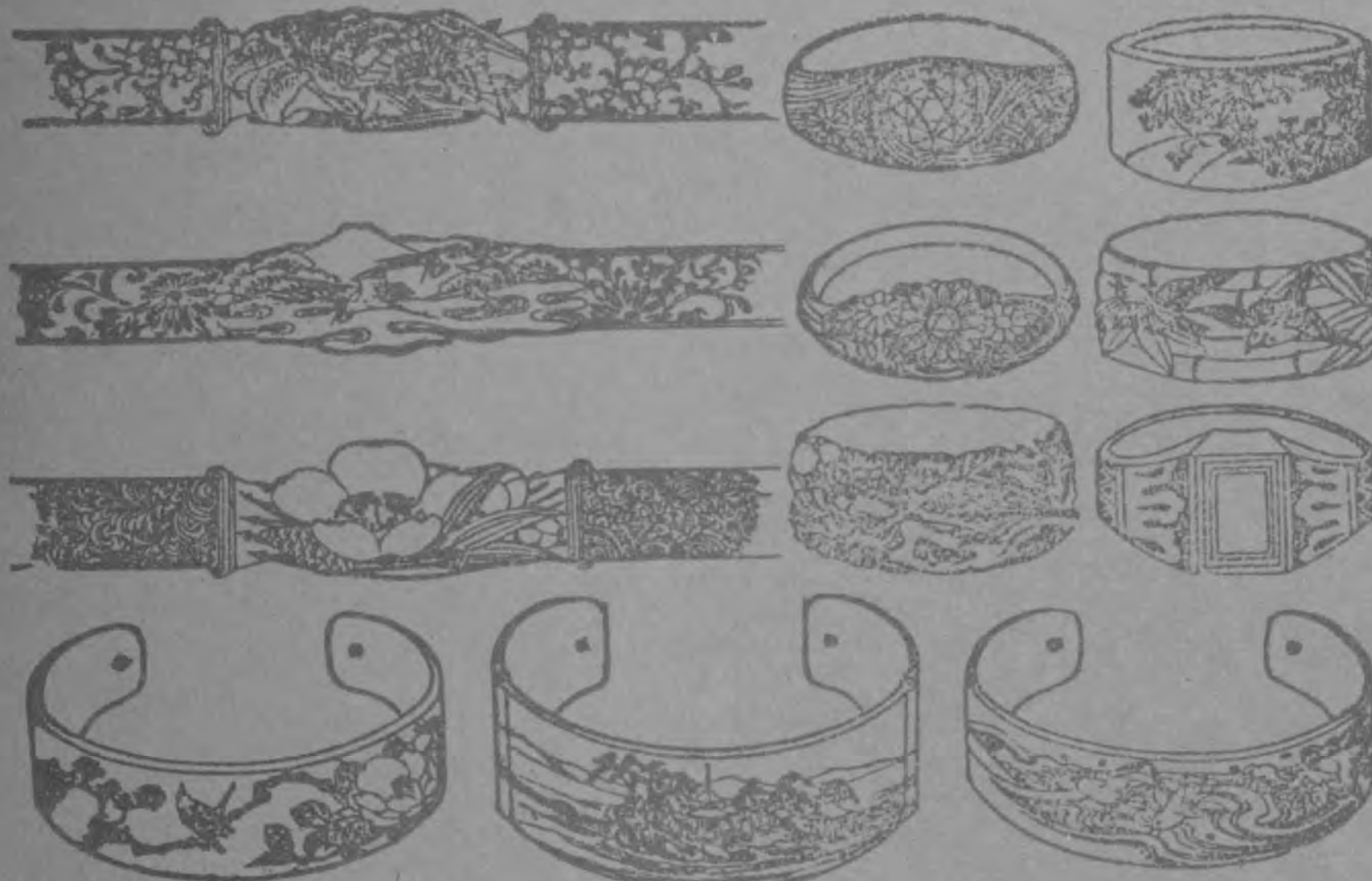
○圖書雜誌は都て前金にて御注文の事
○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事
○郵券代用は一割增壹錢參錢の切手に限る事
○郵便爲替は東京「新富町」郵便取扱所へ御振込可被下事

發行所
東京市京橋區築地貳丁目廿二番地
株式會社國光社出版部



東京風俗志

吉沼製作品



金製指環

十八金二匁五分付片切彫
甲價 十六圓
乙價 十四圓

廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形狀ノ繁簡ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

十八金製高彫[illegible]付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓十錢
乙價 九圓三十錢

廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

十八金三匁付蝶香付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

廿金三匁付蝶香付三ツ平象嵌片り彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻　應貴囑

右の外金盤の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精麤により代價に高低の品々あり

東京築地[illegible]丁目株式會社國光社印刷部印刷